
22ジョーカー

蜂夜エイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

22 ジョーカー

【Nコード】

N2516Y

【作者名】

蜂夜エイト

【あらすじ】

ジョーカーマシンと呼ばれる人型駆動兵器を用いた“第三次世界大戦”。その戦役で“英雄”と呼ばれた男は、戦争が終わると同時に隠居してしまう。

時は流れ、半年後。“英雄”の隠居する屋敷に望まれざる来客が訪れた。

見たことの無いジョーカーマシンと共に現れた女、フェアア。そして、それを追う謎の組織。

“英雄”、リヒト・シュッテンバーグは再び戦うことを決意する。

全てを知るために、そして抗うために。

見所は中学二年生の能力が付加されたロボット。多分魔術系統のロボット寄り。タロットとか知っているとニヤニヤ出来る、と思う。

設定画などの置き場所

> i 3 6 3 7 2 — 4 5 5 6 <

主人公機であるグライNDERの設定画。

線画は友人の兄二氏に依頼し、書いて頂きました。
今度肉まんでも奢ってあげたいと思います。

色塗りは自分が担当したので恐らく、ってか、見て解るとおりの
アレさですね。

アニメ塗りってやっぱり難しいね。

やっぱりロボット物は挿絵とかの絵が無いと分かり辛いものがあるから、書きたいとは思ってたんですよ。

しかし自分が書いてみたら、あんまりにもこういうロボットが書けなくて挫折しました。

実は四肢のバイパスは設定画の時点で追加された武装です。
やっぱりこういうのの発想はセンスが必要なんですかね？

さて、そろそろ200字行ったかな……。

プロローグ

焦土と廃墟が立ち並ぶ、土色の戦場。
彼はそこに立ち、最期の音を聞いた。

『——戦！停戦協定が結ばれました！』

電子ノイズと共にその言葉を伝えるスピーカー。
荒れ果てた戦場に一人佇む男は、静かにそのスイッチを切った。
狭いコックピットの中で、自嘲気味に笑顔を浮かべる。

「やれやれ、人殺しは御役御免か。意外と早かったな」

その皮肉に答える者は居ない。

何故なら、彼の周りには既に生きている存在が居なかったためだ。
あるのは焼け焦げた土地と、砕けた鉄色の破片。

それは、ジョーカーマシンと呼ばれた人型駆動兵器の残骸である。
味方を識別するためのカラーバリエーションも、全てが炎により
橙色に染まっていた。

「世界大戦も終り、俺は無職……」

世界に齎された新たな技術と要素によって生み出されたジョーカー
マシン。

それは世界に第三次世界大戦を引き起こした。

しかし、それも最早過去の事。

今は、何も考えていなかった明日の食い扶持を如何にするかで頭が痛い。

「やれやれ——つと、通信か」

それは旧知の仲であり、今は別の戦場に居る筈の仲間からのものであった。

しかも、同時に二つ。

苦笑しながらも通信機器のスイッチをオンにすると、途端にけたたましい歓声が聞えてきた。

最も、それはノイズのような音であることから、バックグラウンドミュージック代わりの喧騒なのであるう。

『——リヒト。生きてるか?』

『リヒト、大丈夫う? 頭打って馬鹿になってたりしなあい?』

二人の言葉に、リヒト、と呼ばれた男は苦笑。

馬頭文句の一つでも吐いてやろうと、静かに笑みを湛えた。

「五月蠅え、テメエら揃いも揃って……」

『だつて、ねえ……?』

『“英雄” 最期の任務地だろう。ハイにでもなっているかと』
「酷えな」

ぼやきながら、リヒトはウィンドウパネルを操作する。

手馴れたもので、彼の乗った人型駆動兵器は背部のバーニアを噴かせ始めた。

『そういえば、“英雄”さんはこの後何するのかしらあ？あ、私のところに永久就職つてのは——』

「勘弁してくれ。頼む。それだけは死んでも嫌だ」

『しかし、実際お前は傭兵のようなもの。戦争が終われば、食い扶持はゼロだぞ？』

「そうさな」

ぶつきら棒に返答しながらも、自動操縦の期待の中で思案顔を浮かばせる。

ふと、アイカメラ越しに外を見ると、綺麗な夕焼けが見えた。大戦の終りに見たそれは、世界の終焉のようだった。

「隠居でもすつか？」

『お前が隠居だと？』

折り返し、驚きの声上がる。

相手はめったに驚かない性分の人間だったので、その姿に新鮮味を感じた。

「赤い屋根の別荘でも作って。そうだな、立地は森が良い。ボツンと、一人で住む」

『やーん、素敵』

「だろ？」

『皮肉だ。気づけ』

不敵に笑みを浮かべて、リヒトは戦場を飛んだ。

これが“英雄”の最期の飛行になると、誰もが信じていた——

第三次世界大戦終結。

勝者である連合国は敗者への裁きを下し。

世界の全てを巻き込んだ、最大規模の“冷戦”が始まろうとしていた。

「ククク……素晴らしい、な。この力は……！！」

その中で暗躍しようとする者の存在を、まだ、誰も知らない。

プロローグ（後書き）

初めましてでございます、蜂夜エイトです。

厨二病能力ロボットバトルを予定しております。

拙作でございますが、暇つぶしとなればこれ幸いと。

第一話 美女と英雄

森の中に、その屋敷はポツリと立っている。

夕焼けのように赤い屋根に、中央に聳える不釣り合いな尖塔。

広大な庭を持ち、周囲の森は様々な生き物たちが生息している。

それは決して、この世の楽園と言っても過言では無いだろう。

しかし、この建物に普通の人間が立ち寄る事はない。

それは決して立地条件が悪いとか、ましてや、人が住んでいないといったことでもない。

彼らは恐れているのだ。

この館の主を。

第三次世界大戦中、“英雄”と呼ばれた男のことを。

だから、彼はここに住んだ。

妙な損得目線や、倦厭、好奇の目から逃れるために。

ここを訪れることが出来るのは、日の光と鳥のさえずり、旧知の友。

それと、望まざる来訪者のみである。

「……しつこい奴だ」

森の中を疾駆する影。

長い白髪を靡かせて、黒いコートを身に纏い走る女。

悪路であろう獣道もなんのその、軽業師のような身のこなしだ。

「余りにしつこい男は嫌われるぞ。雑誌に載っていた」

軽口を飛ばしながら、切れ長の瞳で背後を流し見た。

そこにあるのは遠近感を無視したかのように聳える鉄の巨人。

平和なこの森に、余りにも似つかわしくない存在。

ジョーカーマシン・ソードだ。

一対のアイカメラは獲物を常に捕らえ、睨み続ける。

灰色の巨躯は同じく灰色の装甲で覆われ、剛なる印象を受ける。

しかし、その背部にある巨大なバーニアが飾りである筈も無い。

突然、巨人がその拳を握り込んだ。

武装を持たない拳であろうと、人間にとっては一撃で致命傷となる。

だが、それに易々と当たるほど女も甘くは無かった。

素早く横に転がり、何事も無かったかのように逃走を再開する。

「お粗末な操作だ。折角の第二世代機なんだから、もっと努力すべきだろう？」

その機体は機動力と攻撃力に優れた機体であったが、流石に人間を相手取る設計はされていないらしい。

仕方ないこと、とも言えるだろう。

だが、灰色の巨人は突然その両拳を握り込んだ。

まるで祈りのように組まれた拳骨は、一撃の下に女を粉碎する、という気概。

それは、余りにも隙だらけの一撃。

女の隣で、轟音と衝撃。

「地面を叩いてどうする？全く、手が抜けないようだが」

女の皮肉に反応すること無く、巨人はその握ったままの両拳を抜こうと奮闘していた。

両腕の肘関節部分まで埋っていて、簡単には取れそうには無い。

「それでは、去らば」

女は捨て台詞を残すと、暗緑色の森に消えるように姿を消した。目標は既に、先ほどから見えている。

この分ならば数分で辿り着くことが出来るだろう。
そこからは――

「彼次第、か……」

逡巡するような瞳。

だが、頭を振る。

まずは、全てを知らせなければならないのだから。
“選択”は、“選択肢”が無ければ選択できない。

「オルタ。ハインリッヒ。リヒト……！」

それは名前か暗号か。

誰にともし無く呟かれた言葉が風に乗って消えると同時に、彼女の目の前に屋敷が現れた。

赤い屋根に、尖塔が特徴的な屋敷だ。

*

*

*

汚い部屋に、轟音が響いていた。
整理整頓などとは無縁の、積み上げられた本の塔が震動で崩れる。
その麓で眠っていた男の後頭部に、本の角が直撃する。

「……んあつ！？んだよ！？」

間の抜けた声を上げながら、眠っていた男は飛び起きる。
周りを見回し、自分の頭を襲った犯人を知ると、嘆息してそれを除けた。

少しだけ広くなった栗色の長机に、再び頭を突っ伏せる。
もう一寝入りしようと考えた彼に、再び震動が襲った。
覚醒状態ならば、それは確かに知覚できる程度の揺れである。

「———つたく、寝てらんねえ。何処のどいつだ、揺らしてんのは」

元軍人である彼には、この揺れの正体が分かっていた。
地響きと共に遅れてやってくる、重い震動波。
大方、爆薬による爆破のものと考えていた。
確かに危険度言えば同等ではあるが———彼は、その正体を知
ることは無い。

「この近くには鉱山も地雷原もねえ筈なんだが……」

緩慢な動作で立ち上がる。

ぼやきながら、油っぽい黒髪を掻いた。

だらしなく伸びたそれが、鳶色の薄暗い瞳を隠す。

近くの椅子の背もたれに掛けてあつた暗緑色のコートを着込んだ。

彼はそのまま、その部屋を出た。

この地鳴り騒動の正体を探るために。

今居た史書室から、玄関までは遠くない。

空気の冷えた廊下で、彼は背中に走る寒気を感じていた。

寒さからくるものではない。

明らかに、本能からの警告の類。

だが、それでも彼は進む。

安眠を妨害されたことへの怒りと、好奇心が半分ずつの心象で。

洒落た装飾の施された玄関扉を開け、彼はそれを見る。

「——は？」

目の前には、長い白髪を乱した美女が居た。

真っ黒なコートを筆頭に、ご丁寧にも全身を黒で覆っている。

切れ長で山吹色の瞳は相手を見抜き、威圧感と、異彩を放っていた。

そんな女が、

「搜したぞ。リヒト・シュッテンバーグ」

などと言っただから、彼は驚く。

「はあっ!？」

「もう、来たか。随分と遅かったようだな」

だが、それだけではない。

女の後ろに、鉄色の機械巨人を見た。

「はアあああああああああ——っ!？」

素っ頓狂な絶叫を上げて、彼は。

——“英雄”リヒト・シュツテンバーグは驚きの瞠目をした。

*

*

*

薄暗い森の中、一人の男が座っていた。

傍らには巨大な黒の物体が鎮座しており、それは高く、男に影を落としていた。

「ヒヤハハ、マヌケの“贄”がようやく追いついたか!」

心底楽しそうに、男は下品な笑い声を上げた。

彼が目を落としているのは、地面に直接置かれた携帯電話のモニター。

そこに映される映像は彼が“贄”と呼んだジョーカーマシンのメ
インカメラと繋がっている。

「それにしても、随分とヒョロい野郎だなア。あんなんで“アル
カナ”に乗れんのか？」

眉を寄せて男は言った。

だが、その疑問を振り払うが如く、男は己の頭を叩いた。
それはまるで、自らに気合を入れるような仕草である。

「一丁揉んでやるか……ま、揉む、で済めばいいがなア」

くつくつと笑いながら、男は立ち上がる。

傍にある黒い巨大な物体の脚を愛しそうに撫でた。

置かれたままの携帯電話から轟音が響いた頃、彼はその脚の後ろ
へと姿を消す。

その姿を見届けた者は、誰も居ない。

*

*

*

目を忙しなく開閉し、口は半開き。

肩を掴もうとした手は宙でふらふらと彷徨っている。
リヒトの驚き様は、“英雄”とは思えないほどのものであった。

「悠長に説明している時間は無い。私の言うことを聞け。質問は手を挙げて、三回まで可能だ」

「まず、お前の所属と階級、あと名前は！？」

「所属は言えない。階級は無い。名前はフェリアだ」

白髪の女——フェリアは淡々と答えた。

それは聞き手によっては、まるで感情が抜け落ちたかのように冷たい声音だろう。

「じゃあアレは一体——」

「質問は三回まで、と言っただろう？」

「さっきで終りかよ！？」

などと、即席コントを続けるリヒトはそこまで頭が回らなかったようだ。

兎に角、彼らは窮地に立たされている事に違いない。

視界を塞ぐように聳え立つジョーカーマシンは、間違いなく標的をフェリアに定めていた。

「——って、コントしてる場合じゃねえ！どうすんだ！？」

「焦るな。手はある」

落ち着き払ってフェリアは言った。

「アレに対抗するためには同等の力が居る。つまり、ジョーカーマシンだ」

「そうだな」

「で、だ。詰る所君がジョーカーマシン並みの活躍をすれば……」
「出来るかつー!」

ぜえぜえと息を吐いて、リヒトは恨めしげにフェリアを見る。
当の本人は涼しげに、からかう様に笑っていた。

が、ジョーカーマシンの足音が聞えたとき、その目を鋭く尖らせ。

「冗談はここまでだ。生きなければ、私の言うことを聞け。いい
な？」

「……おつ」

その剣幕に、リヒトは圧された。

まるで親の敵でも見るかのような目でジョーカーマシンを見上げたのだ。

「自動操縦でここにジョーカーマシンを呼んである。君はそれに
乗って戦え」

「到着まではどうすんだよ？」

「私が時間を稼ぐ」

言い放ち、リヒトに背を向けた。

人間がジョーカーマシンと対峙するなど、前代未聞である。

確かに人対ジョーカーマシンという光景は、過去、戦場では度々
見られたが――

「無茶だ。死ぬに決まってるだろ？ テメエ馬鹿か？」

「死なない」

その根拠の無い言葉。

そして、振り返ったフェリアの瞳に、再び圧された。

先ほどまでとは全く違う。

それは一種の、覚悟の輝きであった。

まるで、戦友の背を護るような。

そんな“圧”を、フェリアの瞳は発していた。

「……………」

無謀。

余りにも無謀なその行為に、でも、リヒトは言う。

「……………」なら、俺が来るまでに倒されないようにしておけよ。心中は御免だ」

「無論」

その覚悟を無碍にすることなど、リヒトには出来無かった。軽口を叩きながらも、再び、その瞳を見つめた。

覚悟の籠った瞳には、同じく、覚悟を込めた瞳で返す。

互いが互いの意思を確認し、僅か一秒。

二人は既に、全ての意識を“二人での勝利”へと向けていた。

「場所は？」

「屋敷の裏へ回れ。そこに現れるだろう」

リヒトは言われるがままに屋敷の裏へと駆けて行った。

それを見送り、フェリアはゆっくりと振り向く。

先ほどまでの鬱憤を溜め込んだ、凶悪かつ強大な敵が居た。質量差は歴然。

フェリアが手に握るのは、豆鉄砲にもならない拳銃だけ。

——だが。

彼女の頭には、“負ける”という言葉は浮かんでこなかった。

「さて、戦おうか」

*

*

*

屋敷の裏庭。

色とりどりの花が咲く花壇があり、リヒトの密かな趣味である家庭菜園もある。

いつ来ても癒される空間であったが、今のリヒトにとってもそれは同様であった。

「しかし、一体何なんだ？ フェリアと言うあの女、怪しすぎる」

癒され、落ち着いた影響だろうか。

気が動転していたため浮かばなかった疑問が、次々と浮かび上がる。

何故、フェリアは追われているのか。

何故、フェリアはここへと来たのか。

何故、ジョーカーマシンを持っているのか。

疑問は尽きない。

しかし、その疑問を吹き飛ばすようにリヒトは頭を振る。
今は、生き残るための。

そして、フェリアを助けるためにも、勝つことだけを考えるときである。

密かな決意を新たにした瞬間。

「——ッ!!」

轟音。

衝撃。

砂煙。

三つの要素が辺りを襲い、リヒトも例外なくそれを受けた。
幸いにも、身体に影響は何も無い。

砂煙が晴れば、自動操縦で飛んで来た件のジョーカーマシンがある筈である。

リヒトが、黒いシルエットの奥の機体を視認した。

「これが……!!」

まず目に付く事は、その小ささだった。

通常のジョーカーマシンに比べ、一回り小さい。

18メートルほどが一般的だから、この機体は12メートルかそこらか。

暗緑色のなだらかな装甲は、風の影響を極限まで減らすためのものなのだろう。

風を切るようにしなやかな肢体は、歴戦の格闘家を髭髯とさせる。
両腕両脚から伸びた鉄色のバイパスは一体何に使うのだろう。
リヒトの興味は尽きない、が。

「まずは、一刻も早く助けに行かねえとなんねえんだ。乗せてくれよ、“切り札”」

赤い瞳が、リヒトを射抜く。

まるでパイロットを品定めするかのような瞳。

だが、リヒトはそれに臆する事は無かった。

堂々とその胸を張り、静かに一歩踏み出す。

呼応するかのように、機体背部のコックピットが露出された。乗れ、とでも言うというのか。

「生意気なマシンだ。だが、俺には調度良い」

呟いて、リヒトは滑り込むようにコックピットへと入った。

それなりに狭い機体内部は、通常のジョーカーマシンとの相違は無い。

ウィンドウパネルを手早く操作し、ジョーカーマシンの戦闘状態起動へと移行する。

「これなら操作出来そうだ……っと。こいつは、パイロット登録か」

画面一杯にでかでかと現れたウィンドウは、パイロットの名前を要求していた。

リヒトは素早く、“リヒト・シュッテンバーグ”と打ち込む。

認証されると同時に、彼の元に新たなパネルが現れた。

それは、この機体を示す固有名詞。

「——Arcana Machine 04 Grinder。
“粉碎機”、か」

何回か、呟く。

その名がしつくり来たのか、リヒトは躊躇い無くフットペダルを踏んだ。

同時に操作する手の中のレバーで、忙しく機体制御を行う。
ジョーカーマシン

“切り札”改め、グライNDER“Grinder”は、その場に堂々と立ち上がった。

「元第十五遊撃部隊隊長、リヒト・シュッテンバーグ。階級は元陸曹。あー、つと。あとなんかあったかな……」

おどけた調子で、リヒトは言う。

そこに、戦場に対する恐れや不安は一つも無い。

彼の頭に“勝ち”以外の未来は、一つとて存在しなかった。

「——まあいい！コードネーム“グライNDER”、行くぞ！」

第一話 美女と英雄（後書き）

次回バトルが出来ると思います。

そこまで大したモンじゃあない気もしますが。

第二話 全力前進

咄嗟に、前へと飛び込んだ。

背中を撫でるような圧倒的プレッシャーが、一瞬送れてその場を穿つ。

土埃を払うような暇も無い。

そんなことをしていれば、次に訪れるのは“死”のみだ。

「くっ……!!」

最早、軽口を飛ばすような余裕も無い。

フェリアの美しかった白髪は土埃で汚れ、珍しく焦りの表情を浮かべていた。

「全く、次から次へ……っ!!」

言った傍からフェリアは横へと飛ぶ。

再び、真上から落とされたジョーカーマシン・ソードの拳。

地面を穴だらけにしながらも、その狙いは次第に定まってきていた。

まるで、“次は捕らえる”とでも言うように、ソードの目が光った。

「貴様如きに盗られるほど易くは無いぞ」

だが、彼女の動きにも限界があった。

いくら体力に自身が在ろうとも、もう横へも、後ろへも、前にも

跳べない。

四方を完全に穴で囲まれた。
一度穴に落ちてしまえば、二度と日の光を浴びる事は叶わないだろう。

だが、彼女は最期まで信じていた。
命を託した、男の存在を。

だから。

この局面でも、その瞳に籠った闘志は消えない。

アイカメラ越しにそれを見たソードのパイロットは、恐怖した。
それはまるで、肉食獣を目の前にした小動物のように。
食物連鎖にも似た、本能からの恐怖。

だから、ソードは——躊躇い無く、拳を振り下ろした。

『——!!』

最初に気付いたのは、ソードのパイロットであつた。
明らかに地面よりも高空の位置で、振り下ろしたはずの拳が浮いている。

まだ腕が直角を描いており、力が地面に伝わった様子など微塵も無い。

ならば、拳と敵の間にある物体は何なのか——

『教えてやろうか？三流パイロット』

『……………っ!?!』

『こいつはグライダー。テメエをぶちのめす為の秘密兵器って
トコロか』

初めて、掠れた呼吸音のような音が漏れた。

息を呑んだのか、息が詰まったのか。

ただ、ソードのパイロットは間にある物体からの通信を聞いていた。

『よお、フェリア。生きてるか？』

「遅すぎるぞリヒト。危うく死に掛けた」

『死なねえって言ったのは何処のどいつだよ』

グライNDERの集音マイクとスピーカーで、リヒトは会話していた。

無論、この間にもソードはグライNDERを叩き潰そうと力を込め続ける。

しかし、潰れない。

それどころか、少しずつ押し返しているようだった。

この小柄な機体の何処に力が――

ソードのパイロットがそう考えたとき、一段と激しい揺れがソードを襲った。

狙っていた場所には、豆粒のような小ささのフェリアのみ。気付いたときには既に、機体がダメージを受けている。

腰部装甲破損――

『グライNDERの特技は急襲、翻弄。テメエのスピードじゃあ一億光年掛かっても追いつけない』

「リヒト、光年は距離だ」

『分かってる！冗談を察しろ！』

戦場において相応しくない会話は、ソードの後ろから発せられていた。

振り向き様に、裏拳を叩き込む。

だが、それは当たらない。
アイカメラには何も映ってはいないのだから。

『よそ見してたら——』

リヒトの声。

方向は四時——

『……こうなった』

右脚部破損。

ソードのコックピットに赤いサイレンと警戒音が鳴り響く。
アラート、アラート、アラート。

「調子に乗るのはいいが、さっさと終らせてしまえ。誰かに見られたら面倒だ」

『こんな森に誰も来ないだろ、っと』

会話しながらも、左腕にダメージを与えた。
最早どんな攻撃かすらも理解できない。

考える内に、今度は左足。

影も形も見えない。

武器は何か、どんな手段で移動しているのか。
それすらも、理解できない。

人知を超えた脅威の性能に、ソードのパイロットは考えることを
放棄した。

『もう動かねえのか？根性のねえヤツだな』
「気づけ。もう殆どイモムシ状態だ」

そう、残ったのは既に右腕だけ。
その右腕すらも、風のような機体に掠め取られる。

思考を放棄した視界の中で最期に見つけた、その光景。
暗緑色の悪魔が、在り得ないほどの速度で右腕を力任せに引き千切る。

武器など一切無い。
グライNDERは、素手で、ジョーカーマシンを解体して見せた。

*

*

*

「――で、だ」

リヒトは思い詰めた顔で唸った。

「何で、テメエは平然と、コックピットに乗ってやがる？」

「外は危険だからに決まっているだろう。それに、この機体は元々私の物だ。私が乗っても不思議ではあるまい」

当然だ、とでも言うようにフェリアが言う。

パイロットシートの後ろ、僅かに開いたスペースにフェリアは立っていた。

コックピットは狭く、二人が入るには両者の身体を密着させなければならぬ。

「じゃあ俺は降りる。手をどける」

「生憎、今は操縦できないのでな。このまま乗っついて貰おう」

拳句、手を肩にまわしてがっちり固定されている。

このままでは抜け出す事は適わない。

「今は操縦できないって、どういうことだよ……」

げんなりと呟きながら、リヒトは諦めてモニターを眺めた。

先ほど破壊したジョーカーマシンからパイロットが降りてくる気配は無い。

恐らく内部の衝撃で頭を打ったか、気絶でもしているのだろう。

これ幸い、とばかりにリヒトは問いかける。

「取り敢えず、聞かせてもらおうぞ。このマシンと、テメエと、それらを狙ってる組織についてだ」

「組織……か。いつ、気付いた？」

「ジョーカーマシン・ソード。第二世代機か？こんなモン、一個人や弱小組織が用意できる訳ねえだろ」

ジョーカーマシンは戦場において強大な武力となる。

が、反面、それは国家レベルでなければ用意できないほどの代物でもある。

この国ではジョーカーマシンを個人が持つ事は未だ禁止されている上、組織レベルとなってもそれは厳重に制限、管理されているのだ。

特に、戦時後期に開発された“第二世代ジョーカーマシン”など、

以ての外。

一般レベルでジョーカーマシンを拝むには、内戦や紛争の起こっている地域にある一世代前のものを見なければならぬだろう。

「ふむ……成る程な。頭は悪くないらしい」

「俺を馬鹿にしてんのか。これくらいジュニアスクールの潰垂れでも分かるわ」

「いいだろう。リヒト・シュッテンバーグ。貴様に真実を伝えよう。ただし……」

「まさか、“知ったら二度と引き返せない”とでも言つつもりか？」

リヒトの釘を刺す言葉に、フェリアは返事を返さない。

だがその沈黙は雄弁にそれを語っていた。

「一つ、言っておく。引き返すかどうか決めるのは俺だ。テメエ

に心配されるほど落ちぶれてねえよ」

「そうか。自信満々だな」

「俺はいつでも、どこでも、何でも出来るんだよ」

その言葉は不器用なりヒトなりの優しさであったが、フェリアはそれに気付く素振りも無い。

一呼吸置いて、フェリアは口を開く。

「第三次世界大戦の裏で暗躍していた組織がある。その名は――

――

『デイブレイク』

若い男の声。

フェリアの言葉を継いだのは、点けっ放しだったグライNDERの通信装置だった。

『ってんだ。どうよ？カッケーだろ？』

「……誰だ？」

「久しいな、ファウスト戦闘員」

『今はもう戦闘隊長だぜ？ちょーっち情報が遅えなア』

フェリアが通信を介して、ファウストと名乗った男と会話する。会話からは余り良好な関係とは思えない。

「戦闘隊長……っ!？」

『そゆこと。サインは全てが終わった後にしてくれよ?』

フェリアが明らかに狼狽した。

リヒトは顔を動かすことは出来ないが、肩に触れていた手が微かに震えたのを感じる。

「どうした、フェリア。何かマズイのか？」

「リヒト。お前の機体はかなり特別。それは分かるな？」

「そりゃ、分かるけどよ……?」

リヒト自身、グライNDERのハイスペックさは自覚していた。オーパーツと呼んでも差し支えないほどの性能だ。

所々は魔法でも使っているのでは無いか、と疑いが掛かる。

「今乗っているグライNDER……これと同等の力を持つ機体が、今、こちらに向かっている」

「なっ!？」

リヒトは驚きの声と共に、備え付けられたレーダーを見た。周囲一キロにはジョーカーマシンの反応は見られない。だが、リヒトは確実に予感していた。

強敵の登場と、それに伴う絶望的な窮地というものを。

「——ッ!？」

メインモニターを見たりヒトは目を見開く。

目の前の、何も無いはずの空間が、ひしゃげた。

その隙間を挟じ開けるかのように、薄暗い灰色の腕が姿を現す。余りにも非常識な光景。

濃灰色の機体は、空間を挟じ開けている。

『到着、つと』

戦場に似つかわしくない、余りにも軽い声。

同時に、ファウストの機体はその姿を晒した。

大きさはリヒトの乗るグライNDERの二倍ほどはあり、圧倒的な質量差を見せ付ける。

両手には銃器、背中や肩には砲。

“火薬庫”——そんな言葉が、リヒトの思考を過ぎった。

濃灰色の装甲は余りにも厚く、大きく、聳える。

頭部に配置された深紅のモノアイが、静かにグライNDERを見下ろす。

視線は、まるで死神の瞳のように冷たい。

『ビビッたか？怖気づいたか？だが、どうしようもねえ。これが現実だ』

ファウストの言葉は相変わらず軽い。

だが、その言葉すらも、どこか真実味を増していた。
純然たる力の象徴が、目の前に聳えているのだから。

『Arcana Machine 16 Babel! “塔”の
実力、身に刻みなア!』

*

*

*

「フェリア……質量差って、スゲーな。迫力がダンチ過ぎるだろ
……」

「ばやいても始まらないぞ。アレを倒すしか、生き残る術は無い」
リヒトは呆然とした声を発しながらも、素早く操縦桿を倒した。
操縦者の動きをダイレクトに伝えるその操作性が、彼らの命を救
う。

先ほどまで居た場所には、吹き飛ばされた土砂が噴水の如く舞っ
ていた。

「ああ、クソ! あんなモン喰らったら死ぬだろうが!」
大きく横へと動いたグライダー。

ばやきながら、リヒトは巧みに機体を制御する。

この時点でジョーカーマシン本来の二倍ほどの速度が出ていたが、動きにぎこちなさは見られない。

「このマシンの特徴は、運動性能だ。翻弄していけば攻撃を喰らうことは無いだろう」

「分かってる！」

このグライダー、あまりにも動きが早い。その制動に追いつけるのは、かつて“英雄”と呼ばれていた故のことだろう。

速さを三倍にまで上昇させ、グライダーは地面を蹴った。質量を持った暗緑色は、全体重の乗った拳をバベルに叩きつける。狙うべきは、防御力の脆弱な脚部関節。

だが――

「……こいつは、関節にオリハルコンでも使ってるのか？」

弾かれる。

巨大な装甲の合間に刺さった拳は、しかし、意味を成さない。ファウスト本人もまるで気にした様子は無いことから、本当にダメージにすらなっていないのだろう。

『蠅でも止まったかア？』

不意に、バベルの装甲が震えた。

舌打ちしながら、リヒトは素早く判断を下す。

グライダーは全速力で脚部装甲を蹴る。

「――やはり、かつ！」

せり出したバベルの装甲から、砲口が覗いた。

一瞬の邂逅の後に、放たれた砲弾は的外れの方向へと飛んでいく。

「堅固な装甲に、全身に砲口。完全な防御馬鹿……！！」

『防御だけじゃないんだぜ？』

素早くグライNDERを立て直し、再び飛び退く。

一瞬遅れて着弾した弾が、再び轟音と共に土砂の噴水を作った。
リヒトは相手の攻撃を全て避けきる自信があった。

だが、攻撃力が無ければ倒すことは適わない。

急制動からの奇襲、狙いは背部の首関節。

打突、だが、弾かれる。

その隙を狙うように、装甲から這い出した砲口が火を噴く。

幾度かのやり取りを繰り返し、互いは一度、距離を取った。
今もまだ、バベルの山の様な巨軀は雄雄しく聳えている。

「埒が明かねえ……」

『同感だ。もっと攻撃力のある技つてのはねエのかよ？』

「確かに、武装の一つぐらいあってもバチは当たらねえ筈だぞ……」

……

呟くりヒトに、フェリアは断じた。

「無いな。男なら拳一本で闘って見せろ」

「テメエは死にたいのか？馬鹿か？先に死ぬか？あア？」

正気の沙汰ではない。

だが、フェリアはまるで気にした様子も無く、ただ前だけを見つめる。

「——信じる」

「は？」

「機体を、そして、己を信じる。今の私にはそれしか言えん」
「そいつは一体——っ!!」

リヒトが問おうとした瞬間、衝撃が走った。

グライNDERの近くに着弾した砲撃が、コックピットの中の二人を揺らす。

『相談事は終わったか？こつちも時間が無いんでな……手早く、行かせて貰うぜエ？』

言葉に次いで、バベルの巨軀が動き出した。

鈍重そうな外見とは裏腹に、素早く、滑るように移動する。

その姿は這い寄る蛇にも似ていた。

「っ！クソ！」

回避行動を取りながら後退。

バベルはなおその身体を引き摺りながら、着実に距離を詰めていく。

「ゴキブリ野郎がっ!!」

『誰がGだつて？飛び回るカトンボよオ！』

バベルの脚部、腕部、胸部に備えられた砲口が姿を現した。
まるで弾幕のような砲弾の雨。

だが、グライNDERの速度を捕らえることは叶わない。

冷静に回避した一方、リヒトはその実、焦っていた。
有効打を与えることが全く出来ていない現状、取れる選択肢は二つしかない。

——諦めるか、命を賭けるか、だ。

『オラア！動きが鈍ってるぞ、カトンボ！』

未だ、砲撃を盾に暴れ回るバベル。
その強固な装甲の隙間を縫う一撃。
唯一、露出した部分で試していない一撃。

（砲撃直後の、胸部の砲口——）

だが、それは弾幕の雨を突破するということ。
お世辞にも褒められたモノではない、そんな戦い方。
グライNDERは愚か、パイロットすらも無事ではいられないだろう、真正銘の賭け。

だが、時は決断を迫っている。

「フェアリア」

リヒトは、窺うように問う。

名前を呼んだだけ。

だが、そこには様々な意味が込められていた。
対するフェアリアは、そんなリヒトを鼻で笑い。

「好きにしろ。私の命は、お前に預ける」
「そーかい」

リヒトは、静かに目を伏せた。

見開いた先の光景が最期となるかどうかは、自分の腕と――グ
ライNDERに、掛かっている。

グライNDERを、己の腕を信じるほか無い。

ただ、それでは突破に足りない。

だからリヒトは、もう一つだけ信じる。

「フェリア、オペレーション任せた。出来るだろ？」

「……任せろ」

謎の女、フェリア。

彼女を信じることで、リヒトは全てのパーツが揃った感覚を得た。

フットペダルを操作し、操縦桿を握り、インフォメーションスク
リーンへ目を走らせる。

全ての条件を確認して、リヒトは戦いを組み立てた。

“英雄”の戦略は、戦場で再び蘇る。

「シートベルトは締めたか？」

「後部座席には付いてないぞ」

「大丈夫、今日だけは赦して貰えるさ。今までの法規違反の暴走
だつて、赦されてる」

そのとき、リヒトの背後でフェリアが笑った。

少しばかり口の端が上がっただけの笑みだが、リヒトにはそれが
分かっていた。

そして、それが少しばかり誇らしい。

「さーて、じゃ、行きますか。弾幕シューティングの始まりだ――」

――

グライNDERの目に、灯が燈る。
決して困難に屈することの無い、力と誇りの光。
それは、“決意”という名の炎。

*

*

*

静寂。

それは、戦いに身を置くものが最も警戒する一瞬である。

「何をするつもりかは知らないが、俺様に勝てると思わないこと
だなア……」

バベルの全ての砲身を準備しながら、ファウストは警戒する。

近辺にグライNDERの反応は見られず、レーダーの範囲外に居る
のだろう。

武装は無いので狙撃などの警戒をする必要は無い。

その速度を活かしての特攻を仕掛けてくるであろう事は容易に想
像がついた。

飛んでくるカトンボを撃ち落とす。

その程度の気軽さで、ファウストは薄く笑った。

瞬間、緊張の糸が震えた。
リーダー上に静かに点滅する、通常の十倍はあろうかという速度のジョーカーマシンの反応。
間違いなく、奴だ。

「——ヒヤハハハハ！来たかッ！！」

笑いながら、全ての砲身の火器管制システムを起動した。
データを取得した管制は自動的に迎撃に最適な射線を構築していく。

砲撃の最も遠く、離れた着弾地点にグライNDERが差し掛かると
き、一発の砲撃が放たれた。

それを皮切りに、大量の砲撃が放たれる。

砲門は決して大砲だけではない。

機関銃、電磁銃、レーザー光、ありとあらゆる火器が一機を狙う。
まるで光の奔流。

局地に対する圧倒的な砲撃こそ、バベルに隠された一面である。

「この弾幕！避けれるモンなら避けてみるやア！！」

たった一機の“カトンボ”を落とすためだけに、彼は本気だ。
だが、彼が“カトンボ”と呼ぶ存在は果たして何なのか。
それを知るのは唯一人。
勝者のみである。

*

*

*

「発見された！攻撃が始まるぞ！」

「っ！やっぱ速度頼みじゃキツいか！」

フェリアの警告に、リヒトが舌打ちした。

通常のジョーカーマシンの十倍の速度とはいえ、レーダーに映る暇すらなく攻撃するのは不可能。

だが、その初撃は十分に攪乱できる。

「砲撃来るぞ！」

鋭いその声に、リヒトは躊躇わずに加速した。

前へと抜け出したグライNDERの遙か後ろで、派手な爆縁があがる。

それとほぼ同時に、グライNDERのレーダーには多量の攻撃予測が打ち立てられていた。

おおよそ、回避は不可能であろう程の量である。

「左へ避ける！バルカンの方がマシだ！」

「クソツタレ！！」

グライNDERが最高速を保ちながら、左へと滑った。

同時に、内部に居る二人に多大な衝撃が走る。

相対性理論によって破壊力を増した銃弾が、グライNDERの装甲を叩いた。

「っ!!」

「シートベルトが欲しいところだな……っ!」

結果、装甲には多大な弾痕が刻まれる。

砲撃による爆風の煽りを受けながら、グライダーは空間を奔る。左腕の制御が利かなくなっていた。

「だが!」

すぐ隣に走ったレーザー光に当たるよりは遥かにマシな損害である。

思い直して、リヒトは再び目の前を見据えた。

メインカメラが辛うじて捕らえたのは、時間旅行の最中のような光溢れる光景。

それら全てが致死性を持つ攻撃力の塊。

幻想的な風景に時折響く、硬質な残響音が不安を煽る。

「地上に降りろ!高出力砲だ!」

「合点!」

返答と同時に、リヒトは目一杯加速させて機体を地上へと下ろした。

着地と同時に右足の調子がイカれたが、結果的には少ない損害で済んだのだろう。

グライダーの真上を通る強大な光線を見て、リヒトはつくづく安堵した。

しかし、地上を走るには片足では不可能である。

故に今、地に足を着けず、持ち前の飛行能力で低空飛行している状態だが――

「クソ、爆風に煽られて上手く動かねえ！」

地上にほど近い場所は、爆風の影響を最も受ける場所だ。
ふらふらと、先ほどまでの半分の速度でグライダーは進んでいた。

気付けば、住処である洋館の麓だ。
隣で、一際大きい爆発が起きる。

「甘い！」

「待て、それは――」

避ける。

だが、しかし、その爆風に煽られた機体は確実にふらつく。
そこを狙って、一筋の煙が飛んだ。
対ジョーカーマシン用ミサイルが、死を撒き散らしながら迫る。
だが、リヒトは何でもないうように笑った。

「俺に掴まってるよ」

「……………っ！」

言葉の真意を察し、フェリアはリヒトを後ろから抱きしめる様に
掴まる。

がっちりとして、離れないように。

「飛ぶぞー！！」

次の瞬間、二人を襲ったのは無理にかけられた多大な重力負荷。
足元で爆発したミサイルの爆風が、グライダーを無理やり空へと打ち上げた。

その際に両脚は壊れ、装甲が無残にも崩れていく。
だが、そんなことはお構い無しに、グライNDERは進む。
目標のバベルを、遙か高空から見下ろした。

「待つてろよ……今に、喰らいついてやる！」

『楽しみに待つてるぜエ、“英雄”サンよオ!!』

砲撃に一瞬の空白。

不意に繋がるノイズ交じりの声。

互いが、互いへと宣戦布告。

同時、不敵な笑みを両者が浮かべ。

『ここまで来れたらの話だなアアアアッ!!』

ファウストが叫ぶ。

胸に開いた装甲の穴からは、巨大な砲身がせり出していた。
そこから放たれるモノは間違いなく、グライNDERを一撃で葬る。

「……オ」

だから、リヒトは。

「オオオオオオ——」

回避行動でも、防御行動でもなく。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——
ッ！！」

前進する。

踏み壊さんとする勢いでペダルを踏み、操縦桿は常に前進の一手。
見据える先には既に砲口の赤く染まったバベル。

愚直。

それは、愚直過ぎる突撃。

自暴自棄の神風特攻と言い換えても良い。

だが、リヒトには相討ちなどといった考えは毛頭無い。
あるのは一念。

——ただ、前へ。

既に手足は機能せず、自慢だった暗緑色の装甲は見るも無残に崩
れている。

通常の三十倍にも及ぶ速度の代価として、在り得ないほどの重力
負荷が二人を襲う。

だが、それでも、リヒトは速度を緩める事は無かった。

否、だからこそ。

リヒトは更に、限界を目指す。

「突き抜けるオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

刹那、リヒトにとって、世界がスローに流れた。
頭に血が上っているのが解る。

目を落とした速度計は壊れて、正確な表示を無くしている。
メインカメラに映るのは既に発射されたビーム粒子が、今、まさに牙を剥かんとする様。

だが、まだ手遅れではない。

リヒトは最初に乗ったときから感じていた。

この機体のポテンシャルを、余りある強大過ぎる力を。
だから、リヒトは信じる。

そのポテンシャルを、それを操る自分自身を。

「——ッ!」

光が、メインモニター一杯に映る。

最早視界は光に包まれ、何も見えない有様。
だが、しかし。

リヒトは確信していた。

己と、グライダーなら越えられると。

刹那すら凌駕する、須臾しゅゑんに近い時間。

その間に、呟く。

「Arcana Over——」

それは逆転の鍵語。

常識を越え、人知を越え、全てを越える為の言霊。

如かして、グライNDERは。

「うおおおおおおおおりゃあああああああ
ああ!」

ビームを、縦に裂いた。

『——ッ!?!』

バベルから見れば、その現象は不可解に見えただろう。

まるで、ビーム自身がグライNDERを避けるように霧散していく
様。

ファウストの息を呑む音。

それとほぼ同時に、グライNDERの拳が放たれる。

「これでッ!」

突き立つ拳。

それは最早グライNDERを介し、リヒトの拳へと伝わっている錯
覚があった。

胸部砲のエネルギーが暴れ、グライNDERの右腕を蹂躪する。

それと同時に、バベル自身の内蔵機関も次々と破壊されていく。
連鎖的に崩れるバベルの鉄壁。

あと、一撃。

「終いだッ!」

もう一度、拳。

振りかぶった右腕の先の原型は無い。

が、気に入らない相手をぶん殴るにはそれで十二分。

突き立つ、二回目の拳。

一瞬の後、砲口から溢れたエネルギーが光を放った。

それは最期の抵抗か、グライNDERを吹き飛ばす。

「ざまあ見やがれ——」

そこで、リヒトの視界は、今度こそ真っ白のまま、閉ざされることとなった。

第二話 全力前進（後書き）

それなりにバトル。

次のロボットの登場はいつになるやら……。

第三話 ジョーカーマシン

がたがたと揺れる單車。

それもその筈、單車は人ですら通るのを憚るような獣道を突き進んでいるのだから。

常人では操作不能なレベルの揺れでも、英雄は淡々と乗りこなす。偏にそれはジョーカーマシンの操縦経験が好を奏した形であった。本人の顔は明らかに不満だらけの仏頂面であつても、だ。

「……絶対、狙つてただろアレは。マジで」

「何度言つつもりだ？既に聞き飽きたのだが」

恨み言を吐くリヒトに、冷たく声を返したのはフェリア。

彼の腰に手を伸ばしシートの後ろに座る彼女は、呆れたような調子だ。

「だってよ、俺の家がぶつ壊れされたんだぜ？そりゃ大したモンはねえよ？金も無事だし。けどな、家が無くなるつつーのは幾ら温厚な俺でも許容範囲外ってーか」

「女々しい」

フェリアは断じた。

既にこの問答も幾度繰り返されたか分からない。

——黒いジョーカーマシン、“バベル”との戦闘で、リヒトの屋敷は崩壊した。

敵機が逃げ去った後の戦場でリヒトが見たのは、焼け野原である。唯一の娯楽とも言えた裏庭の庭園が瓦礫に押しつぶされ、こげ跡

すら残っていなかったのは流石に可哀想なさまであった。

が、現実是非情にも、リヒトにホームレスという不名誉極まりない称号を与えたのである。

更に追い討ちをかけたのが、フェリアの存在。

デイクから彼女を護るための手段“グライNDER”は、既にボロボロの体であり、修理を必要としていた。

最も、リヒト自身がこの『戦闘限りである』と見て酷使したのが問題であったのだが――

「とにかく！巻き込まれちゃった以上は全部ゲロって貰うぜ！？」

「ふむ。貴様ならこのまま逃げるかと思ったが」

「悪いが豪邸ぶつ壊されて笑ってられるほど俺は寛大じゃねエ。

次に会ったら絶対ぶつ殺す！」

自棄気味に叫ぶリヒトに、フェリアは淡々と言う。

しかしその声音はどことなく感心しているように聞えた。
が。

その理由自体は八つ当たりに近い。

というか、八つ当たりそのものである。

「まあ、理由は何でも良い。とにかく、私はこの“グライNDER”を護りたいのだよ」

言っと、フェリアは撫でるように首にかけたネックレスを触る。

「私の息子も同然の機体を、変なことに使われては堪ったものではない」

「我が子オ……？テメエ、軍学者か何かか？」

当時のジョーカーマシンは一部の軍学者のみが開発を担当していた。

徹底的に情報規制され、乗り込む人間はその動力すらも知らないほどである。

それ故一般にその製造法が知れることも無かったし、無駄な戦火を招く火種となることを防ぐことが出来たのだ。

「確かに、広義では軍学者かも知れんな。まあ、そこらは置いておけ。とりあえず、今は“グライダー”をデイブレイクに渡してはいけないということだけ知っていれば良い」

有無を言わさぬ口調に、リヒトはそれ以上に踏み込めなかった。否、踏み込ませなかったというべきだろう。

リヒトも勿論、これ以上の厄介ごとに付き合う気概は無い。

「で、要はデイブレイクの奴らが襲ってくるからそれからコイツを護れ、ってことだろ？」

「そういうことだ。ただ、くれぐれも大事にはするなよ？」

「へえへえ、分かりましたよっと……注文の多いヤツだな、オイ」

ぼやき、リヒトはバイクを走らせる。

既に屋敷のあった森を抜け、走る道も獣道からコンクリートの道路へと変っていた。

「んで、デイブレイクはいつたい、“グライダー”で何をしようとしてやがるんだ？」

「ふむ……。それを話すには、ジョーカーマシンの成り立ちから話さなければならんだろ。長くなるが――」

「どうせ直ぐには辿り着かん。道中の子守唄みてーなモンだ」

単車を走らせ向かう先は、グラインダーを修理する設備のある場所だ。

そこまではまだまだ時間が掛かり、長話には調度良い。軽口を飛ばしたりヒトだが。

「寝るなよ」

「冗談を察しろ。いやマジで」

——この女、マジで扱いづらい。
思わずこめかみを押さえたリヒトに、後ろに居るフェリアは静かに話し始めた。

*

*

*

「信じらんねえ……」

フェリアの話が終わるやいなや、リヒトは呟いた。
それも仕方の無いことと言えよう。

今まで頼りにしてきた戦場の華、ジョーカーマシンの動力が“魔力”だ、などという荒唐無稽な話だったのだから。

彼女が言うには、ジョーカーマシンのエネルギーは“魔力”と呼

ばれる空気中の成分をエネルギー変換して使用しているらしい。

一般に浸透させなかったのは、国が利益を独占するためとも、単に利用効率が悪いこともされていたという。

ただ、その情報が魔力の真贋を明らかにすることは無い。

しかし、リヒトは半分納得した気もあつた。

何せ、“グライNDER”の出力は通常のジョーカーマシンとは桁違い。

それこそ、規格外の代物であつたからだ。

鋼鉄製の巨人を音速に近い速度で飛ばすのは、現代科学では不可能であろう。

「マジで荒唐無稽だな、オイ」

「まだ、話は続きがある。“グライNDER”は、その核に特殊なエンジンを積んでいるんだ」

「大方“魔力のエネルギー変換効率高い”とか、そんな感じだろ？」

「よく分かつたな。その通りだ」

そのことに関しては、概ねリヒトも見当がついたらしい。

納得したような声音で言う。

グライNDERの特異さは、操縦した本人が一番分かっているのだろつ。

「問題は、そのエンジンが世界に限られた数しかない、ということだ」

「なるへそ、そりゃあ争いも起きるわな」

あれほどのスペックを持つグライNDER。

戦時中になれば、どこの国もが喉から手を出してでも奪い取るだろつ。

そして、それを狙い暗躍する組織、デイブレイク。
危険な存在である事は、既にリヒトも察していた。

「読めたぜ、テメエの経歴。概ね、エンジンを狙うデイブレイクから、同じくエンジン持ちのグライNDERを持って逃げ出してきた、って感じか」

「そうだ。デイブレイクの掲げる野望は……余りにも、危険すぎる」

「んで、その危険な野望ってのは一体？まさか世界征服でもやらかす心算か？」

「確かに、エンジンがあれば一国程度ならば落とせるだろう。だが、そんな生易しいものではない……」

いつものリヒトならば一笑に付す所であつたが、既に当事者であつた故に、半ば本気で問う。

しかし、フェリアは浮かない声音で言葉を止めた。

「じゃあ何だよ。もっと、世界的規模の野望ってのか？」

「……聞きたいか？」

続きを促すリヒトに、フェリアは躊躇いがちに一度だけ問う。
だが、リヒトの腹は決まっていた。

「当然。既に俺ア当事者だぜ？俺にも、知る権利つつーのがあるだろうが」

「……そうか」

リヒトが初めて、この面倒ごとに自ら肯定する意見を出した。
その理由は、決して子供じみた八つ当たりのためではない。
彼の心に確実とされる理由は見当たらなかった。

が、強いて言うなれば、リヒトの腰に回されたフェリアの細い腕。それが、まるで不安を訴えるように力強く締め付けていたからであるうか。

フェリアが安堵の息を漏らした後、リヒトは腰に回された腕を叩いて続きを促した。

「奴らは新しい世界を創る気だ。22のエンジンを使つてな」

「世界を創る……正直胡散臭い話だが、マジなのかそれは？」

「残念ながら大マジだ。貴様の考えているものとは少し離れているかもしれないがな」

「ふーん……」

興味無さそうにリヒトが鼻を鳴らした。

「興味無いのか？世界の危機だぞ？」

「要は俺が“グライダー”をデイブレイクに渡さなきゃいいんだろ？なら、起こらない。起こらないことを心配してもなあ……」

最早、不遜とも呼べるほどの大した自信だった。

しかしその表情には何ら揺らぎは無く、至極真面目に放たれた言葉であるのだろつ。

それに頼もしさと危うさを感じながら、フェリアは呆れたように首を竦めた。

「それよりも、だ。22のエンジンってことは……」

「そう。エンジンは全て、タロットカードの大アルカナに擬えて作られている。数も合計、22だ」

「やはり、グライダー起動の時のアルカナマシンってのは、そういうことかよ」

心の中の疑問一つ片付けると同時に、懸念も生まれる。

22のエンジンの一角、グライNDER。

前回の敵ファウストの駆るバベルもまた、アルカナエンジンを積んだものである。

でなければあの、物理法則を無視した空間跳躍は不可能である。

そして、未だ発見されない総計20のアルカナエンジン――

「ぞつとしねえ話だ」

「だろう？各地に争いの火種が残っているようなものだ。私はこれを除く為にデイブレイクを抜けた」

言うに易し。

しかし、その言葉の軽さからは分からぬほど、その行動は簡単ではない。

斥候としてジョーカーマシンを繰り出せるほどの組織を、一人で相手取るのだ。

並みの決意で出来る話ではない。

改めて、リヒトはフェリアと名乗る女をバックミラー越しに見た。長い白髪は日の光に煌き、その表情に変化は無い。

だが、その顔は出会ったときよりも強く、美しく見えた。

使命感――そんな安い言葉では表現できないほどの、重い決意。魂に刻まれたその誇りが、リヒトの魂にも火をくべたのか。臃げながらもまた、リヒトも決意を固めようとしていた。

「仕方ねエな。リターンマッチのカードが組まれるまでは、俺も協力してやるよ」

そう宣言するリヒトに、フェリアは頷く。

「助かる」

と、一言残して、腰に回す腕できつく抱いた。

嘗て戦場にて孤独に戦ってきたリヒトにはそれが、とても暖かいものに感じられた。

*

*

*

目的地である場所は、再び森の中であった。

しかしその様子はリヒトの屋敷周辺とはうって変わり、しっかりと整地された森だ。

これが戦災の焦土の上に、人の手によって作られた森である事は記憶に新しい。

そしてその森を分割するように、一本のコンクリートの道が通っていた。

その先には、この地方の守護を担当する存在がある。

「地方守備隊機動兵器駐屯基地……本当に、大丈夫なんだろうな？」

「安心しろ、ここの隊長とはダチだ。グライNDERの情報は漏れねえだろう」

まだ訝しげな視線を送るフェリアに対し、飄々とその基地の廊下を歩くリヒト。

すれ違う人間が時々挨拶をしてこなければ、その言葉の信用性は欠片も無かった。

だが、目の前の存在は“英雄”。

第三次世界大戦の最大功績者なのだ、ということをフェリアは実感させられていた。

「それに、あわよくば協力が得られるかも知れねえぞ？」

「一体、どういうことだ？」

その言葉に、リヒトは笑って答えた。

「人間、お人よし過ぎるのも困りものってコトだよ」

言葉の意味が分からないフェリアは首を傾げる。

そうしている間にも、目の前を行くリヒトは廊下の突き当りで立ち止まっていた。

鉄の簡素な扉に掛けられたプレートには“隊長室”と乱雑に書かれている。

戸を二度叩き、リヒトは扉を開いた。

「——久しぶりだな。大戦以来だから、ざっと半年か。しかし、いきなり女連れとは、やってくれる」

「そう言っなよ、ベルランド。俺だってんなことになるたア思わなんだ」

ぼやく男は、精悍な顔つきを一切崩さずにいた。

ぱりっとした軍服は新品同様であり、撫で付けられた黒髪もその

几帳面さを表すようである。

吊り気味の瞳の色は燃え上がるようなバーミリオン。

「改めて、我が基地へようこそ……“英雄”リヒト・シュッテンバーク」

「存分にサービスして貰うぜ。“猛禽”」

その名を、ベルランド・ヴィスビューと言った。

リヒトと同じく、第三次世界大戦中に多大な功績を残した一人である。

「……で、お前の後ろの御仁は一体？」

「あ？まあ、色々あるのよ。今は差し詰め、俺の依頼主ってトコか」

「依頼？探偵業者でも始めたのか？」

「始める訳ねえだろ。絶賛隠居中だったトコに、コイツが上がり込んできたんだよ」

「ほう、押しかけ妻、と」

「殺すぞテメエ。言っとくがアイツと何ら関係は無い」

「嘔吐け」

「マジ殺すぞ」

……だが、この会話が英雄二人の会話に聞こえるであろうか。ただ能天気はその日の話をしている学生と何ら変らない問答である。

フェリアは無表情に確かな怒りを浮かべると、問答を続けるリヒトの耳をつまんだ。

「……リヒト。いい加減にしるよ」

あまりにも冷たい一言に、リヒトは額に汗を浮かべて頷いた。
その声は戦場の誰よりも冷たい声だった——と、リヒトの言は
後世に語られている。

「本題なんだが…… あー、それがだな。格納庫の隅と、ついでに
ジョーカーマシンの修理パーツを回して欲しいんだわ」

「何だと？ 何処かで戦闘したのか？」

驚きの声を上げるベルランド。

それをからかおうかと声を上げかけたリヒトだが、背後からのプ
レッシャーにてそれを断念する。

言い淀みながらも、何とか続ける。

「そんなようなモンのような、そうでないような……。ともかく、
ジョーカーマシンを修理させてくれ。これじゃあ商売にならん」
「むう…… 暫し、待て」

言い、ベルランドは執務机に備えられた内線電話を取った。
恐らく格納庫の人間に連絡でもつけるのだろう。

—— 商売に、の件は完全にリヒトのアドリブである。

しかし、こう言った方がベルランドの協力を得やすい事は分かっ
ていた。

見た目や態度に反して、彼は情に篤く、困った人間を見捨てられ
ない性格なのだ。

卑怯な気もするだろうが、リヒトはそれを特に気にしていなかつ
た。

「一つだけ、条件を付けさせる。貴様らが何を隠しているか。そ
れを話すことが、条件だ」

「オイオイ……何言っただよ。疑り深いヤロウめ……」

リヒトは困り顔で背後のフェリアを見た。

寡ばかりの沈黙があったが、フェリアは静かに頷く。
きつと、背に腹は変えられないようなものだろう。

リヒトはベルランドに、荒唐無稽なその話を語り始めた――

*

*

*

「はあ……。今日はどつと疲れたわ……」

ベッドの上、リヒトは盛大に溜息を吐いた。

両手を後ろ手に組み寝転がる。

疲れた心身にその柔らかいマットレスは非常にありがたかった。

「まさか、殆ど知っているとかなあ……。俺だけ知らなかった、
つても癪な気分だぜ」

「仕方があるまい。それに、一般人であれほどの知識を持った人間は稀有だ」

ベルランドは、リヒトの話したディブレイクの存在以外は知って

いた。

魔力のことも、それに伴って巨大な魔力反応が存在することすらも、だ。

それら全てを独自の趣味で解析した、というのだから手に負えない。

「昔から知識欲はハンパなかったが、あのレベルになると流石に引くわ……。人間って怖い」

「独自研究で魔力を明らかに出来る人間など、そうそう存在しないから安心しろ」

アルカナエンジンの存在もあり、ベルランドは想像以上に快くグライNDERの改修を受け入れた。

が、変りに提示された条件がある。

そのことを考えると、リヒトは再び憂鬱気に溜息を吐いた。

「模擬戦……ねえ。しかも、俺のグライNDERはまだ使えないんだろ？」

「私のグライNDERだな」

模擬戦。

リヒトは、アルカナマシンを託すに相応しい存在かを試す、という建前だ。

が、実体はベルランドからリヒトに対する一方的な挑戦といっても良い。

何せ、戦時中は互いに腕を競い合った仲だ。

「勝っても負けてもいいんだ。気楽にやれ」

「しかしなあ……この基地にはつつか、アイツの近くにはアレが居るからなあ……」

アレ、というリヒトの言葉にフェリアが首を傾げる。
それとほぼ同時に、客室である扉のドアが激しい音と共に開いた。

「よーっすりヒト先輩！元氣してたまましたか！？」

「来たよ、ハイテンション小僧……」

ハイテンション小僧、と呼ばれたが笑う。

金髪ににきび跡の残る顔で、満面の笑みを湛えていた。

それはまるでハイスクールのお調子者、と言った風体だが、実際にそうなのであろう。

騒々しいその男に、フェリアは僅かに顔を顰めた。
なるほど、アレが、アレか。

「ハイテンション小僧なんて呼ばないで下さいよお、俺にはジョークって名前があるんですから」

「冗談は名前だけにしておけ……。んで、何の用だ？」

「へへ、実は明日、先輩とウチの隊長が模擬戦やるって聞いたんでねえ……！」

軍服の胸ポケットから、数枚の紙を取り出した。

チケットサイズの、長方形の紙である。

「明日の試合のベットつすよ！先輩の連れのねえさんに一枚差し上げようと思ひまして！」

「わ、私かつ！？」

話を振られると思っていなかったのだろう。

珍しく驚いた声を上げたフェリア。

そんなフェリアに近づき、ジョークはその手製のチケットを握ら

せた。

紙面に躍る文字は“リヒト・シュッテンバーグ”である。

「テメエ、いつもの事ながら人の戦いを勝手に賭けにすんなよ！」

「じゃあ、明日の試合頑張ってくださいよ！今回も俺、先輩に賭けてるんすからねっ！！」

言いたいことを言って満足したのか、駆け足でジョークは去っていった。

肩を怒らせるリヒトに対し、フェリアは笑っている。

「ちょ、テメエ、何がおかしい！」

「いや、貴様も存外、愛されているなと」

「誰がだっ！！」

そこで、リヒトは気付いた。

フェリアの笑顔を初めて見た事に。

いつもの無表情に比べて、その顔の何と可憐なことが。

まるで、無垢な少女のような、自然な笑み。

それを見て、リヒトは――

「くそっ！こうなりゃトコトン勝ってやろうじゃねえか！完膚なきまでに！」

言いながら、高らかに笑った。

フェリアの笑顔を見て機嫌を直したとしたのだとしたら、現金な男である。

かくして、“英雄”リヒト・シュッテンバーグのとある一日は終りを告げた。

日常は終りを告げ、新たに始まる日常。

そこに、リヒトは一体何を見、何を聞き、何を感じるのか。

彼の人生において、最も激動の一年が始まろうとしていた――

第三話 ジョーカーマシン（後書き）

説明回ってヤツです、ハイ。

次回思ったより早くバトれると思いますです、ハイ。

第四話 猛禽と英雄

『貴様、舐めているのか？』

「んな訳ねえだろスカポントン。テメエにはこれで十二分だ」

クリアな音声通信の先で、“猛禽”ベルランドは静かに怒っていた。

それを分かりながら、リヒトは挑発するように声を上げる。

辺りは演習場と銘打たれた森の中の広場だ。

機動兵器が暴れても問題ないほどの更地は、既に荒野といって差し支えない。

近くには演習を観測する為の白い観測塔が建てられていた。その中にはきつと、野次馬好きの軍人が大挙して押しかけているのだろう。

リヒトは、チケットをにやけ面で売り払うジョークの姿を幻視した。

どちらが勝ったにせよ、ジョークはきつと上手く立ち回るのだろう。

それが癪に思え、リヒトの心にはとある考えが浮かんだ。

「負ける気も毛頭ねえし、手加減する気も更々ねえよ」

『ふざけるのは言動だけにして貰おうか。ならば、その機体は一体何だと思っているのだ』

リヒトが乗り込んだ機体は、あまりにも無骨。

鉄色の四肢はずんぐりとした四角、頭部には赤いモノアイ。

まるでガラクタの寄せ集めの巨人は、俗に第一世代と呼ばれたジョーカーマシンだ。

格納庫の隅に眠っていた物を、リヒトが借りる形で持ち出した機体である。

それに相対するジョーカーマシンは、漆黒。

黒の装甲板の所々に走る銀色の線が威圧する。

巨大な剣の様な頭部から、二対の橙色が怒ったようにリヒトのトランプを睨みつけていた。

「第一世代ジョーカーマシン・トランプ。クッソ弱え雑魚機体だ」
『やはり、舐めてるだろう。そう、貴様はもう少し利口に生きたほうが良い』

ベルランドは大層お怒りのようで、口調がどんどん刺々しくなっている。

しかし、リヒトにはこの展開こそが望んだものであった。

彼が“クッソ弱え雑魚機体”を選択した理由は二つある。

一つは、現状のようにベルランドの頭に血を上らせるため。

ベルランドはお人よしの真面目人間だが、同時に、生粋の武人である。

武人は、戦士として侮辱されることを極端に嫌う。

見よ、彼の怒り様を。

「それに、この機体なら幾らぶっ壊してもいいだろ？」

もう一つの理由。

その言葉の意味は彼にしか分からない。

『もういい。貴様と問答するのは時間の無駄だ。後悔しても知らんぞ』

「ハッ、誰が。テメエこそ、御託並べてねえでさっさと掛かって来な」

旧友と呼ぶには険悪で、怨敵と呼ぶには程遠い。

それでも、一触即発的な空気の中、二機のジョーカーマシンは一斉に構えた。

『行くぞ』

冷たい声と共に、漆黒の巨人——ベルランドのジョーカーマシンは上腕を捻る。

腰だめに構えられた五指の間に、煌く刃が見えた。

ジョーカーマシン専用の大型ナイフ。

それ即ち、ベルランドを“猛禽”たらしめる“爪”であり、“嘴”。

鋭く、一点を狙った突きが放たれる。

「っ！」

空気の抜け出るような音と共に、リヒトは素早く動いた。

卓越した操縦技術が間一髪、猛禽の爪を回避することに成功させる。

無論、虚空を貫いた爪による横薙ぎの追撃を回避することも怠ら

ない。

しかし、猛禽の攻撃は一度や二度では終わらない。

『ちょこまかと……！』

ベルランドの攻撃を回避するため、リヒトのトランプは高空へと跳んでいる。

猛禽はその爪を手首のスナップだけで投げつけると、すぐさまに新たな爪を腰から取り出す。

そして、自らの投げたナイフに追従するように跳んだ。

「そんな攻撃、痛くも痒くも——」

リヒトは迷わず、左腕を犠牲にナイフを防御した。

その左腕を振り回すように、空中で錐揉み回転をする。

「ねえんだよッ！！」

『な……！？』

そのまま、左腕をベルランドの持つナイフへと叩き付けた。

弾かれた八本のナイフが宙に舞い、同時に、トランプの無骨な左腕も舞う。

呆気にとられた声を残して、ベルランドの機体は上体を煽られて吹き飛んだ。

これ幸い、とばかりにトランプは着地、距離を離す。

『相変わらず無茶苦茶だな、貴様は』

「けっ！ テメエも随分ご機嫌な機体に乗ってんじゃねえか！」

『第二世代ジョーカーマシンに独自の改造を施した、言わば“第

三世代ジョーカーマシン”だ。負ける道理は無い』

「それに対して、俺のジョーカーマシンは第一世代……ってか。燃えるじゃねえか」

『こちらとしては、弱いもの虐めをしている気分なんだがな』

やれやれ、とでも言うように漆黒の機体は首を振った。

『“三世代ジョーカーマシン”……“キリング”は、未だ不敗。仕方ないと言えば仕方ないのだが』

「悪いな、三世代の不敗神話はここまでだ」

『ほざけ……！』

リヒトの減らず口に合わせて、キリングは飛び込む。

その両手には変わらず、鋭い銀色の爪を覗かせていた。鋭く、低く踏み込んだ。

差し詰めそれは、肉食獣の構え。

ランプの足元から、掬い上げるようにナイフの光条。対するランプは、右足を高く振り上げた。

「潰れる！」

右足とジョーカーマシン用ナイフ。

二つの兵器が火花を散らし、互いを潰そうと拮抗、磨耗する。

先に折れたのは——右足。

「くそ！整備サボってたろコレエ！」

『整備は欠かしていない。我らが整備兵を愚弄するな』

言葉と同時に、バランスを崩して倒れたランプに追撃をかける。次の動作は、飛翔。

両手に持った四対八本のナイフを煌かせ、上空に踊る。
太陽を背にした姿、まさに猛禽。
その爪は獲物を挟み、引き千切る。

『おおおおおおおつ！！』
「クソツたれ！！」

組み付けられるトランプ。

四肢には既に満足な戦闘力は残っていない。
胴体にはがっちりと片手のナイフが食い込み、ちよつとやそつとでは離れそうに無かった。

だが、リヒトはこの程度では動じない。

その証拠に、コックピットで彼は笑っていた。

獰猛な、獣のような笑みである。

ベルランドが違和感に気付いたときには、既に組み付いた後。
戦いの間にできる、独特な“溜め”とも呼べる空気。

「喰らえアホンダラア！」

トランプに残された右腕。

この模擬戦に挑むに際して唯一追加した兵装。
超短距離にして、絶大な威力を誇る。

その兵装の前に、全ての防御は無意味と化す。
武装の名は――

「パイル」

貫く。

その一念だけで、右腕の武装は放たれる。
しっかりと組み付いてしまったキリングに、避ける術は皆無。

『うおおおおおおおおおッ!!』

だが、ベルランドは吼える。

全力で後退しようと、負けてなるものかと、叫ぶ。

決して諦めぬ、武人としての誇りが、彼の機体を動かそうとしていた。

しかし。

「——バンカあああああッ!!」

一切の容赦無く、右腕の武装は漆黒の装甲を貫く。

燃え、橙色に染まった装甲片を撒き散らし、キリングはその場で踏鞴を踏んだ。

『貴様……！最初からこれを狙って……!!』

「近接攻撃に頼り過ぎる節があるからな、テメエは。それが分かればあとは簡単よ。秘儀・やられたフリ……ってか？」

『屁理屈を……!!』

リヒトは、最初からこの一撃に賭けていた。

圧倒的な性能差を埋めるには、パイロット自身の慢心を突くしかない。

故の、第一世代ジョーカーマシン。

結果は、見ての通り——

「言っただろ。テメエの不敗神話は俺との“相打ち”で終わりだ。

俺も負けてはいないぜ？」

何よりも、トリヒトが続ける。

「ジョークの掌で踊らされるのは御免だね。相打ちが一番、上等な結果だ」

『…………馬鹿だろ、貴様』

ベルランドは、諦めたように溜息を吐いた。

*

*

*

「払い戻しはコチラです…………はい、コチラ払い戻しになりやすす…………」

がつくりと肩を落としたジョークは、観測塔の隅にいた。軍人に売り払った紙切れを再び回収する作業に追われている。心なしか、その金髪もへたったようにも見えた。

「なるほど、確かに勝ったな。模擬戦にも、ジョークにも」

「それってどういう意味っすかぁ！こっちは商売上がったりですよぉー！」

呟くフェリアに、形無しといった体でジョークは泣きついた。

「昨日アイツは完膚なきまでに勝つ、と言った。詰まり、ベルランドには負けず、貴様に儲けさせないのが勝利条件」

「ってことは……」

「相打ちという結末が、一番貴様が儲からないことを知っていたのだな」

講釈するフェリアに、ジョークは再び声を上げた。

「そりゃあ嫌がらせじゃないっすか！そんなんねえっすよぉー！」
「まあ、自業自得ってヤツだな」

納得するように頷くフェリア。
無表情ではあるが、その心はいつもよりも穏やかなものであった。
だが、その折。

「緊急警報！緊急警報！」

観測塔内にサイレンの様な音が響いた。

「な、なんなんすかぁ！？」

「5時に10000の距離から熱源反応！この反応は――」

狼狽するジョークの声に應えるかのように、オペレーターの一人が声を上げた。

「電熱反応……！？」

訝しげな声に、ただ一人、フェリアが反応する。

「レールガン……完成させていたか、デИБレイク……!!」
「何だって!?!レールガンだと!?!」

その驚きが周囲へと伝播していく。

まるで蜂の巣を突付いたような騒ぎの中、ジョークだけはただただ目を丸くしていた。

「アネさん、レールガンってまさか……!」

「電磁加速で鋼鉄の弾を放つ銃。恐らく、貴様の想像通りの代物だろう」

「じゃあ……遠距離狙撃!?!」

ジョークの顔からさーっと血の気が引いていく。

在り得ない筈だ、だって、レールガンは——その言葉がジョークの口から飛び出すことは無かった。

この時代、レールガンを製造する技術は未だ生まれてはいない。

だが、一般人の知らない要素——魔力を用いることで、それは秘密裏に実現していた。

尤も、それを知るのは魔力の存在を知る一部の科学者のみであったが。

「発射予測シークエンス、カウントダウン!」
「隊長に通信繋げ!早くッ!」

喧騒の中、髭面の男の怒声が響いた。

一つずつ減っていく発射までの猶予、果たして何を理解しろと言うのか。

ようやく通信が開いたときには、残り三秒を切っていた。

「隊長！避けて下さい！！」

髭面の男の声は届いたのか。

その答えを知ることなく、管制塔の面々は視界を襲う白色に目を閉じた――

*

*

*

『――隊長……けて――さい……！』
「……ッ！？」

コックピットには、ノイズ交じりの酷く焦った声が響いた。
それが己の部下の声で、ベルランドは狼狽する。

満足に動かないキリングで、それでも何とか回避しようとした。

「っ！！」

が、動かない。

胸の直下に穴を開けたジョーカーマシンは、微動だにしなかった。
微かに制御の利く腕を、コックピットの前で構えた。

銀色のナイフは総て取り落としてしまっている。

己の命を護るのは、漆黒の装甲板のみ。

そう思っていたベルランドの前に、立ち上がる影。

ボロボロの体。

左足だけで器用に立つ機体。

第一世代ジョーカーマシン・トランプと、その搭乗者リヒト。

「馬っ……!!」

叫ぼうとした時にはもう遅い。

蒼い光の奔流が、トランプの肩越しに見えていた。

圧倒的な質量。

そして、圧倒的な速度。

進路の総てを破壊する、一筋の禍星。

「鹿野郎っ!!」

だが。

ベルランドは見る。

立ち上がったトランプから発せられる、ただならぬ“白い障壁”。

比較的大型なジョーカーマシンであるトランプの身体を包んで、
なお収まらないこの波動を。

言わば、それはバリア。

白銀の盾が、この場の二人を護るように展開された。

それはこの場に在り得ない筈の力。

この場にフェリアが居たのなら、驚いたのであろう。

その反応は、彼らが“エンジン”と呼ぶ存在を起動したときに訪

れる光。

『Arcana Over——!!』

刹那、聞えるはずの無い、リヒトの雄叫び。

守護の鍵語。

護るの一念で開放される、魔力の力。

それはあらゆる存在総てを不貫とし、護れるモノは無いと語る。

その証拠に——見よ、その後姿を。

「……………!!」

トランプは、その場に立つ。

威風堂々と、その片足立ちのままで。

消し飛んだ荒野の中央に、護るべき者を引き連れて。

リヒト・シュッテンバーグは、倒れない。

『生きてるか?“猛禽”』

人を小馬鹿にするような調子で、言う。

聞きたい事は多かったが、それでも、ベルランドはこの言葉を選んだ。

「助かったぞ…………“英雄”」

＊

＊

＊

「レールガンを放った輩は取り逃した。目撃者の話によると、突然“空間の割れ目”に消えたらしい」

「つつーことは、やはり……！」

「間違いない。デイブレイクの仕業だろう」

リヒトの言葉に、フェリアは同意を返した。

レールガンを製造し、尚且つ、“空間の割れ目に消える”不可解な現象を引き起こせるのはデイブレイクのみ。

リヒトは、耳朵に響く軽い声を幻聴する。

「撃つたのは黒くてデカイ機体か？」

「いや、報告によれば、白い翼を持った機体だと聞いたが」

「うち、ファウストの野郎じゃなかったか」

半ば本気で悔しがるリヒトに、ベルランドが冷徹な視線を送った。それを尻目に、フェリアは考え込むように視線を下ろす。

「“正義”……グレイヴキーパーか」

呟いた。

その声音にはどこか恐れのようなものがある。

「正義……ってことは大アルカナの八番。また、アルカナエンジ

ン搭載型かよ」

「……これで、敵に二機目の強敵が確認された訳だな。他にも居るのか？」

ベルランドが警戒するように言う。

フェリアはリヒトの顔をみると、再び口を開いた。

「私の知るところで実戦投入されているのは“女教皇”、“正義”、“塔”。使われてはいないが所持を確認しているのが“運命の輪”だな」

「うへえ、三機も居んのかよ」

吐き捨てるようにリヒトは言った。

一機だけでも戦力のバランスを崩壊させる機体が、三機。

そのいずれも敵という現状に、誰もが頭を痛めていた。

だが、一人だけが静かに顔を上げる。

「この大陸の東端に、ハルピユアという街がある。そこには魔力研究に付き合ってもらった知り合いの科学者が居るんだが」

それがどうした、とばかりの視線と、意図を読めない冷徹な視線。二つの視線が刺さり、一息置いてからベルランドが言う。

「そこには新たなエンジンがある。俺も現物を見た。今も、その科学者が管理している筈だ」

「マジかよ！　つかそんなアツサリ見つけられて大丈夫なのかよ

！？」

「……つくづく驚かされるな。幸運の神にでも惚れられているのか？」

二者二様の驚き様を呈する二人。

しかし、当のベルランドは興奮も無く、至極淡々と事実を述べる。

「フェリア。君には少尉相当の権限をやろう。アルカナエンジンについて、調査しに行ってきたくれ。バックアップは、全責任を持つて俺が担当する」

「助かる」

短い言葉を返すフェリアに、ベルランドは満足そうに頷いた。

横目でリヒトを見ると、期待と不満が入り混じった珍妙な表情をしていた。

「俺は？」

「貴様にやる官位は無い。強いて言うならば——“お手伝いさん”なんかはどうだ？」

「オイ、マジで屋上来い。大体、何で俺じゃなくてコイツの方が上なんだよ」

文句をつけるリヒトにベルランドは、敵わないとばかりに両手で耳を塞いだ。

納得のいかない顔をしているリヒトの肩にフェリアの手が置かれる。

「まずは落ち着くことだ。貴様の今の言動こそが“お手伝いさん”であると知れ」

「はあ？意味わかんねえ」

「そういうことだ“お手伝いさん”。分かったら、さっさと行ってきたくれ」

「けっ！わーったよ！人使いの荒いヤツだぜ……」

リヒトは面白く無さそうに鼻を鳴らして、隊長室を出た。

「アイツは戦えるが、多少性格に難がある。子守、頼まれてくれるか」

聞えないであろうと高をくくりつつも、ベルランドは言う。

それは貴様も同じでは——言いかけて、フェリアは言葉を飲み込んだ。

「悪いが、保障しかねる。アイツは一人で勝手に飛び出す“馬鹿”だからな」

「ああ、分かっているとも」

ベルランドの言葉を背に、フェリアはリヒトの後を追って部屋を出た。

その姿を見て、ベルランドが口の端を上げる。

「“英雄”が変人なれば、その友もまた“変人”か……。存外、様々な人間に見つめられているようだぞ、“英雄”よ」

狭い隊長室では、ベルランドの押し殺した笑いが響いていた。

第四話 猛禽と英雄（後書き）

予定していたプロローグ的なパートが終わりました。
次回から多少、毛色の違う感じになるかもしれません。

第五話 吹雪の夜に

同緯度に存在しながらも、ハルピユイアはリヒトの居た地域よりも寒かった。

それは山脈を隔てた北風が吹き降ろし、この盆地となった場所に寒さを齎しているせいでもある。

季節は秋の終り口であり、粉雪が積らない程度に降っていた。

「寒い……マジで、寒イiiiiiiii……」

そんな中、リヒト・シュッテンバーグは歯の根も合わない様子だった。

がたがたと震える身体には、いつも通りの暗緑色のコートのみである。

「“英雄”ともあろう者がだらしない。兵士の時に贅沢は言ったられなかった筈だろう」

吐き捨てるは、階級上は“少尉”となっているフェリア。

黒いコートの前を開け放っているにも関わらず、一切、彼女は寒がる様子を見せなかった。

「ジョーカーマシンのコックピットは空調が付いてるんだよ……」

！寒い外に生身で出た事は無いっつの……」

「軟弱者め」

「五月蠅え……勝手に言ってる……」

リヒトは再び、現地で買ったマフラーに口元を埋めた。
そもそも、この地方が寒いなどは聞いていなかった——と、
リヒトは主張する。

防寒着の一つも無い格好で、この時期を歩くのは身体に悪い。

自然と早まる脚が、目的地に急ぐ。

一刻も早く暖を取りたい。

その一念で既にリヒトの頭では地図が出来上がり、目的地に辿り着くを今か、今かと心待ちにしていた。

既に心此処にあらず。

故に、リヒトは気付いていない。

「ところでリヒト。先に行くのはいいのだが、目的地が分かっているのか？」

「ああん？当たり前だろボケ。こっから先へ直進して……アレ？」

リヒトは周りの町並みを見渡すと、近場にある道路標識を見つけ、
て歩み寄る。

その青い標識を見つめる内に、見る見るとリヒトの顔まで青くな
っていく。

一方その事実を先んじて知っていたフェリアは、その様子を淡々と
眺めていた。

そこにある感情は“呆れ”。

何故なら、彼女は決して寒いわけでは無いからだ。

「マジかよ……通り過ぎたとか……」

絶望した声でリヒトが呟いた。

「貴様はもう少し、日常生活での観察眼を磨くべきだろう」

「……………」

返す言葉も無く、リヒトは己の踏みしめた雪の足跡を辿っていく。その後ろを、呆れたような目のフェリアが追った。

——歩くこと、更に二十分半ば。

リヒトが歩くことに疲れを感じてきたところに、それは見つかった。

「……マジでここか？本気か？ベルランドの野郎、嘔吐いてんじやねえよな？」

「違うと、信じたいところだが……今回ばかりはお前に同意だ」

何故、リヒトが目的地を見失ったか。

それは、彼が道中にそれらしき物を見つけられなかったことにも一因がある。

“猛禽”ベルランドに渡された目的地を記したメモ。

そこには『ウエマツ研究所』と書かれていたのだが——

「ただの、アパートじゃねえか」

その実、住所にあったのは小汚いアパートメントであつた。

築何年かすら分らないコンクリートの壁は、塗装が剥がれてボロボロ。

錆だらけの梯子に、荒れ放題の裏庭を見るに、それは廃墟として認識されていてもおかしくないほど。

「ま、まあ待て。地下研究所とかかも知れんぞ」

珍しくうつろたえた様子のフェリアが、フォローをする。

訝しがるリヒトは、それでも渋々、といった体で敷地へと入り込んだ。

——その瞬間である。

「隙アリだ、侵入者っ！！」

「ぐおっツ！？」

リヒトの顎に、上昇志向の拳骨が入った。

揺れる脳髄、込み上げる吐き気と痛みに耐えながらも、リヒトは何とか正面を見ることに成功する。

そこに居たのは、珍妙な少女。

「むう、コレに耐えるとは中々にタフネスだなっ！だがあ！」

栗色のショートボブに揺れる、ネコミミ。

白と黒の色彩鮮やかな、メイド服。

場違い、そう、あまりにも場違い。

「これでっ！」

素早く、少女はステップを踏んだ。

左右へとダッキングしながら繰り出される、華麗なアップー。寸分違わずに、リヒトの顎に今一度直撃。

「オネンネだよっ！！」

その声を最期に、リヒトの意識は途切れた。
糸の切れた人形のように後ろへと倒れ込む。
その様子を見ていたフェリアは、その様子を欠片も気にすること
なく言った。

「ここは、ウエマツ研究所で良いのか？」

「そういうアンタ様は誰なんだい？マフィア的な人なら、二人仲
良くオネンネして貰うけどさっ！」

「私はフェリア。そこで無様に転がっている男はリヒト。ベルラ
ンドに要請を受けて来た」

少女は品定めするようにフェリアを眺めた。

その挑発的な視線を気にもせず、フェリアは胸元のポケットから
紙を引き出す。

ベルランドが直筆した紹介状だ。

少女はそれを受け取って一瞥すると、それをばいと捨ててしまう。

「なーるほどねー！ベルランド様が言ってた助っ人つてのはアン
タ様達か！確かにここは、ウエマツ研究所！アンタ様達の目的地だ
よー！」

少女はくるりとその場で回ると、備え付けの階段へと歩き出した。
エプロンドレスの裾が可憐に翻る。

「付いて来るといいよ！御主人に会わせてあげるからさ！」

それだけ言うと、まるで山猫のような軽業で階段を昇っていく。
少女を追おうと一歩踏み出しながら、フェリアは思わず呟いてい
た。

「……御主人？」

*

*

*

改めて室内を見渡せば、そこにあるのは何の変哲も無い男の部屋だった。

しかも、中は男の私物であろう、漫画雑誌やPCソフト、ゲーム等が無造作に転がっており、お世辞にも綺麗な部屋とは言えないだろう。

そんな部屋の中、転がっていた物を適当に避けたスペースに、リヒトラ二人は座っていた。

部屋の主はその対面にある椅子に座り、不敵に笑む。

「で、御主人——ウエマツってのは、アンタか？」

「そう、僕がここの研究所の所長、コージ・ウエマツだ」

コージ・ウエマツと名乗った男。

シャツは緩く、髪は伸び放題のものを後ろで束ね、銀縁眼鏡もずれたまま。

ずばらな性格が目に見える上に、肉体は少々肉付きが過ぎるものがある。

リヒトは幾日か前にテレビで見た“オタク”なる人種を思い出し

ていた。

言われてみれば、ウエマツの名前は“オタク”で有名な極東の島国でのスタンダードな名前である。

「アンタらは？」

「リヒト・シュツテンバーグ。アンタらみたいなのは“英雄”って言った方が分かり易いか？」

「ふーん」

「ふーん、つてお前……」

「私はフェリアと言う。こいつの保護者みたいなものだ。そつちの少女は？」

がつくりと肩を落とすリヒト。

それを無視して、フェリアが話を進めようとする。

ウエマツの視線で促されて、メイド服の少女が平らな胸を張った。

「アタシはフー！気軽にフーちゃんって呼んでね！」

「無い胸張るなよ。惨めに見えるぞ？」

隣でぼそりと呟いたウエマツの後頭部を叩きながら、フーは満面の笑みで言った。

その珍妙な関係に、彼らの力関係はありありと分かった。

だが、未だ二人には分からないことが多すぎる。

「そのメイド服は一体何なんだよ？」

「御主人の趣味だよ！」

「では、そのネコミミは？」

「僕の趣味だが？」

「じゃあ、何で御主人って呼ばせてるんだ？」

「趣味」

綺麗に重なる二人の声に、リヒトは大きな溜息を吐いた。
どうにもこの二人、両者共に変人らしい。

「……関わりたくは無 い二人組みだな」

「……全く以って同感だぜ」

小声で呟くリヒトに、フェリアが同調した。

己の部屋にメイド姿の少女を囲み、ご主人と呼ばせる、自称研究所所長。

当の本人はさも当たり前であるかのようにどっかりと座り、足元に落ちていた漫画を手にとって読み始めようとしていた。

今は遠くに居るベルランドを恨みながらも、リヒトは話を切り出そうとする。

「んで、俺達の目的だが……さっきの様子を見るに、ベルランドから話に行ってるのか？」

「先日、電話が来たよ。まあ、僕が直接電話を取った訳じゃあないんだけど」

「アタシが取ったよ!」

びよこぴよこと揺れながら、フーは朗らかに笑っていた。

その頭をウエマツが撫でようとするが、髪に触れる前にその手を叩き落とされている。

「じゃあ何で俺を攻撃したんだよ!」

「うーん……怪しかったから、かな」

「……ウエマツさんよ、アンタんこの番犬はちょっと凶暴すぎると思わないか？」

リヒトが話を振ると、ウエマツはフーの顔を横目で見た。

その時二人の目が合うが、とてもドラマティックなものではなく、むしろ、殺伐としたものであり。

冷や汗を流しながら正面に向き直り、ロボットのようになぎこちなく頷いた。

「そりゃあ——禁則事項の質問だな、ウン」

「まあ、そんな事はどうでもいいんだ」

フェリアが場の空気を戻そうとする。

リヒトはもう少しフーに言いたかった事がありそうだが、渋々と話をする態勢へと戻った。

「私達が遠路遥遥ここまでやってきたのは、“エンジン”の調査をする為だ」

「——アルカナエンジン。“魔力”をエネルギー変換する脅威の物質」

「そのアルカナエンジンを狙う組織が居る。その組織に対抗する為。そして、あわよくば壊滅させるために。それらの所在を知り、手中にすることが求められる。」

「成る程、それで僕が見つけたエンジンを使って、実験でもしようっていう事かい？悪いが、僕はもう実験はしないことにしたんだ」

「そりゃあ、また、どうしてだ？」

「そこまで君に話す義理は無いと思うがね」

リヒトは聞いたような表情をしていたが、フェリアによる無言の圧力で再び口を噤んだ。

「とにかく、エンジンの無事を確認するだけでもいい。協力して頂けるだろうか、ウエマツ所長」

「エンジンを狙う組織……ねえ」

考え込むようにウエマツが唸った。
リヒトが首を傾げる。

「何だ？心当たりでもあんのか？」

「いや、まさかその組織って、マフィア的なものじゃあないよな？」

「マフィアあ？一体何の関係が？」

「近頃、よく此処の近辺を見回っているようだからね。もしかしたらな……と」

「はっ！そもそも、そんなちゃっちい組織がジョーカーマシンなんて用意できるかよ」

だよなあ、と独り言のように呟くと、彼は天井を仰いだ。
再び考え込むウエマツに、何なんだよ、とリヒトが続ける。
答えを待つことなく、フェリアは得心したように口を開いた。

「概ね、事情は理解した。恐らく子飼いの組織が何かにやらせているのだろう」

「子飼いだ？デイブレイクってのはそんなにデカイ組織なのかよ？」

「推論に過ぎないが、恐らくそうだろう」

フェリアの推論に、ウエマツが苦心の表情を浮かべる。

「参ったな……監視されているんじゃない、アルカナエンジンを回収できない」

「アルカナエンジンは一体何処にあるんだ？」

「連中のような奴に手に渡ってはならないと思って、とある場所

に隠したのさ。こうなると分かっていたら君たちに手渡したんだが……」

「直ぐに、取りには行けないのか？」

「取っている途中で横取りされるのが目に見えるからね。ディブレイクつてのは相当強力な組織みたいだから、それこそ、ジョーカーマシンを使ってでも止めにくるだろうね」

一応、修理の完了した“グライNDER”を持ってきてはいる。しかし、それを起動するのはあくまで最終手段であり、そうしないことがリヒト達には求められていた。

「じゃあ、俺達はどうするんだよ？ここまで来て、何もなしですごく帰るのか？」

「ベルランドが動かなければ、どうにもならなさそうだ。私達はここで連絡係とならざるを得ないだろう」

言うやいなや、フェリアは携帯電話を取り出しながら玄関へと歩いていった。

早速ベルランドに報告する気なのだろう。

律儀な女だ、と思いながら、リヒトはふと辺りを見回した。何か足りない。

そう、居た筈の存在が足りない、違和感がある――

「大変だ！」

フェリアが声を張り上げながら、再び部屋へと戻ってきた。何事かとリヒトは思いながらも、嫌な予感は禁じえなかった。

「フーが、メモを残してマフィアに勝負を仕掛けに行ったようだ！」

「さつき“周囲を監視している”っていうマフィアどもか……！」

二人は顔を見合わせた。

幾らリヒトを倒すほど強いとは言え、少女である。

マフィアなどという治外法権に生きる男を相手にすれば、ただでは済まないだろう。

「俺達も行くぞ！」

リヒトは素早く決断し、玄関へと向かった。

頷きながら、フェリアもそれに従う。

だが、それよりも彼らの前を駆ける影があった。

「ウエマツ!？」

「あの男、いつのまに……」

ウエマツは既に玄関の扉を蹴り開け、二人の視界の外へと姿を消そうとしていた。

その速度たるや、とてもその身体からは想像も付かないほどである。

「追うぞ！」

「クソっ！待てよウエマツっ!！」

二人も一瞬遅れて走り出し、“ウエマツ研究所”からは人が居なくなった。

外に降る粉雪は、その勢いを強めつつある――

*

*

*

「フェアリア、そつちに居たか!？」

「駄目だ。そちらは？」

「何処にも居やがらねえ!クソ!ウエマツは!？」

雪の降りしきる中、二人は息を上からせつつも走っていた。

すでに搜索を始めて一時間、そう大きくは無い街であり、通りは殆ど見回った。

既に日も落ち、辺りは夜闇である。

だが、フーは影も形も見当たらない。

「警察とか、そんな感じのヤツに頼れねえのか!？」

「大事にすれば、即座に感づかれるだろう。フーが人質にされている可能性もある」

「クソったれ!!」

リヒトは悪態を吐き、再び足を動かす。

二人が訪れていない場所は一箇所を残すのみ。
併走して五分ほどの位置にそれはあった。

「ウエマツ!!」

街の外れにある墓地。

そこにある慰霊碑の前に、ウエマツは立っていた。

「フーは居たか——っ!？」

リヒトは言いかけ、口をつぐんだ。

ウエマツがその手に持っていたのは、ネコミミのバンド。

フーが身に着けていた筈のものである。

「……ご丁寧に、奴らは手紙まで残してあったよ」

ウエマツがネコミミバンドを握るのとは逆の手に、力なく一枚の紙を握っていた。

リヒトはそれをひったくり目を通す。

そこにあったのは、概ね予想されていたケースと一致していた。

「フーを人質にして、アルカナエンジンと交換って訳か。汚え連中だ」

忌々しそうにリヒトが呟く。

フェリアも、その表情には確かな怒りが浮かんでいた。

ただ、ウエマツだけは——まるで虚無のような、色を失った顔つきであった。

「フー……」

粉雪はいつしか、吹雪になっていた——

第五話 吹雪の夜に（後書き）

もつとサクつと終わらせる予定が、思ったより長引きそうです。
申し訳ない。

第六話 家族ということ

「……………うあ」

薄暗い空間で、少女は目を覚ました。

まず気付いたのは、両手を縛られ、身動きが取れない状態で地面に転がされているという事。

そして、周りの状況を把握しようと思いい瞼を開いた。

だが、辺りを見渡せど、そこには闇しかない。

「ようやく目覚めたかよ？それとも、餓鬼はもう寝てる時間だったか？」

男の声は空間に響いていた。

粘着質の、厭な響きを持ったその声は、少女に嫌悪感を与える。

暗闇の奥から現れたのは、黒いスーツの男だ。

「アンタは……っ!？」

「自己紹介しようか。俺はデメエラの持つてる“ブツ”を有効活用しようと考えている一派さ。なあ、ウエマツ研究所のクソ餓鬼さんや」

その言葉に、少女——フーは、無意識に下唇を噛み締めた。

思い出したのだ。

如何にして、この屈辱的な状況に置かれる羽目になったのかを。それと同時に、後悔していた。

何故、自分はこうも短絡的なのか――

「黙り込んでれば悪くない“商品”なんだがなア……如何せん、品がねえ」

「何ですと？このアタシに、品が無いと？立てばバクヤク、座ればカタン、歩く姿はヤケノハラと言われたこのアタシが？」

「一個もあつてねえじゃねえか……」

溜息と共に言い、疲れ顔で肩を摩った。

そこには未だ痛みを訴える青痣があり、男はフーを見下し、睨む。

「まったく！阿呆みたいに暴れる所為でウチのメンツが使い物にならねえじゃねえか……怪力の餓鬼め！」

「ちよつと待ちなよ！まさかその“怪力の餓鬼”ってのはアタシのことかい！？」

「テメエ以外に誰が居るつつーんだよこのクソ餓鬼ツ！！」

今はこうして縛られているフーではあるが、事実、彼女はマフィアグループを後一步まで追い詰めていた。

迫る男達を千切つては投げ、千切つては投げを繰り返すその姿は、まさに鬼神と言えよう。

リヒトを倒したその実力は伊達ではなく、しかし、一步及ばなかったということ。

「いいから黙ってるや。明日になれば、愛しのウエマツ先生に会わせてやるからよ」

その言葉の意味を、フーは一瞬で理解した。
詰る所自分は、人質なのであると。

「アンタ……汚いよ！男なら正々堂々、胸を張って戦いな！」

「これが俺たち“大人”の戦い方よ！餓鬼は黙って、ままごと遊びでもしてな！」

ま、これがある限り俺達は——そんな言葉を放ち、男は愛しそうにそれを撫でた。

釣られるようにフーが目をやる。

そこには、巨大な人型の影。

忘れもしない。

フーの故郷を、父を、母を、総てを奪い去った巨人の姿を。

「ジョーカー……マシン……！？」

「第二世代ジョーカーマシン、ソードが四機。幾ら相手がアルカナエンジンだろうと……！！」

フーには理解できない言葉を発しながら、男が恍惚した笑みを浮かべる。

その姿を見て、フーは嫌悪感を覚える。

まるで、得体の知れない生物を見たかのような、背筋に来るそれである。

「アンタは……どこまでっ……！！」

「勝って、アレを手に入れさえすれば、過程なんてどうでもいいのさ。そうだろ？」

睨むフーを見下ろし、男は笑みを浮かべていた。

しゃがみこみ、フーの顎を持って視線を無理やりに合わせる。

「恨むなら、あのウエマツって男を恨め。あの野郎が再三の要請に応じないから悪いんだからな？」

「アンタに……！アンタに、御主人を愚弄する権利は無いよ！御主人を馬鹿に出来るのはアタシだけさっ！」

その言葉を、男は鼻で笑った。

興味を無くしたかのように首を振り、男は呆れの目線をフーに投げやる。

「もういい。もういいから、寝とけよ。な？」

言い放ち、片手で持っていたその頭を無造作に落とした。頭を打ったショックで、フーの意識は断絶する。

最期の一瞬まで考えていたのは、誰でもない、唯一人の男。

「御主人——」

男が去ってそれきり、暗闇に声が響くことは無かった。

*

*

*

「これは、僕への罰なのかも知れないな」

降りしきる吹雪は冷たく、人の心まで冷たくしてしまうようだった。

しかし、その場に居る二人の心は熱く、怒りに燃えている。

反面、立ち尽くすウエマツの心は、凍ってしまったかのように鈍い。

「……かつての僕は、軍属の科学者として雇われて、ジョーカーマシンの研究開発をしていたんだ」

だからだろうか、彼が独白したのは。

それは決して、他人には語ろうとしなかった彼の過去。

「当初は楽しかった。好きな機械弄りが出来て、金が貰えて、祖国も繁栄する」

「ああ、そうだな。それが“正常”だ」

皮肉交じりに、リヒトは呟いた。

戦争に関わってきた者同士、何か通じたものがあるのかもしれない。

「ある日、母の居る故郷が市街戦に巻き込まれたって報せが届いた。僕は急いで故郷へ戻ったさ」

故郷。

それが何処かはリヒトには分からなかった。

が、この街では無いであろうことだけは、ウエマツの表情から、確かに感じ取っていた。

「あつたのは母の亡骸と、戦争で壊れた町並みだけさ……。僕は、戦争に加担していたことを初めて実感したんだ」

「だから、軍を抜けたと？ ジョーカーマシンに関わっていたなら、そう簡単に抜けられる筈が……」

「僕は精神病に掛かったんだ。辛い……本当に辛い日々だった」

当時の彼を知る人間なら、今のウエマツを見てさぞ驚くのであるう。

精神病を患っていた当時は、栄養失調で倒れるほどに痩せこけた姿だったのだから。

「軍を抜けて、精神病院に入院させられた。何とか治療して、軍に戻れと言われたとき、僕は逃げたんだ」

「追跡は？」

「幸いにも、見つからずに逃げ切れた。当時は第三次世界大戦も一番激しい時期だったしね」

ふう、とウエマツが一息吐いた。

白い蒸気が黒々とした闇に浮かび、瞬く間に消えていく。

しかし、その間にもフリーは、何処で何をされているのかすら分からない。

焦ろうつもしないウエマツの姿がまどろっこしく、リヒトは苛ついた表情を浮かべた。

「この街に辿り着いて一番最初に出会ったのが……フリーさ。そして、彼女は戦災孤児だった」

「引き取って、育てた——か」

フェリアの言葉に、ウエマツは頷くこともしない。

だがそれが真実であろう事は、何よりも、最初に出会ったフーが証明していた。

同時に、フーにとって、ウエマツにとって、互いがどう思っているかすらも。

「テメエ、罪滅ぼしの心算か？」

「ああ、そうさ。僕の、戦争に関わっていた罪を償えるのはこれくらいしか――」

言いかけたウエマツの頬を、リヒトの拳が打った。

薄く積った雪の上に倒れる姿を、リヒトは肩を怒らせて見下ろす。

「ふざけるなよ。テメエ、まさか、本当に罪滅ぼしだ、なんて思ってたんじゃないだろうな」

「ぐ……罪滅ぼし以外の何があるって言うんだい？こんな、最低最悪の男に」

卑下するウエマツを睥睨して、リヒトは怒りの形相を浮かべた。

「フーを助けたいのか、助けたくないのか？それとも、もうどうでもいいのか？どれだ」

リヒトの言葉に、倒れたままのウエマツは唇を小さく振るわせた。それは、決して寒さに負けたわけではない。確信し、リヒトはもう一度問う。

「助けたいのか！？助けたくないのか！？」

「……助けたいに、決まってるじゃあないか」

返答は小さく、消え入りそうな声だった。

ウエマツは倒れ、俯いたまま、肩を震わせる。

「助けたいに決まってる……。フーは、たった一人の僕に残された“家族”だ……」

「テメエ、今、“家族”つつたな？」

リヒトはしゃがみこみ、ウエマツの襟を引っ張って顔を向けさせる。

同じ目線で、静かに涙を流す瞳を見据えた。

「“家族”を助けたいって事には、“同情”だとか、“罪滅ぼし”だとかは関係ねえハズだ。テメエはそいつを言い訳にしてただけだよ。テメエの一方的な“罪悪感”のな」

言い放ち、リヒトはその手を離れた。

再び雪上に頂垂れるウエマツに背を向け、言う。

「だがな……テメエが家族だと思ってるフーは、誰でもないテメエの助けを待っている。その為には、俺達も協力は惜しまねえ」

だから、と、続ける。

「立て。振り返らず、前だけを見とけ。フーは、その先に居る筈だ。お前の“過去”には、もう誰も居ない」

数瞬後、ウエマツは乾いた笑いを漏らした。

涙の跡が残る顔を、そこらに積った雪でこしこしと擦る。

「悪かったね。どうにも……僕は、精神的に弱いらしい。フーにはあんな格好させてるのにね。僕の趣味で」

「はっ、全く、その通りだよ」

リヒトの差し伸べた手を、ウエマツが握る。

もう片方の手には、しっかりとネコミミバンドを握っている。

まるで、二度と離さないと誓ったかのように、固く、固く、信念の如く。

立ち上がると、二人は頷きあい、横目でその人を見た。

「ってことで、作戦説明は任せたぜ。フェアリア。どうせ何かあるんだろ？」

「ようやく喋れたと思ったら、そんな役回りか……やれやれ」

大げさに首を振って見せて、嘆息。

その姿にリヒトは苦笑し、ウエマツもにやついていた。

「これは……メイド服を着せなくなるね——おうッ!？」

直後、脛を押さえて転げまわるウエマツを尻目に、フェアリアは説明を始めた。

「いいか？今回のフー奪還作戦だが……コイツを使う」

言い、懷から取り出したのは、少々大きい携帯端末だ。

その用途を知るリヒトは、驚いたような顔をする。

「グラインダーを呼ぶ携帯端末？テメエ、マフィアの野郎を殲滅する心算かよ？」

「その心算だが？」

さらっと言うフェアリアに、リヒトは啞然。

彼女はそれを無視して続ける。

「作戦の肝は“相手を騙し切ること”、だ。それを肝に銘じて、作戦に当たって貰いたい」

が、その前に、と、フェリアは提案した。

「一旦研究所に戻るぞ。ウエマツが……死にかねん」
「……そうだな。戻るか」

リヒトの後ろでは、脛を押さえたまま体の半分ほどが雪に覆われたウエマツが転がっていた。

第六話 家族ということ（後書き）

戦闘まで書くと中途半端に長かったなのでここでカット。

次回、ウエマツ編は終われ……たらしいなあ。

第七話 超越するアルカナ

一晩で積った雪が朝日を反射し、煌いていた。

街の外れにある湖畔の表面には薄く氷が張り、静かに水面を光らせる。

静寂が包む森は針葉樹の緑と雪の白が綺麗なコントラストを描いていた。

それは正しく白銀の世界であり、改めてその光景を見たリヒトは感嘆の声を上げる。

「こいつはヤバイな……カメラでも持って来るんだったぜ」

「貴様がそんなことを言うとは珍しい。今日は槍でも降るのか？」

リヒトの隣に立つフェアリアが茶化す。

しかし、リヒトが大きく否定することは無かった。

朝の静寂、冷たい空気が、リヒトに言葉を吐かせるのを躊躇わせたのだ。

大声を出してしまえば、その白銀の世界が崩れ去ってしまいそう
で――

「リヒト！例のモノを沈めてきた！」

そんなリヒトの感傷はおかまいなしに、遠くからウエマツの叫びに似た呼び声が聞えた。

静寂の中に響くその声に顔をしかめながら、リヒトは笑う。

「どうやら、大体の仕込みは終わったようだな」

「ああ。準備は万端——後は、結果を待つだけだ」

同意するフェリアが、湖の方向を見据えたままに頷いた。

「しかし、今回はやけに協力的じゃねえか。お前なら“エンジンを奪ったマフィアからエンジンを奪い返したほうが早い”とか言いそうだ」

「どういうイメージだ私は」

珍しくもフェリアをおちよくるリヒトは、鬼の首を取ったような気分で隣に立つフェリアを見る。

しかし、フェリアはリヒトの視線など気にしてはいなかった。

それどころか、どこかリヒトを見る目は興味深いものを見つけた研究者のような目である。

「なに、貴様の青臭い説教を聞かせて貰った礼だ。“英雄”なんて呼ばれる割には、随分なお人好しじゃあないか」

「……ぐうっ！」

そう言われ、リヒトはまず唸り、頭を抱えた。

その顔色は赤く、柄にも無く照れているのだろう。

「違う、そういうキャラじゃねえんだよ俺は……」

などと呟いてその場にしゃがみこむ。

相変わらずに頭を抱えるどころか、その髪を掻き耨る始末。

「まあ、そういうことだ。気にするな」

「でも、お前……やっぱアレは違うって……アああああああああっ！クソツタレ！！」

その挙動不審な動きに、フェリアは薄く、氷のような微笑を湛えていた。

頭を抱えるリヒトはそれに気付かない。

が、一人だけ、その笑みを遠目から見ていた者が居た。

「やはり逸材だな……クールなメイドは男のロマ——ふござっ！？」

「撮影は許可を取ってからするものだ」

ウエマツは手にしたカメラを取り落として、雪の上に崩れ落ちた。尤も、と付け加えてフェリアは再び微笑み。

「貴様のような変態に撮らせる事は万が一にも在り得んが」

倒れたまま転がるウエマツは、己の股間を押さえて声にならない叫びを上げた。

いつの間にかフェリアによって作られていた雪玉によって、股間を強襲された結果である。

リヒトが正気に戻り、己の股間に手をやる。

怯えたような目で見上げられても何のその、どこ吹く風といった風体で、フェリアは己の腕時計に目を落とした。

「取引の時間まであと一時間か……」

時間の指定。

マフィアとの取引は、この静かな湖畔で行われる。

人質である少女フーと、ウエマツの持つアルカナエンジンの交換取引。

卑劣で愚直な連中が、純粹で素直な少女を悲しませる。

それは、まるで――

飛来する思いを振り払って、フェリアは背後に位置する森の奥を見据えた。

そこにある筈の物を思い描き、同時に、己の無力を呪う。フェリアが無意識に握り締めた拳に、何かが触れた。

「何を考えてるかは知らねえが、あんま怖い顔すんなよ。なるよになるさ」

いつの間にか立ち上がったリヒトが少し強く、拳をぶつけたのだ。その不器用な励ましに、フェリアは無表情で言う。

「セクハラ」

「おい、テメエ、おい。今そういうシーンじゃねえだろ。雰囲気丸つきりぶち壊しじゃねえか」

なにやら抗議するリヒトを尻目に、フェリアは再び湖を見据えた。いつの間にやらその心は、その湖のように晴れやかに澄み渡っており――

「……助かったぞ、リヒト」

「は？何？聞えなかったんだが？」

「何でもないさ」

微笑を浮かべながら、フェリアは振り向いた。

湖をバックに薄く笑う彼女の姿は、眩しく、輝いていた。

*

*

*

「——待たせたなア。取引に来たぜ、所長サン？」

現れた男は、卑小な笑みを浮かべたスーツの男だった。
睨むようなウエマツの顔色を気にすることなく、飄々と笑う。
距離を開けたまま、ウエマツと男は対峙する。

「……フーは何処だ？」

怒りを堪えきれないように、ウエマツは言った。
男はからからと笑う。

「開口一番、他人の心配かよ？ テメエの命でも心配してたほうが
有意義ってモンだぜエ？」

「……貴様！」

ぎりり、とウエマツが歯を噛む。
その姿を見て男は、まあ、と続けた。

「約束は約束だからな。会わせてやるぜ、来い」

男が合図すると、地鳴りのような音が響いた。
同時に、ウエマツが異常に気付く。

男の背後から、何か、巨大な物体が起き上がる。
鋼鉄の巨人——ジョーカーマシンだ。

「よオ——く手のトコを見てみなア……？」

男の言葉に釣られるように、ウエマツは巨人を見上げる。

ジョーカーマシンの手の上には、確かに、黒い、小さな影が存在していた。

距離があるにもかかわらず、確信する。

「……フー！！」

思わず叫ぶ。

届くわけが無いその叫び。

衝動のままの行動は、男に歪んだ笑みを作らせた。

「ヒヤハハハハッ！必死だな！そんなに大事か？あア！？」

「いいから、取引だ！エンジンの場所は教えるからさっ！」

まるで命乞いのような姿。

必死に叫ぶその姿を見て、男は哀れみに満ちた視線を投げやる。

「仕方が無エなア。こつちも時間が無いし、さっさと吐いてもらおうか！“アルカナエンジン”を何処に隠した！！」

大仰に、男は叫んだ。

観念したかのように俯き、ウエマツは呟くように答える。

「……その湖の底に沈めた。大きいから、見れば解る」

「オーケー、そこで待つてな。あのクソ餓鬼は、引き上げるまで

はまだ人質だ」

男は言うど、手元の携帯電話に幾つか呟いた。
同時に、男の背後に存在していた巨大な人影が動く。
しんと冷えた湖へと歩み寄り、片手にフーを乗せたまま、片腕を湖へ入れた。

引き上げたのは、鉄色の円筒――

「これが……アルカナエンジン――！」

それを見た男は、高らかに笑った。
まるで世界の全てが面白い、とでもいったような風体である。
対照的に項垂れたウエマツが、その物体が“アルカナエンジン”であることを暗に肯定していた。

壊れたかのように笑う男が、ウエマツを見下している。

「アリガトよオ――！これで、俺も“新世界”に生きられるぜエ――！」

「さあ、渡したぞ――フーを返せ――！」

その言葉に、男は再び笑う。

その高笑いはまるで悪魔の哄笑。

ウエマツは背筋に寒いものが走るのを、確かに感じた。

「……そういう“約束”だったな。ああ、返してやるよ――！」

まるで役者のように男は、その腕を高らかに掲げた。

同時に、男の背に居るジョーカーマシンはフーの乗った片手を振り上げ――

「受け取れエー!!」

投げた。

空を飛ぶフーの身体。

その姿はまるで、飛行能力を失った鳥のように、空を滑る。

墜落。

その瞬間を思い浮かべ、男は下卑た笑みを浮かべる。

その瞬間を思い浮かべ、ウエマツはきつく歯を食いしばる。

だが、土壇場でウエマツが叫んだ言葉は――

「リヒト!!」

“英雄”と呼ばれた男の名を呼ぶ。

そして、それに答える影がある。

『任せろ！そしてフェリア頼んだ!!』

ウエマツの背後。

巧妙に隠されたジョーカーマシン、暗緑色の装甲を持つ“グライNDER”が立ち上がった。

その装甲の色と大きさゆえ、森に隠されていたことに気付けなかったのだ。

グライNDERは走りながら、手を伸ばす。

上を向いた掌の上には、人影があった。

見上げるウエマツに向けて、任せろ、とても言つかのように頷く影は、フェリア。

猛進するグライNDERの上でバランスを取りながら、その両手を広げた。

フーは、その間にも落ちていく。

放物線を描く軌道が、グライNDERの進路と重なるうとしていた。

「届け……！！届いてくれッ！！」

ウエマツは、願った。

改めて認識した、“家族”としてのフー。

それを救うための、大切な一步を踏み出そうとしていた。

だから、今は——祈るしかない。

フーにも聞こえるように、叫ぶ。

「帰って来い！！フー！！」

グライNDERの掌が、フーの落下予測地点に入り込んだ。

間を置かず、場には静寂が戻る。

その場に居る全ての人間が、一機のジョーカーマシンの掌の上を見ていた。

不安と、祈りと、願いとが交錯する。

そして、静寂は——

「御主人！！」

フーの声によって、破られる。

『降ろすぞ！！ウエマツっ！！』

「合点！！」

同時に、時が動き出した。

ウエマツは男達に背を向けて走り出す。

目指すべきは後方に存在するグライNDERの掌の真下。

既にグライNDERの掌は高度を下げ、人が飛び降りられる程度の高さになっていた。

「アルカナエンジン」を知る者を生かして帰すな！！追えッ！！」

男が命令を下すと、どこからともなく現れたスーツの男たちがウエマツの背を追いかける。

ウエマツの足は遅く、いかに距離が開いていようと、その差は直ぐに縮められる。

スーツの男の手がウエマツの服の端を掴もうとした瞬間、男は体勢を崩してその場に倒れた。

混乱したように足を止める男たちの前に、黒いコートの女が立つ。

「悪いが、感動の再会を邪魔する無粋者にはお帰り願いたい」

土産だ、と呟くと、フェリアはその手に隠していた拳銃を構えた。男たちが色めき立つ間に、ウエマツはグライNDERの掌の下へと辿り着く。

「御主人ーっ！！」

「フー！！」

掌から飛び降りたフーが、ウエマツに飛びついた。

衝撃でその場に倒れるものの、ウエマツはしっかりとフーを抱きしめている。

ふと、頬に垂れ落ちる雫。

ウエマツを押し倒すかのような形になったフーを見上げる。
フーは、泣いていた。

「御主人、ただいまっ!!」

寂しさ、悔しさ、後悔。

様々な感情が入り混じった涙。

その姿を見て、ウエマツは優しく、その頭を撫でた。

「ああ、おかえり……フー」

*

*

*

「何とか作戦成功か。わざわざジョーカーマシンまで持ってくる
とは、肝が冷えたぜ」

森の中へと逃げ込んだウエマツを見送って、リヒトはパイロット
シートで安堵した。

地上に存在する敵の対応はフェリアに任せてある。

多少は心配もあるが——ジョーカーマシンを相手取り戦った女
だ、少々の事ではくたばらないだろう。

楽観的に考えて、グライNDERのメインカメラを動かした。

先ほどまで取引に応じていた男が、右手に“アルカナエンジン”を持ったジョーカーマシンに乗り終えたところだった。

相手が取る行動は把握している。

故に、リヒトはフットペダルを踏み込んだ。

「まったく、面倒この上ねエな、オイ！」

ジョーカーマシン・ソードの肩に装備されていたショルダーキャノンが火を噴く。

それと同時に回避するグライNDERは、そのまま相手の周囲を旋回するように空を飛んだ。

速度は通常の三倍ほどで、敵はまず追いつけないであろう、というリヒトの確信があった。

そのまま、鈍く旋回しようとするジョーカーマシンの背後を取る。グライNDERの真骨頂、超近接格闘による攻撃で終わらせようと、腰だめに拳を引き絞った。

「——ん なっ！？何だア！？」

だが、返って来たのは轟音。

足元が抉れ、グライNDERのコックピットを少量の揺れが襲う。

攻撃を中断しその場を飛び退いたグライNDERを見つめる、ジョー

ーカーマシン・ソード。

空対地で、二者は対峙した。

「っ！！そういう、ことかよ……面倒くせエ！」

——否、それは、二者ではない。

『ボス、遅くなりましたア！』

『今から加勢しますぜ!』

『たかだか一機、サクツとやっちまいましようやっ!』

『油断するなよ。あの機体は“アルカナ”を持つ存在だからな』

四機。

白く輝く山のシルエツトを背景に、四つの巨大な影が立つ。

「ジョーカーマシン・ソード、ワンド、チャリス、ペンタクル…
…二世代総出演かよ! 懐かしくて涙が出てくるぜ!」

立ち塞がるジョーカーマシン。

ただでさえ小さいグライダーにとっては、その四機は正しく“壁”と形容するに相応しいものであった。

だが、リヒトは笑う。

「いい機会だ! 試させてもらうぜ、“グライダー”の可能性!」

それは挑戦。

しかし、見据える相手は四機のジョーカーマシンではなく、己とグライダー。

“アルカナエンジン”の可能性を捜す戦いである。

『ほざけ!』

『さつさと落としたらア!』

リヒトの目に入っていた筈の“壁”は既に“壁”ではなく、ただの哀れな実験体。

それすら解らぬモルモットは、掌の上で踊るのみ。

二機のジョーカーマシン——ワンドとチャリスは、それぞれの

火器を構えた。

大きな体躯に鋼色の身体、丸みを帯びた、亀のような身体が特徴の機体であるワンドは遠距離狙撃用のジョーカーライフルを。

角ばった装甲に背負った、巨大な通信設備と重火器が特徴のチャリスは背中から突き出した大砲を。

二つの照準がほぼ同時に定められ、銃弾と砲弾が殺到する。

着弾と同時に、土煙の柱が上がり、その場にあつた雪を吹き飛ばした。

しかし、そこにグライNDERは居ない。

「遅え……っ！」

『なっ！速っ！！！』

獣のように姿勢を低くして、グライNDERは前へと突っ込んだ。

そして、残像を残しながら、右へ、左へとステップを刻みながら全身。

続けて放たれる銃弾、砲弾の全てを紙一重で避ける。

殺到した攻撃のすべてを蛇のようにするりと抜け、その拳を再び腰だめに。

男は直感的にワンドを動かした。

そして、その勘は男の命を救うことになる。

振り向き様に振り回した左腕とジョーカーライフルが吹き飛ぶのと引き換えに、ではあるが。

灰色の腕が弾ける刹那、男は確かに暗緑色の装甲を見た。

その手には何も持たず、ただ、拳を正拳で降り抜いた様。

在り得ない——その言葉は出ない。

何故なら、彼が相手取ったのは第三次世界大戦の“英雄”と“アルカナエンジン”。

その速度に不可能は、何一つ存在しない筈なのだから。

『お次だ！』

『見切れるかッ！？』

ワンドが体勢を立て直すのとはほぼ同時に、グライNDERの真横から二機が斬りかかった。

鋭角的な装甲に赤い単眼、背部に巨大な推進バーニアを積んだソード。

小さく纏まった鉄色の装甲の所々から突起を生やしたペンタクル。互い、一対の熱剣を構えて振り下ろそうとした。

「角砂糖より甘いな！」

グライNDERはその場で地を蹴った。

跳躍する方向は、先ほど左腕を失ったワンドの下である。

対象に命中しなかった熱剣は地面に刺さり、雪を猛烈な勢いで溶かした。

そして、グライNDERは誰よりも早く、体勢を整えた。

着地点は、ワンドの胴体部分――

『回避……！！』

「させるとでも思うか！？」

リヒトは叫び、連動ペダルの隣にある、もう一つのスイッチを足で押した。

同時に動かしたグライNDERの手の先には、腕部装甲から迫り出した鉄色のバイパス。

そしてそこから、強烈な、指向性の光が放たれた。

回避行動を取ろうとしていたワンドは、その場で、糸の切れた人

形のように立ち尽くす。

『なっ!?!』

ワンドのコックピットからは驚愕の声が漏れた。

が、リヒトはお構いなしに、グライダーの足を突き立てる。

一段と激しい音を上げて、ワンドの胸部装甲にグライダーの脚が埋った。

「濃密な魔力を一気に受けると、通常ジョーカーマシン程度のエンジンじゃオーバーヒートするって話らしいぞ?」

又聞きなんだけどな——その言葉を残して、リヒトはワンドに蹴りを入れた足を再び伸ばす。

跳躍。

高らかに跳んだグライダーが頂点に達すると、ワンドが小爆発を引き起こしながら倒れたのはほぼ同時。

周りのジョーカーマシンは、呆けたように空を見上げていた。だが、ただひとつだけの例外。

『空中じゃあ身動きは取れねエよなア!!!』

チャリスは、空へと跳んだグライダーの動きを見ていた。

ワンドが隣でやられる一方、密かに背中中の兵器を稼働させていたのだ。

チャリスの背の誘導ミサイル群が、天へと牙を剥く。

『これで終り——』

それを見下ろし、リヒトは悠然と呟いた。

恐れは無く、諦めも無い。
あるのはただ、好奇心。

「——いいぜ。そろそろ行くか」

リヒトは思い出していたのだ。

昨日のフェアリアの言葉を。

“アルカナエンジンを操る者にだけ呟かれる、その言葉を。
己が一番知っている——その、逆転の鍵語を。

それは正に、“鍵”。

アルカナエンジンの全ての能力を引き出すための鍵だ。
全てのジョーカーマシンを“超越する”、“アルカナ”の福音――

「Arcana Over……!!」

グライダー。

その真骨頂は速さ。

故に、リヒトは求めた。

その速さの究極の姿を。

一瞬でいい。

一瞬の内に、全てを極める。

一念は、アルカナを通し、エネルギーとして世界に干渉する。

それ即ち——限り無い時間の遅延。

まるでブラックアウトした、モノクロの世界で、リヒトは自分の
感覚が暴走していることを感じた。

血が逆流したかのように全身が痛みに苛まれ、同時に、幸福な全

能感もある。

メインモニターを見ると同時に、モノクロの世界の刻はカウントダウンを告げた。

十秒。

それが、今のグライNDERとリヒトに赦された限界値。

時の止まった世界、直前で止まったミサイル弾頭を回避しようとした。

だが、グライNDERは既に爆発をも置き去りにする速さ。

回避する必要も無い、ただ、爆発を受ける前に離脱するのみ。

リヒトはそれに気付き、回避を止めた。

グライNDERは、無傷で地上に再び立つ。

九秒。

頭上で爆発が始まろうとしていた。

ミサイルの弾頭が破裂するよりも早く、グライNDERは駆ける。

今尚ミサイルのバックファイアが残るチャリスを目掛けた。

四肢に繋がれた鉄色のバイパスから轟々と吹き出るエネルギー。

それは既にビームの類といっても過言ではないだろう。

八秒。

濃密なエネルギーは、アルカナエンジンの力で限り無く固体に近づいていた。

そのエネルギーの吹き出るバイパスを握り、グライNDERは跳躍する。

低く、タツクルのように、肩を突き出した形。

しかしその型はタツクルではなく、右手を左腰に構えたことによる副次的なポーズに過ぎない。

真の狙いは、右手で掴んだ、右足から伸びるバイパス――

七秒。

「居合斬り……ッ!」

六秒。

その声が響くと同時に、グライNDERはくるりと回転した。

降り抜いた手をそのまま遠心力とし、己の頭を軸とした独楽のよう
うに。

当然、垂れ落ちるバイパスは引つ張られ、螺旋を描くように回る。
そして、遠心力のままに進む方向には、二機のジョーカーマシン。

五秒。

最早、グライNDERは姿勢を正すことすらない。

寧ろ、回転を早めるために、と地を跳ね、両の手を用いてバイパ
スを振り回す。

リヒトの脳に、割れるような痛みが走った。

思わず顔を顰めた。

だが、その手は操縦桿から離れない。

四秒。

二機との距離は既に無くなっていた。

改めて、リヒトはフットペダルの隣を踏んだ。
そこにあるスイッチ一つで、グライNDERは踊るのだ。
踏み切るタイミングは——今。

三秒。

光が踊る。

暗緑色の機体とモノクロームの景色を、白色に染めて。
両手両脚から伸びるバイパスの全てから光が噴出し、それら全て
が光の剣となる。

呆然と空を見上げたままの二機に、光の牙が食い込んだ。
裁断する感覚すらない。

ただ、リヒトの脳内に映される光景は光である。

二秒。

光を収め、二機を過ぎ去り、グライNDERは雪原へ降り立つ。
振り向くとそこには、何も変らない三機の姿。

そして、今だ爆発を終えていない上空のミサイル群。
モノクロの世界に、少しずつ色が戻り始めていた。

一秒。

そして、リヒトは呟く。

零秒。

「これが“粉碎機”改め——“グラインダー裁断者”だ」

時が動き始める。

『だっ！！』

果たして、その科白は断末魔と為る。

音も無く、チャリスは胴体から真つ二つに、ずれた。

ソード、ペンタクルも同様に、その身体を細切れにずらす。

全ての視線は中空に置き去りにされた爆発に注がれた。

それと同時に——地上で、三つの爆炎が咲く。

『はははははは！大命中つてかア！？』

『“英雄”とやらも大したこと無えな！』

『これで私も、あの方の創る“新世界に”——』

何も解らぬまま彼らは爆発したのだろう。

全てを知るのは、“限り無い時間の遅延”の中に居たりヒトのみ。
見届けたリヒトは、コックピットの前面に突っ伏した。

「あー、クソ、しんどい……。こりゃあ、迂闊には使えねえな……」

…」

げんなりと呟き、そのまま活動を停止した。

彼が再び動き出すのは、不審に思ったフェリアがコックピットに乗り込んでくる時である。

グライNDERのコックピットに、似つかわしくない寝息が聞え始めた。

*

*

*

「……割とマジで疑ってたが、こいつは凄いな。マジで研究所だ」
「だろ？このアパートは地下が全て研究スペースになっているのさ。上のは、カモフラージュってやつだよ」

リヒトが驚いた声を出すと、先導するウエマツは嬉しそうに説明した。

ウエマツ研究所と名を打たれたアパートの二階にあるエレベーターに乗って、彼らはここまでやってきた。

冷静沈着、無表情の鉄仮面と誇られたフェリアも、これには瞠目する。

エレベーターで辿り着いた地下には、軍基地で見たものと殆ど変らない研究スペースが広がっていたのである。

「ご主人はこう見えても優秀だからね！ベルランド様が援助してくれたんだよっ！」

フーがひょっこりと、ウエマツの背後から姿を現した。

幸い、今回の事件で彼女は特に怪我を負う事も無く、無事に帰ってきた。

尤も、誰よりも心配されていた当の本人は、かなり恥ずかしそうにしていたが——きつと、ウエマツの所為だろう。

「しかし、軍は抜けたのではなかったのか？」

「あくまで“個人間”の研究さ。それに、研究対象は“ジョーカーマシン”ではなく“魔力”についてだからね」

フェリアの疑問に、ウエマツは笑いながら答えた。

屁理屈のような返答に唸るフェリアであったが、それを押しのけてリヒトが言う。

「つつーか、こっちにあるアルカナエンジンってのはどれだ？この間のヤツみたいなモンか？」

この間のヤツ、とリヒトが差すのは、つい先日 of フー奪回作戦の折に使用された物体である。

マフィアに一度アルカナエンジンを渡す、という手法を取るが故に作られた、急造の鉄くずだ。

取引の直前、ウエマツはこれを湖の底に沈めたのである。

「うーん、それがねえ……実は、もう僕の手には無いんだよ」「はあ！？」

驚きの声が上がった。

話が違う、とリヒトはがなる。

しかし、その言葉を遮ったのは、意外にも、フーであった。

「御主人はアレが危険だと判断して、手放すことにしたんだよ。信頼できる“友人”に送ったんだ」

「誰だよ、信頼できる友人って……？」

リヒトが尋ねようとした瞬間、携帯電話が鳴った。

フェリアはコートのポケットから携帯電話を取り出すと、応答を始める。

その様子を察したウエマツは、小さく笑った。

「噂をすれば影、ってヤツだね。全く、タイミングのいい」

「意味解らんぞ……一体誰だよ、友人……って、オイ、まさかっ！？」

リヒトはこの街へ来る前に聞いた、とある言葉を思い出した。

——この大陸の東端に、ハルピュシアという街がある。そこには魔力研究に付き合ってもらった知り合いの科学者が居るんだが。

「貸せっ！！」

リヒトはフェリアの携帯電話を引く手繰るように奪うと、がなった。

「ベルランド、テメエ謀ったな？」

『さて、何のことだ？』

通話先で、ベルランドは淡々と答えた。
収まらない様子のリヒトは罵声を浴びせる。

「クソツたれ！最初っからアルカナエンジンがそっちに行くことが解つてて寄越したな？体の良いボディーガード代わりによ！」

『先見の明があると言ってくれ。それに、満更でも無かつただろう？。』

「はあ？何を言つて……」

ふと顔を上げると、フェリアと目が合った。
そして、リヒトは硬直し、形態電話の向こうからは押し殺したかのような笑いが。

『お人好しは恥ずかしがる事では無いぞ？いや、戦士としてはどうかは知らんが……』

「五月蠅ええええええええええっ！！」

叫び、携帯電話を投げた。

ウエマツの隣に居たフーが持ち前の素早さでキャッチすると、再びフェリアの手に携帯電話が戻る。

「くそ、何で俺の恥ずかしエピソードが流出してるんだよっ……！！」

「まあまあ、落ち着いてくれよっ！スマイル、スマイル！」

「五月蠅え！」

茶化したように笑うフー。

ウエマツがその頭を撫でた。

しかし、フーがそれを拒む事は無かつた。

「しかし、本当に助かったよ。一時はどうなることかと思ったが、君が居てよかった」

「けっ、テメエがヘタレてただけだろうが」

「ははは、そうだなあ……」

そつぽを向いて言うリヒトに、ウエマツは困ったように笑った。

「だけど、お陰で目が醒めた。これからはフーと……家族と、君の活躍を見物させてもらうよ」

「よ！」

言いながら、ウエマツはフーに笑いかける。

フーは笑顔を返し——否、既に笑っていた。

彼女はいつも笑う。

隣にウエマツが居るその限り、笑って生きていけるだろう。

リヒトはその様子を見ると、満足そうに一度頷いた。

「おい、リヒト。次のアルカナエンジンの所在が分かった」

ベルランドとの通話が終わったようで、フェリアが携帯電話を閉じた。

「マジか。んで、次は何処に飛ばされるんだ？」

皮肉交じりの言葉。

それに対し、フェリアはいつもの真顔で答える。

「今度は、赤道直下のジャングル地帯だ」

「——は？」

第七話 超越するアルカナ（後書き）

アルカナエンジンについての詳しい言及はまた次の機会に。
次回、まさかの赤道直下。

第八話 夜明け裏切り者

「——はっ、はあっ」

女が、息を荒げていた。

上下する身体、玉のような汗が伝い落ちる。

燃えるように熱い身体を制して、女はその単調な上下運動を繰り返していた。

「想像以上だな……くっ！」

一際大きな声を上げて、女は布の端を握った。

熱く、暴れ出さんとする身体を押さえつけるための行動。

しかし、それは何の意味も成さない。

彼女が掴んだ布は、自らの脱ぎ捨てた衣服の一部なのだから。

「はあ、はあっ、もう、駄目だっ……！」

息も絶え絶えに、フェリアは目の前の男に言った。

苦しげな、切なげな声は扇情的に響く。

彼女の身体には、ただ、足の先から痺れていくような感覚が支配していた。

その声を聞いて、女の目の前に行く男は答える。

「テメエ、さっきから五月蠅いんだよ。寒いのが大丈夫で熱いの

苦手って、どこのシロクマだテメエは」

「……ふん。暑さにのみ順応する単純な変温動物の貴様よりはマシだろう」

男——リヒト・シュッテンバーグは、後ろを歩くフェアリアにうんざりした様子で振り返った。

その出で立ちは変わらず、暗緑色のコートのままである。

一方のフェアリアはコートを脇に抱え、下に着込んでいた白衣を汗で濡らす。

熱帯の暑さにやられてしまったのか、頭を深く頂垂れていた。

白い髪が顔を覆い隠してその表情は見えないが、荒げられた苦しげな息がそれを物語る。

しかし、そんな事はリヒトの知るところではなかった。

「ったく、もうちょっと我慢しやがれ。ベルランドの言ってたポイントまで辿り着けば涼しい筈だ。そこで休憩すんぞ」

「フフ……そこまで、私の体力が、持つとでも……？」

幽霊のように擡げた顔からは生気が消え、顔色が赤いのに青い、という矛盾した状況になっていた。

それを見たリヒトはぎょつとすると、次に呆れの溜息を吐く。

「恨むならベルランドと……そうだな、デイブレイクの連中でも恨め。そしてその恨みをパワーに変えてさっさと歩け」

「最早怒りも沸かん……」

リヒトは無視して先行し始め、のろのろとフェアリアもそれに続いた。

二人の周りにあるのは、熱帯に生える独特の植物と、背の高い木々である。

植物の葉が風でざわめく音と、何処からか聞える川の流れる音。何よりも大きく響いていたのは、得体の知れない虫が搾り出す鳴き声であった。

水気を含んだ空気は太陽に熱され、独特の熱気を孕んだ空気となる。

熱帯ならではの“蒸し暑い”感覚が、フェリアは駄目らしい。ジョーカーマシンを日常的に操っていたリヒトには、その蒸し暑さは懐かしさすら覚えるものである。

戦闘中のコックピットの中はかなり熱が籠り、暑かったものだ――

リヒトがそれを思い出していたとき、ふと、耳に異音が聞えた。後ろで遅れながらもついてくるフェリアを尻目に、リヒトはもう一度耳を澄ます。

――…っ――あ………！――

「……フェリア」

手招きをして、フェリアを呼んだ。

訝しげな顔をしながらも急ぎ近寄るフェリアに、囁くように問いかける。

「何か、聞えねえか？人の声みたいなのが」

「何？こんなジャングル地帯の奥地で、か？」

フェリアは疑問符を浮かべるが、再び集中し始めたリヒトを見て、自らも聞き耳を立てた。

今度は、二人で耳を澄ます。

っあ——ああ……っ——あああ……！——

「これは……！」

「ああ、間違いない。人間の声だ」

頷きあい、二人は耳を澄ませながらも走り始めた。

起伏に富んだ地形ではあるが、二人の前では装甲の妨げにすらならない。

地面を踏みしめる快音が刻まれる度に、声の主への距離も近くなっていく。

やがて、水の流れる音を聞き、リヒトはその場で足を止めた。

「ここは、川か」

「そんなに流れの激しい場所でもない……っつーか、池みてえなモンじゃねえか？コレは」

見下ろすのは、対岸までそう距離の無い、小さな池だった。

上空から見れば、緑色の中にぽっかりと開いた穴のように見えるだろう。

穏かな流れの水が丁度、二人の左正面から流れ出てきていた。

「おい、あれは何だ？」

フェリアが指を差した。

周囲を眺めていたリヒトがその指の指す方向へと目を向ける。そこにあつたのは、泥水に浮かぶ何か。

迷彩柄の、布のようなもので、人間ぐらいの大きさで——

「人間……」

ぽっかりと口を開けたリヒトが呟く。

「って、人間じゃねえか!！」

はつと気付き、リヒトは湖を流れてきたその人間に近づく。

水に浮かんだままの人間は、まるで水面の枯葉のように優雅な揺られ方でリヒトの居る岸に辿り着いた。

見たところ、意識は無いようである。

全身の力を抜き、水に浮かんでいるのがその証拠と言っても過言ではない。

「コイツは……一体何なんだ？」

思わずリヒトが呟くほどに、男の格好は奇妙。

上下共に迷彩服の繋ぎ姿であり、腰のベルトには様々な道具が詰まっていると思しきポシェット。

同じく迷彩柄のヘルメットは本人の首に引っかかったまま暢気に浮かんでいる。

茶髪に、日に焼けた白人の白い肌。

安らかに閉じた目元は優しげで、眠っているかのようなのである。

「えー、どうすんのコレ……。つか、ご愁傷様？」

言い、リヒトが手を合わせようとした瞬間。

「——うあああああああああああああああああああああ
あああああつ!！」

「どわアあああああああああああああつ!？」

白人が突如叫び、リヒトは腰を抜かして叫んだ。

誰だって、目の前で安らかに眠る人間が突如叫んだら腰を抜かすだろう。

しかし、その場で、フェリアだけは冷静に、耳を塞いで。

「貴様ら、五月蠅い」

とだけ、呟いた。

*

*

*

「いやはや！お見苦しいものをお見せしました」

「耳がキンキンするぜ……」

息を吹き返した男は、まず笑い、そしてリヒトの隣へ座り込んだ。濡れたままの迷彩服はそのままに、澆刺とした目を輝かせている。

「貴様は誰だ？」

フェリアの簡潔な質問。

尤も、その背格好から大概の人間はこの人物の素性を予測できるだろう。

厚手の迷彩服にヘルメット。

そのどれもこの国の軍では採用されていない、俗に言う市販のレンジャーセットだったのだから。

「私はブライアン・リーマンと言います。職業は冒険家、趣味は冒険、特技は冒険！」

「冒険ばっかじゃねえか……」

呟くりヒトに、ブライアンは再び笑う。

喜怒哀楽の激しい、気さくな男だ。

だが、その声量はこのジャングルに居る虫を寄せ付けけないほどのものであり、躁病の気があるのだろうか。

失礼なことを考えるも、リヒトはそれを表情に出さずに問う。

「んで、冒険家さんがこんな所に何の用だ？まさか、お宝でもあるってのか？」

「んーっ！その通あーり！」

待つてました、と言わんばかりにブライアンが立ち上がった。

その指が指し示すは、遙か天に存在する太陽。

逆光に満面の笑みを浮かべて、リヒトの姿を見下ろしていた。

「この洞穴にはとあるお宝が隠されていると言つのです！その名もズバリ！」

テンションの高いブライアンに呆れながら、リヒトは相槌を返す。どうせ碌なものでは無いだろうし、第一目的とは全く関係が無い

筈だ――

「アルカナ……」

「ぶっ！――」

言葉の途中、リヒトは噴出す。

何故、ブライアンがアルカナエンジンの存在を知っているのか。そうすれば、この男は“デイブレイク”の手先なのであるうか――

「ストーン！手に入れたものに決して無くならぬ運を授ける宝！」

言い切ると同時に、リヒトは後ろに転んだ。

頭を強かに打ちつけた姿に、ブライアンが豪快ま笑い声を上げる。

「紛らわしいわ！ビビリ損じゃねえか！」

「お？一体、何に怒っているんですか？」

理不尽な怒りにただ、惚けた顔をするブライアン。

リヒトは肩を怒らせながらも、まあいいか、と気持ちを改める。

「そもそも、何故わざわざこんな秘境まで“在るかも解らない”宝を探しに来た？」

何故か訝しげに、フェリアは問いかけた。

ブライアンはふと俯くと、笑顔はそのままに語り始める。

「聞くも涙、語るも涙のハートフルストーリーがあるんですよ。

私には子供が居るんですがね？」

「ふーん」

「何か凄い珍しいっていう難病に掛かってしましまして、手ずっ

……手術を受けることになったんですよ」

突っ込みてえ、と思うリヒトを置いて、ブライアンは何事も無か

ったかのように続けた。

「それで、その手術が確実に成功するように、と、伝説の運氣を運ぶアルカナストーンを探しに来たのですよっ！」

「オイ、最期に冒険家モードに戻ってるぞ」

その言葉には耳を貸さず、ブライアンはリヒトに向き直る。

そして、その両手を握ったかと思うと、輝いた顔を接近させて言った。

「そうだ、貴方達にも協力して頂けないでしょうか？報酬は、何なりと、ご随意にいつ！」

「うわっ！やめろ、近寄るな！顔が近いんだよ！」

それを振り払い、虫を払うように手を振る。

助けを求めるかのようにフェリアを見るが、彼女は顎に指を当て、何かを深く考えていた。

そしてリヒトの手を掴み、言う。

「よかるう」

「は？」

「その“アルカナストーン”を探すのに協力しよう、と言っているのだ」

呆けたままに固まるリヒト。

フェリアの表情を窺うも、いつも通りの冷たい鉄面皮があるのみ。

「ありがとうございます！ありがとうございますっ！」

ジャングルには似つかわしくない、澁刺とした声だけがその場に

響いていた。

*

*

*

「難病。アルカナストーン。どうにも怪しいとは思わんか？」
「は？」

リヒトの間抜けた声が薄暗い洞穴に響いた。

二人はひんやりとした空気に包まれたこの洞穴の中、ブライアンと共に赴いていた。

ブライアンの目的とするアルカナストーンとやらはこの洞穴の中にあるらしい。

だが、座り込む二人の傍にブライアンは居ない。

「アルカナストーンなどという曖昧な情報を流したのは誰だ？冒険家とはいえ、突発的過ぎる」

「と、言っと？」

「冒険家というものは本来、入念な調査などによって未踏破の領域に挑む者を指す」

しかし、とフェリアが続け、ブライアンが落ちたであろう穴を見た。

彼は今頃、洞穴の中を張り巡らされた水流を巡って、約二十回目のウォータースライダーを体験しているのだろう。

そして、三人が初めて出会った小さな湖へと戻されるのだ。リヒトは小さく、呆れの溜息を吐く。

「どう見ても、入念な調査なんて無いだろコレは」

「そう。せめて、地下水の有無や洞穴内の状況情報ぐらいは無いと“冒険家”としてはおかしい」

“冒険家”の言葉をフェリアは強調した。

「詰まり、ヤツは冒険家でも何でもないと？」

「もしくは、ここの調査を怠ったか……だが、それは“冒険家”としては致命的なミスと言える。そんな愚行を犯すだろうか？」

穴に滑り落ちたブライアンの行方を気にすることも無く、二人は会話を続けた。

「じゃ、まさかデイブレイクの手先ってことか？」

「どれにしろ、あの男には気をつけて進むしかあるまい。我々として、情報はこれしかないのだ」

言つと、フェリアはコートのポケットから小型の端末を取り出した。

小さな画面が付いたそれは、付近の魔力量を表示するための測定器。

これを使用して、リヒト達は“アルカナエンジン”に、着実に近づいていた。

「どの道、あの男の目指す場所と、我々の目指す場所は同じよう

だからな」

締めくくり、フェリアはすくりと立ち上がった。
リヒトが後ろに目を向けると、大きく手を振りながらブライアンが駆けて来るのが見える。

「お待たせしましたあああああああああーっ
!？」

「見る、馬鹿が居る」
「何を今更」

指差すフェリアに、呆れの言葉を返すリヒト。
二人の視界の先には、再び穴に落ちたびしょ濡れの迷彩服が居た。
どうせ、また直ぐに戻ってくるだろう。
二人は、互いに頷き合い、フェリアは再びその場に腰を下ろすとした。

「ちよつと待て。何か聞えねえか？」
「さあな。あの男がお前の事を呼んでいるのではないか？地獄へようこそ、という具合で」

珍しく冗談をほめかすフェリアに目を丸くした。
が、今のリヒトにはそれよりも気になることがある。
どうにも、地底の底から響くような声は驚きと興奮に満ち溢れているように聞えるのだ。

——リヒトさあああああああああああーっ
!!

「五月蠅えっつか、マジで俺を呼んでたのかよ……」

「ほら見る。お迎えが来たぞ」

—— フェリアさああああああああああ
！！

「おい、お前にもお迎えが来たぞ」

「……仕方が無い。丁重に、迎えてやるとしよう」

降ろしかけた重い腰を上げ、フェリアは再び立ち上がった。

辟易とした両者の空気に割って入るように、ブライアンの喜びの
声は地底から響く。

—— それっばいところ見つけましたよおおおおおおお
っ！！

*

*

*

「んで、これがそれっばいところねえ……」
「どうです！？いかにもって感じじゃないですか！」

高揚するブライアンが、狭い穴の中で声を上げた。
指差す先にあったのは、人一人分ほどの穴を潜った先の岩に囲ま

れた空間である。

その中央には一つの岩が置かれ、恐らく、古代の祭壇のような形をしていた。

「間違いありませんとも！あそこに、アルカナストーンがあるのです！！」

リヒトは思わず耳を塞いだが、それでも、この密閉空間でのブライアンの声は脳にきんきんと響く。

早く行こう、と声をかけようとするよりも早く、ブライアンは身を屈めていた。

誰よりも早くその穴を潜り、先駆けと走る。

呆れたようにその後姿を見送り、リヒトは一度フェリアに視線を送った。

しかし、その意味をフェリアが理解するよりも早く――

「ぐうっ！！」

銃声が響く。

聞いたことも無いようなぐもった声に、リヒトは驚いた。

しかし、何よりも先に彼の思考は展開、最善の行動を探し出す。

今出来る事は、ブライアンの安否を確かめ、可能であれば逃げることであろう。

例え、ブライアンがデイブレイクの仕掛け人だったとしても――

「っち！」

「リヒト！」

舌打ちし、リヒトは素早く穴を潜った。

その先に広がる光景は地下とは思えぬほど広く、大きい。

入り口近くに倒れているのはブライアン。

暗くて見えないが、下に流れているのはきつと、彼自身の血液であらう。

すぐさまに駆け寄り、その肩を揺すった。

「大丈夫か!？」

「別に、命に支障はありません……が!」

語尾を強め、ブライアンは苦々しく声を上げた。

迷彩服の肩は血で染まり、苦しげに息を吐く姿は到底無事とは言えない。

が、それでも、ブライアンは意識を固く保っていた。
人差し指を擡げ、呻きながらも言う。

「私は、見ました……っ！そこにある、巨大な漆黒の影を!」

「はっ!？」

暗闇。

そこには既に壊れかけた祭壇があった。

しかし、その壊れ方はあまりにも不自然。

風化は、確かにある。

だが、風化した物はここまで激しく、破片を飛び散らせて壊れはしないだろう。

「まさかっ……!？」

リヒトの頭に、ある可能性が飛来する。

それは偶然と言うには出来すぎた状況と、ウエマツの状況との類似性。

即ち、そこに存在する不自然な影は――

「――ジョーカーマシンの、影です!!」

リヒトは見上げた。

空間に存在する、己に陰を差すその存在を。

同時に、ジョーカーマシンも声を上げる。

スピーカー越しのノイズ交じりの声で、笑う。

『くくくくくつ……遅かったじゃあないか、ブライアン……!!』

「ナード君！君なのかっ!!」

その陰険な声に、ブライアンは一際大きな声を上げた。

『そうだとも……貴様に人生を狂わされ、全てを失った、哀れな男ナードだよ!!』

宣言する。

恨みを込めた言葉は、確かに、ブライアンに届いていた。

「逆恨みもいい加減にするんだ！そもそも、あれは誰のモノでもない!!」

『何を言うか！貴様が……！貴様が、俺の人生を奪ったのだ!!』

興奮気味に叫ぶブライアンと、激昂した様子のナード。

二人の間に挟まれて、リヒトはただ、ある一つの可能性を考えていた。

概ね、この二人の関係性は推測できる。

フェリアの立てた仮説が正しいのであれば、という条件付ではあ

るが。

だが、だからこそリヒトは確信を持っていた。
それは詰まり、有り得て欲しくは無かった最悪の可能性の一つである。

『どうやらボディガードを連れて来たようだが、無駄だったな。
なあ、会長』

「君はっ!!」

ブライアンが初めて、その顔に怒りを表した。
話に取り残されたリヒトを見つけたか、ナードは上機嫌に語る。

『取り巻きにすら事情を話していなかったのか。懸命だな。貴様の身分が知れば、貴様自信にも危険が及ぶ』

「これ以上は!」

這い蹲りながら虚勢を張るブライアンに気分を良くしたか、ナードは高らかに言った。

『なあ!ブライアン・コーポレーション元会長!ブライアン・オズボーンよ!!』

——ブライアン・コーポレーション。

貴金属の売買を始めとし、手広く事業を展開する世界有数の巨大複合企業である。

そして、そのトップともいえる会長。

その男こそが、今、地面に這いつくばっているブライアン。

ブライアンは、咄嗟に目を逸らした。

誰の目からかは解らないが、確かに、そういった動きをした。

そこにあるのは、何よりも気まずさ。
まるで旧友に嘘がばれてしまったかのような、申し訳ないような
気まずさである。

「やっぱな。そんなこつたろうと思ったぜ」

しかしそれとは対照的に、飄々とした顔を浮かべる男が居た。
今まで空気と化していた”ボディーガード”、リヒトだ。

『貴様、知っていたのか？』

「いや。だがな、あんな“冒険家ごっこ”を見せられれば気が付
くだろ」

気付いたのは俺じゃないけど、と心の中で呟く。

ナードは、ふん、と、面白く無さそうに鼻を鳴らした。

「すまない……君達を巻き込んでしまったようだ。彼は、私を殺
すために……」

項垂れたまま、ブライアンは言う。

「ただ、私はここに“アルカナストーン”があると聞き、居ても
立つても居られなかったが……」

『そうだ。全て、私の流した噂に過ぎない』

が、とナードは続ける。

『噂は真実なのだ』

言っや否や、洞穴の中に光が燈った。

それは白色の光ではなく、ほの暗い緑色になった粘ついた光である。

そして、その光の発生源は、二人の遥か頭上。
緑色に光るのは——ジョーカーマシンの双眸。

『アルカナストーンと呼ばれる存在をジョーカーマシンに組み込むと、それは絶大な力を発揮すると言う。それが——』

「アルカナマシン」

リヒトが二の句を告いだ。

驚きに、ナードは口を閉ざす。

「ブライアンには悪いが、待ってたぜ……」アルカナエンジン」

フェリアを呼ぶと、その声は背後から響いて聞えた。

「魔力測定値も異常値。間違いない。“二つ目”のアルカナエンジンだ」

「そうなれば、だ」

リヒトは足元に居たブライアンを抱え起こした。

そしてその肩を貸して、二人で逃げる体勢を取る。

「逃げるぞ！ブライアン！」

『逃がすとも思つか？舐められたものだな……！！』

二人を掴み上げようと、ジョーカーマシンは巨大な腕を伸ばしたが、それを阻む存在がある。

同じく腕を伸ばすのは、暗緑色の装甲を持つジョーカーマシン。

“アルカナマシン”、グラインダーだ。

二機のジョーカーマシンに大きさの差は有れど、それ以外は全くの同一。

巨大な腕同士が接触し、激しく弾きあった。

その隙を突くかのようにリヒトはフェアリアの元へと走り寄る。

「やれやれ。これと呼ぶには骨が折れたぞ」

「自動操縦だから何もしてないだろうが！いいから、コイツを頼んだぞ！」

言うやいなやブライアンを預け、均衡の崩れ始めたグライNDERの元へと向かう。

だが、それを呼び止めるかのように唸る一人の男。

「君達は……逃げる……っ！」

息も絶え絶えに、ブライアンは言った。

その青い表情に浮かぶのは、後悔や責任と言った、ほの暗い後ろ向きの情念。

それは全て、リヒト達へと向けられている。
理解したからこそ、リヒトは振り向かない。

「一丁前に責任でも感じてやがるのか？だとしたら、そいつはお門違いだ」

「だが……っ！」

「自分の所為だと？はっ！自惚れるなよ。テメエは唯の“観客”だ。俺達はお前が居なかつと戦う」

その言葉にフェアリアが頷き、ブライアンは怪訝そうな顔を浮かべた。

リヒトがグライNDERのコックピットに飛び乗る。

同時に、二機のジョーカーマシンが戦いを始めるため、洞窟の天井を突き破り外へと飛び出した。

啞然とした様子で、ブライアンは呟く。

「君達は、一体……？」

「“英雄”改め、“切り札”^{ジョーカー}リヒト・シュッテンバーグ。そして

――」

目を細めて、フェリアは言う。

「“夜明け”^{デイブレイク}の裏切り者、フェリア・オルタナティブだ」

第八話 夜明け裏切り者（後書き）

1ピソードを二話分に収めるとすると大分長くなりますね。
次回バトルが始まります。

第九話 蛇の心臓

辺りを見回せば、そこは一面の緑だった。

己の元居た屋敷の周辺とは比べ物にならないほどに、緑の稜線が続く。

それは、改めてジャングル地帯に彼自身が居ることを感じさせた。足元に開いた穴に目を向ければ、崩壊しかかった洞穴が見える。が、フェリア達の居る場所は横穴であり、崩壊には巻き込まれてはいなかった。

—— 危惧を解消したりヒトは、再び、目の前に対峙するジョーカー——
—— 否、“アルカナマシン”を見つめた。

洞窟内で見ただけでは明かりが無く、その全容は見えなかった。だが、今ならばわかる。

あまりにもその姿は、本来のジョーカーマシンからはかけ離れているのだ。

本体のみを見るのならば、緑色の装甲に黒い幾何学線の入った一般的なジョーカーマシン。

頭部は鋭く、扁平上になっており、頭部装甲の隙間から覗く緑色の一對の眼。

しかし、その背には蛇のような触手がある。

その触手の一本一本には蛇の頭部が備え付けられていた。

それが計十二本、うねり、身体をぶつけ合いながら、獲物を見つ

めているのだ。

両腕をだらりと垂らし、猫背で獲物を睨むその姿は、まさに蛇――

『グラインダー……貴様、リヒト・シュッテンバーグか』

「おうよ。俺が第三次世界大戦の“英雄”だ。尻尾巻いて逃げ出すなら今の内だぜ?」

『ほざけ』

何を今更、といった風なりヒト。

その“英雄”の名で戦意を下げようと心中、思う。

しかし、相手はその神経質そうな声を愉悦に歪めていた。

『目の前に“英雄”とアルカナマシンが居るのだ。鹵獲して持ち帰れば、大きな手柄になるだろう』

「出来るかな?」

『出来るさ』

即答するナードに、リヒトは思わず苦笑した。

目の前の蛇は、今か、今かと飛び掛るタイミングを計っている。

そしてそれを目にして、グラインダーもまた構えを作る。

暗緑色のグラインダーと、黒緑色のウロボロスが相対した。

『Arcana Machine 01 Uroboros』

ナードが名乗る。

その身体を委ねる、寓意の化身の名を。

『喰らい尽くせ』

その言葉を契機に、二機のジョーカーマシンは一斉に動いた。先手を取るのはウロボロス。

その背からの伸びる蛇がグライNDERを食い殺さんと唸る。だが、グライNDERはそれを軽く、横に飛んで回避した。

そのまま回りこむような軌道を描き、ウロボロスの側面へと回る。

「しつこい奴は嫌われるぜ!？」

だが、ウロボロスの尾は直角に曲がり、グライNDERを追尾する。スピードでは遥かにグライNDERが優っている。

しかし、その追尾性能たるやミサイルよりも遥かに凄まじい。

そんな蛇が十二本、常にグライNDERを追いかけている。

幾ら本体を叩こうとも、このままでは背後から喰らい付かれて終りだろう。

「ならば!」

その場でくるりとターンし、グライNDERは己を追尾してくる蛇に目を向けた。

数は九。

残りの蛇は寝首を掻こうと様子を伺い、今直ぐに攻撃してくる様子ではない。

『無駄だ。貴様のグライNDERの攻撃力如きでは、蛇は殺せん』

ナードは嘲笑した。

確かに、グライNDERの短所の一つには攻撃力がある。

性能が速さを求めるあまりに、その攻撃力は速さに頼った拳撃や蹴撃のみ。

そして、その程度の攻撃では“アルカナマシン”の装甲を突破で

きない。

それが“アルカナマシン”の特徴とも言えるユニットであるのならば、尚更。

「本当にそうか？自分の目で、確かめてみるんだな——」

グラインダーは蛇の群れに飛び込む。

しかし、直前に大きく身体を捻った。

上半身の捻じれは下半身に伝わり、それぞれが独立したかのような回転を生み出す。

それはまるで銃弾。

スパイラル軌道を描き飛ぶグラインダーに付随して、四肢のバイパスもまた、渦巻くように振り回されていた。

飛び込んだ瞬間、火花が散った。

何事か、と目を見開いたナードが見たのは、己の蛇が千切れる様。断面は汚く、力任せに引きちぎられたことが容易に想像できる。

そして、それを絡めとったのはグラインダーのバイパス。

魔力の淡い光を纏ったバイパスは、引きちぎられた蛇の頭を牽引しながら舞っていた。

「絡め取る、つてのは蛇だけの技じゃあねえんだぜ。学習したか？」

『減らず口を……！だが！』

ウロボロスは後退しながら、己の背部から生えた蛇を切断した。

その場には蛇の根元の残骸が残され、同時に、ウロボロス本体を護るかのように待機していた蛇が戻る。

三本の蛇は鞭の様にしなり、グラインダーに警告を与えていた。ここより先へは行かせない。

ここより先に侵入すれば、攻撃すると。

「レスン2だッ！」

だが、リヒトは躊躇い無くフットペダルを踏み込む。

自律する蛇などよりも、グライNDERの方が速いことを解っているから。

直線における最高速を出しながら迫る。

まず、一本。

前方で邪魔臭くしなる蛇の中ほどを掴んだ。

そしてそのまま往なし、ついでとばかりに裏剣を叩き込む。

反応すら出来ずに、一本目の蛇が砕け散った。

そして、二本目、三本目の蛇を両手で挟み開けるように逸らした。

目の前にはウロボロスの本体が、間抜けにも仁王立ちしている。

そのまま、動かないウロボロスに渾身の一撃を――

『この程度で……！』

「な！？」

しかし、その拳は空で止まった。

否、空ではない。

確かに拳は砕いた。

だが、それは再び現れた蛇の一匹である。

背中から回り込むようにして、ウロボロスの身体自体を蛇が堅守していた。

『ウロボロスの能力は背部ユニットの無限生成。これを一度に薙ぎ払う攻撃を持たない限り、貴様は負ける』

「っちい！」

グライダーはその場から垂直に飛び跳ねた。

背後からは、先ほど往なした二本の蛇が向かい来るからだ。

『いい判断だ……が、遅い』

リヒトの顔が、初めて歪んだ。

見咎めたのは、両脚に繋がれていたバイパスが千切れる様。

逃げ遅れたバイパスのみが、蛇の毒牙に掛かる。

その勢いに釣られながらも、グライダーはどうにかある程度の距離を開けて着地した。

『やはり、絡め取るのは蛇の技だということだ。学習したか？』
「クソツたれ……！」

悪態を吐き、グライダーの損害状況を確認した。

無くなってしまった両脚のバイパスの他にも、危険な部位はある。

無茶を聞かせすぎたか、両脚の間接部も異常を訴えているのだ。

軋むような音が聞えた気がして、リヒトはやれやれ、と首を振った。

『さあ、どうする。それでもう、貴様の絡め取る攻撃は使えんぞ』

その言葉に、リヒトは深い溜息を吐く。

そして、口の端に自嘲気味の笑みを浮かべて、言った。

「……三秒」

『何？』

「三秒あれば、十分なんだがなア。流石に、制限が厳しいか」

貴様、という声の後に、がりりと音がした。

歯を噛むその様子に、リヒトはもう一度深く溜息を吐き。

「仕方が無い、そろそろ本気で戦ってやるか」

と、零した――

*

*

*

ブライアンは戦いの音を耳にしながら、あることを思い出し出していた。

それは未だ病室に居るであろう息子のことであるし、会社をまかせっきりにしてしまった妻のことでもある。

だが、彼が今一番心配しているのは、他ならぬ戦いの主。リヒト・シュッテンバーグである。

「傷は痛むか？」

「大丈夫です。問題は……っ！」

ブライアンの肩に激しく痛みが襲い掛かる。

思わず身体を丸めたブライアンに、フェリアはその場で薬を取り出した。

「痛み止めだ。これで、少しは楽になるだろう」

「ははは……ありがとう、ございます」

大声を張り上げる元気も無いか、その声はどこか弱弱い。

物足りない、とても言いたげに眉を顰めたフェリア。

その薬をブライアンに手渡すと、再び戦いの起こっている方向へと目を向ける。

洞穴が崩れた先にある、小高い岩の山。

崩落のお陰で見晴らしのよくなったそこに、二人は居た。

「……本当に申し訳ありません。私がナード君を説得できてさえいれば」

「何か、因縁があるようだな」

空気を察し、フェリアはその口で続きを促した。

大した話ではないのですが、と前置きし、ブライアンは語り始める。

「あの子は、本来ブライアン・コーポレーションの跡継ぎとなる筈の人間でした。優秀な男でしたからね」

「では、何故？」

「簡単です。彼はとある人間に“心奪われて”しまったのですよ」

苦笑するような、自嘲するような笑みを浮かべた。

「とある人間の名はルチアーノ——自らを“牧師”と名乗る男です」

その名を聞いた瞬間、フェリアは凍りつく。

同時に、冷静な頭が判断を下す。

「成る程。確かに、この戦い、私達の物だな」

「は、何ですか？」

「いや、気にするな。独り言だ」

フェリアの言葉に疑問を感じながらも、まあいいです、と首を振るブライアン。

どこか遠い目で戦いを眺めながら、話を続けた。

「ルチアーノに何かを吹き込まれたナード君は、ひたすらに全国
の拠点で活動を開始しました。不明瞭な、金が流れたのです」

フェリアには大方、予想がついていた。

だからこそ、やれやれとでも言うように首を振り、ブライアンを
制した。

「それで解雇されたナードは、ブライアンに復讐するために“噂”
を流しておびき寄せた訳だな」

「基本的にボディーガードが居るお陰で、ハンパな戦力じゃあ近
づくことすら出来ませんから」

疑問となるのは、何故、ナードがジョーカーマシンに乗っている
か、という一点。

だが、ブライアンはそんなことを考えては居なかった。

それをフェリアに問うてもせん無き事であるし、何より、フェリ
ア自身がそういった話を拒絶するような空気を纏っていたからであ
ろう。

「傍迷惑な」

「流石に、街中でジョーカーマシンに乗る事は出来ませんしねえ」
暢気に言うブライアンだが、その命が狙われていることには変わらない。

今はただ、リヒトの勝利を願うほか無かった。

*

*

*

蛇はくねり、今まで以上に苛烈に攻め立てる。

空間を、文字通り縦横無尽に這い、四方八方からグライダーを狙う。

が、それら全ては何も無い空間、或いは地面を碎くに留まっている。

グライダーは留まらない。

そのスピードを活かし、全ての蛇を振り切り、回避し、避け、往なす。

『その体で、良く粘る……』

だが、ナードは確信していた。

その動きは長くは続かないであろう事を。
そうなれば終り。

蛇を食いつかせて、コックピットブロックを破壊してやれば仕事は終了だ。

口の端に笑みを浮かべて、ナードは思い描く。
新世界に立つ己の姿と、這い蹲り命乞いをするブライアンの姿を幻視する。

彼自身は既に、己の勝ちを疑わなかった。

「ええい！鬱陶しいんだよボケエ！」

一方、リヒトは苦戦を強いられていた。
度重なる無茶な軌道により、グライNDERの脚部には限界が近い。
今はまだ回避し続けられているが、脚が無くなれば最早、羽をもがれた鳥になってしまう。

メインカメラをウロボロスに向ける。

そこにはただ、仁王立ちで蛇を操るのに集中している姿が見えた。

「舐めやがって……！」

一步も動じないその姿勢は、リヒトの心を燃やすのには十二分。
そろそろ試してみるか、という言葉の切欠にグライNDERのスピ
ードリミッターを解除した。

次の瞬間、グライNDERは加速する。

通常のジョーカーマシンでは到達できない速度の境地へ。

『なっ……！！』

グライNDERの速度は先ほどまでとは比にならない。

それはまるで、銃弾。

一直線に、ウロボロスを穿たんと迫る、一発の銃弾である。
爆発的な加速力は、アルカナマシン故の性能。

反面、それは乗り手に多大な負荷を掛ける諸刃の剣。
速度のあまりブラックアウトしそうな視界の中で、リヒトは薄く
笑う。

「俺自身、通常状態でどこまで耐えられるかは分からんが……！」

『こいつ……！！』

蛇は既に遙か後方で管を巻くだけの存在と化した。

残るのは、ウロボロスの周囲を警戒していた三本のみ。

先ほどと同じ状況に苦笑しながら、リヒトは更にフットペダルを
踏み込んだ。

「今回も、勝つのは俺だ——」

『止める……！』

宣言し、ウロボロスは再び背部の蛇を九本、パージした。

無用の長物となった蛇達が地面に落ちるよりも早く、グライダー
は拳をつきたてる。

守護する蛇の一匹目は、その頭を砕かれ地に臥す。

だが、それはナードも予測のうち。

あらかじめ配置しておいたもう二匹の蛇が、グライダーの横合
いから襲い掛かる。

完璧なタイミングに、ナードは勝ちを確信する。

『貰った——』

「甘いつつーの」

馬鹿にしたような声。

それはつまり、ナードの蛇は何にも喰らい付かなかったことを意

味する。

だが、それはグライダーも同様。直線上に進むことの出来ないグライダーは素早くその場に伏せるように飛んだのだ。

だが、それではウロボロスに攻撃は出来ない。

グライダーはスピードを落としながら、ウロボロスの横合いを通り過ぎていった。

『避けたか。だが、背中がから空きだ……！』

ウロボロスは振り向かない。

最速の攻撃手段を持っているのだから。

背部から生えた合計十二本の蛇が、全て、一点に集中するように襲い掛かる。

対して、リヒトは言った。

「振り向かずに攻撃するのは悪手だぜ……！！」

グライダーは振り返りながらも、その片手を高らかに挙げた。瞬間、ウロボロスに異変が発生する。

『——っ！？』

挙動を見ることの出来ないナードには、何が起こったのか目視する手段は無い。

ただ、背部の蛇が一斉に行動不能になった、という事実のみがメインウインドウに表示されていた。

そして、頭だけを振り返らせてその姿を見る。

グライダーが握っていたのは、ウロボロスが引きちぎった“グライダーのバイパス”であった。

そしてそれが、地面を這い、“ウロボロスが自ら”踏み付け、グライNDERの手が片方を固定する。

十二本の蛇は、細く長い、鉄色のバイパスに半ば無理やり地に固定させられていたのである――

『ここから、どうする気だ?』

だが、ナードの余裕は崩れない。
グライNDERには、攻撃の手段が無いのだから。

『その手を離せば、蛇は直ぐに戻って貴様を襲う。どの道、終りだ』

「ふーん。終り、ねえ」

『なにが可笑しい!』

くすくすと笑うような声に、ナードは怒りの声を上げた。

「俺、言ったよな?三秒で十分だ、能力の制限が厳しい、ってな」

『だから、どうした……!?!』

「見せてやるよ。グライNDER“裁断者”の能力を」

口の端に笑み。

暗緑色の装甲をがちりと構え、リヒトは鍵語を叫ぶ。

「Arcana Over!!」

時間の遅延。

時を止めるともとれるその能力にも、多大な弱点がある。

使用者への負荷、グライNDER自身のエネルギーの消耗などもそうである。

が、最大の壁は“使用条件”。

アルカナエンジンが要求する条件は、時間の集約。

そして、それと同価値の遅延。

詰まり、三秒時間を止めるためには、三秒間のチャージが必要なのである。

そしてその間攻撃を受けてしまえば、能力は失敗に終わる。

グライNDERの装甲には、細かいながらも損傷が見て取れる。

ウロボロスを相手取って、蛇を往しながら三秒攻撃を受けないのは不可能であろう。

だが、蛇が封じられたこの瞬間なら――

訪れるモノクロの視界。

リヒトの頭に血が上っていく様子を、本人が一番感じ取っている。視界が霞み、ぼやける。

だが、その眼光は衰えることなく、ただ一点を睨む。

「背中が……っ！」

グライNDERに残された、腕のバイパスが魔力の光を噴出した。それに吹き飛ばされるかのように、グライNDERは空間を奔る。幾多の敵を葬ってきた拳を構え、赤い瞳が敵を射抜く。

そこにあるのは、ただひとつの意思。リヒトは叫ぶ。

「がら空きだ――！！！」

突破。

その意思が、蛇の心臓を穿った。

*

*

*

『重要参考人だ。殺してはいないだろうな』
「当たり前だろ」

通信の向こうから、フェリアの声が聞えた。

ぶつきら棒に言い放ったリヒトは、倒れっぱなしのウロボロスに視線を投げた。

最期の突撃で破壊した背部ユニット及び腰部意外には目立った損傷は無い。

中に居るはずのナードが出てこないのも、恐らくは脳震盪が何かの所為だろう。

それを捕らえるために、ウロボロスの傍にはフェリアが待機している。

「それよりも、ブライアンは大丈夫なのか？」

『幸い、出血量に比べて傷は浅い。元氣にお前の戦いを観戦していたぞ』

冗談交じりの言葉に、リヒトは浅く息を吐いた。

溜息か、安堵か、感嘆かは分からないが、それでも、リヒトの向ける感情は穏かなものであった。

『Arcana Over……使ったな、リヒト』
「おう」

フェリアの声はどこか心配するような響きを孕んでいた。だが、それに気付かない振りをして、リヒトは即応する。言葉が出なかったのか、フェリアはそれきりに口を閉ざした。

——リヒトには分かっている。

擬似的とはいえ“時間を止める”荒業だ、何らかのリスクがあることは。

そう、例えば、使用直後の圧倒的な倦怠感、疲労の蓄積。

“英雄”と呼ばれたリヒトが、敵を倒したからとはいえ、そのままコックピットで寝てしまうことなど無い。

それは油断に他ならず、正しく愚の極みであるからだ。

だが、前回の時は半ば意識を失うようにして倒れた。

それこそが、アルカナオーバー——強大な力の代償なのだろう。

気にも留めずに、リヒトはふと、レーダーを見た。

備え付けられたレーダーは魔力に反応し、その位置を赤色で示す。レーダーには、赤い光点が四つ浮かぶ。

一つは、グライNDER自身。

一つは、ウロボロス。

では、後の二つは——

「フェリア!!」

叫んだ。

その声にフェリアが振り向いた瞬間。

「——ッ!!」

直視できない、眩い光条が駆け抜けた。

それは、白い色をした“破壊”という概念の塊。

それが着弾した場所は、間違いなく、ウロボロスであった。

爆発、そして衝撃。

辺りを魔力爆発特有の白い光が包み込み、グライNDERの視界が奪われる。

「クソっ！フェリアー！」

『……私は大丈夫だ』

あっさりと言葉を返すフェリア。

しかし、リヒトが目視し見つけたそのときには、その身体は爆風であおられた所為でボロボロになっていた。

白いコートは無残にも吹き飛び、黒く炭化している。

すぐさまにリヒトはグライNDERを操作、コックピットハッチを開放した。

「乗れ！」

「言われずとも」

フェリアはリヒトの手を借りてコックピットに乗り込んだ。

背後でコックピットが閉じていく音を聞きながら、リヒトは再びレーダーを覗く。

四つの赤い反応は変わらずに四つであるが、そのうちの一つは目視できる距離に存在していた。

「……ッ！デメエ……！」

リヒトはその姿を見て、思い切り奥歯を噛んだ。

忘れもしない、その濃灰色の影。

空間を“抉じ開ける”能力を持っているであろう、“^塔??”のア
ルカナマシン。

『よお、カトンボ野郎！元気してたかア！？』

「ファウスト……！！」

バベルは、静かに立つ。

神の落雷の落ちるその日まで、決して崩れることの無い塔。

立ちほだかる敵を前にして、しかし、リヒトは言う。

「テメエこの野郎！人の家破壊した拳句目エ覚ましたら消えてい
やがつて！修理費払えクソ野郎！！」

『黙れカトンボ！テメエにうつかり攻撃喰らったお陰で評価がダ
ダ下がりで危うくアルカナマシン降ろされかけたんだぞ！！』

「悪の組織の内部事情何ぞ知ったこっちゃねエよ！！」

『テメエの家計事情何ぞ知らねエっつの！！』

「貴様ら、子供か……？」

口汚く言い争う二人を見て、フェリアはげんなりと呟いた。

対照的に口喧嘩が広がる中で、リヒトはふと、素に戻ったように
言う。

「何故、ウロボロスを撃った？味方じゃあねえのか？」

『味方ア？こいつは道具だぜ、“道具”。アルカナエンジンを掘
り返すためのピッケルってトコよ』

ファウストは嘲笑うように言つてのけた。

ウロボロスは既に大破し、中に居た筈のナードは無事では済むま

い。

蛇の心臓は、活動を停止している。

その振る舞いに怒りを覚えたリヒトが、カメラアイ越しにバベルを、ファウストを睨みつける。

対して、フェリアが至極冷静に口を挟んだ。

「エンジンを手に入れさせ、後から奪う——貴様らの常套手段だったな」

『そゆこと。まあ、今回俺は戦いに来た訳じゃあないからなア……』

言つと同時に、バベルはその右手を水平に構えた。

その手に持つのは、黒く、長い砲身を持ったジョーカーマシンの拳銃である。

照準が狙う先は、崩れた洞窟の瓦礫、その天辺付近。

『お前らが妙な真似を見せたら、あそこで暢気に寝てやがる男は天国逝きだぜ？』

その行動に、リヒトは無意識下でその言葉を呟いた。

この状況をひっくり返す可能性のある、逆転の言葉を——

『おっと、“アルカナオーバー”なんて使おうとするなよ？速攻潰すからな？』

その潰す、はグライNDERに向けられたものではない。

魔力の膨れ上がるアルカナオーバー！

その発動魔力を検出し次第、無条件で人質は死ぬ。

ファウストの言葉に、リヒトはただ怒りを溜め込むしかなかった。

「目的は何だ？」

『ウロボロス……“Arcana Machine 01”の回収。ただそれだけだ』

言うやいなや、バベルはその無骨な片手を挙げた。

その掌が睨むのは、最早沈黙を保つしかなかったウロボロス。

リヒトは無意識下で息を呑む。

その魔力はリーダー上で、遥かに大きな光量の赤い点として表示されていた。

そして現れる超常、世界を歪める力。

ウロボロスの真下、ジャングル地帯であつた空間が、まるで地割れのように崩れていく。

その先にあるのは岩色の地層ではなく、ただ、深淵から這い出てきた闇である。

『バベルの能力は“空間の支配”。自由自在に空間を抉じ開けて、その隙間を移動できるのさ』

ビビったか、とファウストは鼻を鳴らした。

ファウストが言葉を紡ぐ間、ウロボロスは既に飲み込まれていた。そこには影も形も無く、ただ、“闇があつた”という事実を示すジャングルの空き地が存在するのみ。

ファウストの言葉を聞いても、リヒトは未だに深淵の闇を見つめたまま動かない。

リヒトはその事実を認めたくなかつた。

が、確かに、意識していた。

—— 吞まれている、と。

『さて、仕事もこれで終りだ。俺も帰って、籠球の試合を見たいんでなア』

そして、前回の戦い。

矮小な存在が、綱渡りのバランスの上で手に入れた“相討ち”という結果。

齒を食いしばる。

だが、同時に思うこともある。

“魔力”、“アルカナエンジン”、“デイブレイク”、“フェリア”――

これらの全てとは行かないが、ある程度の真実を掴んだりヒトなら、或いは。

否、真実を掴んだりヒトなら、目の前の強大な存在にも対抗できる。

知らず知らずのうちに、リヒトの口の端が上がった。

『じゃあなア、哀れな“道化”^{えいゆう}君よオ』

ファウストは皮肉を込めて、そう呼んだ。

再び、バベルの巨体が空間の割れ目へと還っていく。

「……上等」

その姿を見咎め、リヒトは怒りを込め、親指を下へ突き出した。

「ファウスト、次に会った時がテメエの最期だ」

去り際のバベルが、親指の意志を返す。

高らかに掲げた中指は天を向き――リヒトは、まだ顔も知らない男へと再戦の意思を固めた。

第九話 蛇の心臓（後書き）

こちらへんからようやくトンデモロボと戦えますね。

個人的に早く出したい機体も居るので、年末はハイペースで頑張ります。

第十話 砂塵の地にて

「あー、クソ！一体どうしてこうなった！」

直射日光を浴びながら、リヒトは往来の真ん中で毒づいた。周りにあるのは砂と、石造りの建物と、浅黒い肌の人種の群れ。彼の探している存在は見当たらない。

リヒトは探し回ることを止めて、沿道の瓦礫に腰を下ろした。

その背後に存在していた建物は崩れ、あちこちに未だ残る焦げ跡がその激しさを物語る。

この町で行われている行為、それは、戦争。

人類が人類を粛清し、信念の名の下にそれは行われる。だが、そんなものは今のリヒトには興味がまるで無い。

「見つからねエ……手懸りも、何もかも……」

今日で、三日。

探し物を見つけられぬまま、三日が無常に過ぎ去っていた。

楽天家のリヒトとは言え、流石に焦ってくる。

“アルカナエンジン”などという存在を紛争に利用されれば、それこそ、戦いは泥沼と化してしまう。

そのこの往来を行く罪の無い人間たちが、無闇に血を流すこととなりえるのだから。

暑さに頂垂れるリヒトに、影が差した。

それは決して雲が流れたわけではなく、好意を持った人間が寄ってきたわけでもない。

逆に、その人影は害意のみを持って笑っていた。

男の肌は黒く、そして、全身に傷跡を残した戦士だ。

その識別帽と羽織った黄土色のタクティカルベストから、男は軍人であることが分かる。

ご丁寧にもその腰には大型のアーミーナイフを引っさげ、威嚇するように陽光を照り返していた。

そしてその影を見上げようとせず、リヒトは言う。

「何人目だよ……」

「——？」

男の喋る言葉は異国の言葉だ。

脳内で翻訳しようと思えば出来たが、それをリヒトはしなかった。理由は単純、男の言葉を解す必要性を感じなかったから。

それでも、男が呆けた顔をし、次に笑い出したことから、リヒトが馬鹿にされていると言う事実に気付くまで時間は掛からなかった。だが、それを怒る気力すらも、リヒトには無かったのだ。

「いい加減にしろよ、クソ野郎が。揃いも揃って弱い者虐めしか出来ねエヒヨッコが、パイパイ喚くな」

わざわざ言葉を現地のものに変えたこともあって、男は途端に顔を真っ赤にした。

そしてそのまま、自慢のアーミーナイフを抜き放つ。

が、その時にはすでに、リヒトの手刀が喉元に刺さっている。

悶絶する男を尻目にリヒトは立ち上がり、アーミーナイフを持つ

右手を踏みつけた。

堪らず、男はアーミーナイフを手放す。

「いいか、ボンクラ。俺は今最っ高に気が立ってるんだ。次俺の邪魔したら容赦しねエ」

涙目の男にそれだけ言うと、リヒトはその足をどかした。

怯えた目で見上げる男を一瞥すると、リヒトは足を振り上げて――

「分かったなら、寝てろ――！」

振り下ろす。

踵落としが決まり、男は無様にも砂の上に倒れた。

残されたリヒトは、一人、空に呟く。

「クソ、何処行っただよ……あんのクソ女！」

リヒトの視線は、憎らしいほど晴れ渡る空。

リヒトのポケットには、壊れた携帯電話。

リヒトの隣に、フェリアは居ない。

事情を説明するならば、彼らがこの町に辿り着いた三日前の日
で遡る――

*

*

*

「お前、暑いのに大丈夫なのか？前より健康的だけど」
「私は寒冷地に棲む動物では無いぞ」

リヒト達が新たに踏み入れた任務地は、ほぼ同じ緯度に存在する砂漠の国だった。

石造りの建物が主流の、まだまだ発展途上の国。
しかし、ここには今、世界の何処よりも“兵器”が溢れている。
紛争地帯となっているこの地域は、今や各国の兵器試験場と化しているのが現実であった。

代理戦争とも呼べるこの紛争は、第三次世界大戦終結後から未だに終わっていない。

「んで、ここにデイブレイクがジョーカーマシンを持って現れるって事か？」

「“アルカナマシン”であるかは分からないがな」

フェリアが吐き捨てるのと同時に、リヒトは賛同の意を返した。
この紛争地帯にデイブレイクのジョーカーマシンが派遣される、
という情報は、何処からかベルランドが掴んできた情報である。
果たしてその情報源を信用できるのかどうかは、分からない。
だが、彼らはわざわざ、この地に足を運んだ。

しかし、前回の“ウロボロス”以降手懸りをなくしてしまった彼らには、とりあえず足を動かすしか道は残されていなかったのだから。

「不確かな情報でしか動けないってのは、こう、やきもきするな
ア」

「ぼやくな。それは、私とて同じなのだ」

だからこそ、フェリアは自然に足を速めていた。

リヒトには、その表情が心なしに焦っているように見える。

彼女自身が言っていた訳ではないが、リヒトには大まかに彼女の心境を察していた。

きつと、フェリアは“デイブレイク”と深く関わっている。

その上で、“今の”デイブレイクが、決して、許せないのだ。

リヒトは独り、苦笑する。

最初は鉄面皮のような女の表情も、最近になって変化がわかるようになってきた。

ならば。

ならば、今しばらくは彼女の“手足”となつて、デイブレイクとアルカナエンジンを追うのも悪くは無い――

二歩ほど先に行くフェリアを追つて、リヒトが大腿で歩き出した時だった。

「きゃあっ!?!」

目の前から、甲高い嬌声が上がった。

一瞬フェリアのものかと瞠目したリヒトだが、肝心の本人は突っ立ったまま首一つ動かしていない。

もしもこの状況でこの悲鳴を上げたのなら、相当珍妙な状況であろう。

下らない考えを巡らせるリヒトとは対照的に、フェリアはいつも通りの冷静さであった。

例え目の前に突然、人がぶつかつてきても表情を崩さない。

「大丈夫か？」

「助けてくださいっ！追われてるんですっ！」

が、開口一番この科白を並べられては、フェリアも困惑の沈黙を返すしかなかった。

言う間にもぶつかって来た若い女はフェリアの後ろに隠れる。

その不安定な表情を振り返り、今一度見る前に、フェリアの目の前には複数人の屈強な男が現れていた。

「……逃げられるとも思ってたのか？この阿婆擦れ女が！」

口汚く言葉を吐いたのは、先頭を行くスキンヘッドの男。

浅黒い肌はこの地に住む人間の特徴であり、大きな体躯は軍人をおわせた。

事実、彼の黄土色のベストはこの国の国軍正規のものであるが、リヒト達を知る由は無い。

「アンタ等みたいなスカポントンに触らせるほど、乙女の柔肌は軽々しいものじゃありませんよ！！」

「んだとオ！？」

好き放題に言う女だが、肝心の身体は完全にフェリアに隠れていた。

顔だけ出して舌を伸ばし挑発する女に、男達は怒り心頭、といった具合だ。

しかし、当人らの関係性を全く知らないリヒトとフェリアだけが、果然とその様子を窺っていた。

「オイ、テメエ！女だろうが、そいつを庇うなら容赦はしねエぞ

「!!」

「いや、そんな気は無いが」

「ちよっと！乙女のピンチよ！？ちよっとぐらい協力してくれてもいいじゃないの！」

恫喝する男だが、フェリアはさらりと流す。

それに否定の言葉を投げた女は、どうにも酷く怒っているらしい。フェリアが、やれやれ、と溜息を吐いた。

「面倒だ！全員、やっちなえ!!」

気付けば辺りに居た人達は全て遠巻きに喧騒を眺めていた。

そして、男の言った“全員”には、遠巻きに離れなかった自分が含まれていることを理解し、リヒトは溜息を吐く。

猛然と腕を振り上げる男に対し、それを制止しようと一步を踏み出したとき。

その場に居た全員の耳に、頭の割れるような甲高い音が響いた。

「きゃあああああっ!!」

「な、何だこりゃあ!」

狼狽する、謎の女とリヒト。

対して冷静なフェリアと、二人ほどではないが焦りを見せる男たち。

そして何よりも、周囲で遠巻きに観察していた人間たちが、慌しく動き始めた。

「成る程、これは警報だな。この町に爆撃機でも飛んでくるのだろっ」

「冷静に言ってる場合じゃ——のわっ!」

フェリアが冷静に考察を述べたが、その言葉は半分ほどもリヒトの耳に入っては居なかった。

知らぬ間に人の流れは大河となり、リヒトや男たちを包んでいたのだ。

喧騒が既に轟音と化し、フェリアとリヒトの会話を阻む。

そして、流れは次第に激流と化し、二人の間を隔てるようになつていった。

「——おい！フェリア……——っ！！」

それ以上言葉を届けることも出来ず、リヒトは人波に飲まれたのであった。

*

*

*

路地を抜けた先にあった屋台の中で、二人の女性がベンチに腰掛け会話していた。

「いやあ、助かりましたよ！どうにか、あの馬鹿どもも撒けたみたいで」

「そうか」

フェリアの正面で、女は心底安心したようにからりと笑った。
年の頃はまだ若く、金色の髪がいたるところで自己主張激しく跳ねている。

その姿から想像できるのは、そそっかしいものであったが、実際そうなのであろう。

服装を見れば、この国とは明らかに違う、異国感丸出しのラフスタイルだったのだから。

が、そのことについて言及できるほど、フェリアの服装も馴染んでいると言いがたかったのだが。

「私はリラ・アーノート。フリーのジャーナリストをやってます」

リラは薄い胸を張り、自慢げに笑った。

そのしたり顔に思わず、フェリアは苦笑する。

尤も、その苦笑はその表情が殆ど変わる事は無く、リラに気付かれる事は無かった。

「貴女は？」

「フェリアだ」

リラの期待を込めた眼差しに耐えかねて、フェリアは名を名乗る。出来ることならば今直ぐにリラを振り切ってリヒトと合流したいのであるが、それが出来ない。

先ほどから食い入るように見つめてくるリラを前にして、逃げられるほどフェリアは大胆不敵ではなかった。

「で、フェリアさん。貴女、この国の人間じゃあないでしょう？」

答えるのも億劫で、首肯だけで返した。

まるでクイズ番組で正解したかのごとく大げさに喜んだリラを尻目に、気付かれないように溜息を吐く。

「ジャーナリストの勘は鋭いですよ！」

「……別に、普通だと思うがな」

「何か言いました!?」

「……別に」

リラの迫力に負け、思わず首を横に振る。

本当にジャーナリストかと疑いを掛けるほどに、彼女は猪突猛進であつた。

「じゃあ、貴女はこんな噂を知ってますか？」

声のトーンを変えて、リラは続ける。

「この紛争に決着をつけるために、軍部がジョーカーマシンを新たに用意したって話」

「……!!」

思わず、フェリアは息を呑んだ。

確信に近い情報が、意外な人間の口から出されたことに、驚きを隠せない。

が、それでも、フェリアはポーカーフェイスを保って言った。

「……知っている」

「そのジョーカーマシンが“ただの”ジョーカーマシンでは無い、って事も？」

「ああ」

短く答えた。

無論、フェリアの返答は全て推測の元に打ち出されたものであり、合否を判断するには直接それを見るしかない。

だが、今は、少しでも“アルカナエンジン”に辿り着くための情報が必要であつた。

いざとなれば、リヒトとの別行動も辞さない。

そんな気持ちで、フェリアの胸中に渦を巻いていた。

一方、そんなことは露知らず、リラが隣で子供のようにはしゃいでいる。

「やっぱり、ジャーナリストとしての勘が冴えてるわ！この山場、頂きね！」

「嬉しさに水を差すようで悪いが、まさかこの調子で他の人間にも聞いて回っていたのか？」

「え？そうですけど？」

それが何か、とても言いたげに首を傾げるリラ。

フェリアは内心驚きながら、同時に納得していた。

「道理で、あんな荒くれ男に目を付けられる訳だ」

「ちょ、私は悪くないですよ！アイツらがですねえ……！！」

以後、暫く続いた男たちへの罵詈雑言を聞き流しながら、フェリアは考える。

デイレイクは果たして、本当に紛争へと介入してくるのか。しかも、わざわざ“軍部”への助力という形で。

それはつまり、デイレイクは小国ながらも、国の中枢への影響力を持っているということだ。

組織力の高さに驚き、そして、改めて考える。

果たして、一構成員に過ぎなかった自分自身が、牙を突き立てる事が出来るのか。

答えは、否。

圧倒的な力を前にすれば、フェリアなどただの女性に過ぎない。だが、彼女の掌にはまだ、希望が残されている。

“英雄”にして“切り札”^{ジョーカー}、リヒト・シュッテンバーグ。

“稀代の天才”にして親友、ハインリッヒ。

そして、“外なる子”^{アウトオーダー} オルタ。

三人の助力があれば、或いは。

デイブレイクを瓦解させることも、可能かもしれない――

「ちよつと！聞いてます！？」

フェリアの思考はリラのなる声で中断させられた。

やれやれ、と肩を竦めながらも、隣に座るリラへと向き直る。

その瞬間――リラの背後から、一人の男が現れた。

「むぐうつ！？」

そして男はフェリアが応戦するよりも早く、リラの口を塞ぎ、拘束した。

突然のことに身悶えるが、リラの力ではその男の拘束を破る事は出来ない。

そしてもう一人、別の男が現れてフェリアに言う。

「お前がフェリアだな？」

「貴様ら、何者だ？」

「一緒に来てもらおう。拒否権は無い」

その言葉に答える気は無いのか、男は淡々と言葉を紡ぐ。
有無を言わさぬ男の物言いに、フェリアは一瞬考え込むかのように沈黙した。

が、目に涙を浮かべるリラの姿を見て、自嘲気味に首を振って両手を挙げる。

「……仕方が無い。危害を加える気は？」
「無い」

短い問答と共に、二人の姿はその露天から消えた。

後に残されたのは、人込みに紛れたときに壊れたフェリアの携帯電話。

それと、注文者が居ないという状況に疑問符を浮かべる露天の店主のみであった。

*

*

*

フェリアと逸れ、約五日。

既にそれだけの時が経っているのにも関わらず、リヒトは何一つ

探し出せていなかった。

発見したことを言えば、この国の兵隊は酷く野蛮で横暴なチンピラ崩れであること。

そして、異国民ゆえか、彼らに自分自身が絡まれやすいということのみだ。

だがその二つの情報は、肝心の探し人、探し物共に繋がらなかった。

「あぢいー……クソ、一体、俺が何をした……？」

沿道に座り込んで、リヒトはコートを脇に抱えたまま項垂れた。そんな彼の姿に、荒くれの軍人達の間で“死神”という渾名が付いていることを知る由は無い。

絡んでくる軍人を悉く力技で排除した結果である。

本人としては五月蠅い蠅を追い払っただけであっただが、そのネームバリューは確かに、この町に浸透していた。

そして、この町に居るのは軍人だけではない。

「もし、その御方。随分とお困りの様子ですが、如何しました？」

「……あん？」

この地でリヒトに話しかけてくる人間は、基本的に敬語は話さない。

それが果たして民族柄なのか、単に性格ゆえなのかは分からないし、リヒトは気にしてもいなかった。

だから、いつもならば問答無用で胸倉を掴む手を抑えた。

「私に協力できることならば、何なりと実行できますが？」

独特の口調と訛りを持つ男は、今までと同じ浅黒い肌だったが、頭に巻きつけた緑色のバンダナの下に潜んでいる細目は、今までの誰よりも限り無く鋭い。

リヒトは見上げて、開口一番にこう尋ねた。

「テメエ、軍人じゃないなら……誰だ？ いや、違うな……“何処のヤツだ？”

「鋭いですねえ」

リヒトの言葉に満足したか、男は頷き、嬉しそうに口の端を上げた。

その様子を怪訝そうな目で眺めるリヒトであったが、その正体には見当が付いていた。

この地で起こっている紛争。

そもそも、紛争とは相手が居ること初めて起こる“戦い”という行為だ。

ならば、現在この地で正規軍と争っているもう一方の組織は何か。

「私は“人民開放部隊”の隊長をしております。イナドと申します」

「そうかい」

リヒトは内心瞠目する。

何故、わざわざ組織のトップに当たる存在がコンタクトを取ってきたのか。

が、表情には全く出さず、己の心の内のみでその言葉と意図を反芻した。

「意外と驚かれませんか。サプライズが必要だったでしょうか？」

「ああ、そうだな。驚かせるには一味も、二味も足りなかった」

リヒトはつんけんとした言葉を返す。

その男の意図が読めないのだ。

“英雄”と呼ばれたリヒトに接触するのならば、やはり、その能力を目当てにしているのか。

だが、リヒトが易々と紛争に介入できるはずも無い。

どうあっても、リヒトは紛争の協力はしない考えであつた。

「ならば、この話を聞けばどうでしょうか？」

が、気になる。

何故、こつも、イナドと名乗つた男は自信満々の笑みを浮かべているのか――

「貴方の探し人であるフェリアさんを預かっているとえば、少しは驚いてくれるのでしょうか？」

「……………」

事無げに言うイナドに、今度こそ、リヒトは掴みかかった。

何故、その言葉を聞いただけでそうしたのは分らないが、ただ、怒りが膨らんだ。

目の前の男がもしも、フェリアに何か危害を加えているのであれば――

「落ち着いてください。我々は、何もしておりません。保護しているだけです」

その言葉を聞いても、リヒトはその眼光を緩めなかった。

警戒を解く事無く、静かに言う。

「ああ、驚いた。物凄くな。だから、一つだけ聞く。クソ女に会うには、どうすればいい？ テメエの要求は何だ？」

「要求なんて、ありませんよ。私は唯、貴方が困っていたので助けようと思っただけです」

胸倉を掴まれたままでも、イナドの笑顔は崩れていなかった。

この状況で眉の一つも動かさないのは、胆力の賜物か、相当の自信を持つのか。

その様子に観念したのか、リヒトはその腕を下ろして息を吐いた。

「……案内しろ」

「ハイ、分かりました」

崩れた襟元を直しながら、イナドはにこりと笑った。

第十話 砂塵の地にて（後書き）

やっぱり三話で一つのエピソードとすることにしました。
二話だと走り気味になってしまうので……。

第十一話 死神と龍

それは、砂漠の中の発展途上国とは考えられぬほどの部屋だった。備え付けられたテレビは大型液晶で、空調設備も整っている。調度品はまるでホテルの一室のように綺麗であつたし、彩る照明は柔らかな光を放っていた。

だが、そんな中に居るのは穏かな様子ではない女性二人組み。

「……………」

腕を組み、黙りこくつたフェリア。

「ああ、もう！私はこんなところで死ねないのよ！死んでたまるもんですかっ！！」

泣き疲れたのか、今度は怒り始めたリラ・アーノート。

両者は四人掛けのソファに腰を下ろして、優雅に紅茶を啜っていた。

尤も、リラの場合は啜る、というよりも流し込む、といった体であつたが。

「落ち着け。そう焦っては、いい結果は生まれないぞ」

「大体、何で私が捕まらなきゃならないんですか！？戦争ジャー

ナリストですよ!？」

戦争ジャーナリストだからだ、という言葉に紅茶と共に飲み干し、フェリアは首を振った。

その動きを否定と取ったか肯定と取ったかは定かでは無いが、リラの怒りは更にボルテージを上げる。

怒りの矛先が向かうのは、先ほどから唯一の出入り口に立つ黒服の男だ。

「ちよつと、アンタ!こんな事して恥ずかしくないの!?人間として一片の良心があるなら、早く私たちを解放しなさい!！」

だが、その言葉に帰ってくるのは沈黙であり、リラは悔しそうに表情を歪めた。

焦りが先行している様子のリラとは違い、フェリアは事態を把握しようと努力する。

そもそも、拘束する理由。

それも、二人とも同時に拘束せざるを得なかった理由だ。

どちらか片方が対象であったが、結果、仕方が無いので両者拘束したという線。

これには、フェリアは己自身が狙われる自覚はある。

それ故に、そこに立っている男の所属している組織が“軍”及び“デブレイク”に関連する組織であることが推測できる。

尤もこの説は、リラの齎した情報が正しければ、という注意書きが付くが。

一方、ジャーナリストであるリラを狙ったというパターン。

これは良くある話で、こういった紛争地帯では人質を取るためにジャーナリストを拘束することがある。

そしてその場合、十中八九バックの組織は“反乱軍”ないし“革命軍”だ。

これは拘束する対象がどちらでも良かった、という例においても通ずる。

だが、だからこそ、フェリアは怪訝に眉を顰める。

何故、ここまでの待遇で人質を置いておく必要があるのか。

ここへと放り込まれるまで意外には目だった拘束は無く、所持品なども無事なまま持っている。

危害を加える気は無い、とまで言った。

普通なら、所持品は全て奪い、抵抗の可能性を無くすはず。それは果たして、彼らの自信か、慢心か、それとも――

「フェリアさん!!」

現実に意識を引き戻したフェリアに、リラは怒り顔のままで指を突きつけた。

「貴女も、脱出したいでしょう!? こんな訳の分からない連中に捕まったままにいる道理は無いのですから!」

熱の籠った言葉に、フェリアはただ頷くことしか出来ない。

そう、訳の分からない連中。

軍や反乱軍の取る人質と考えるには手緩く、ただの軟禁である現状。

では、彼女らを軟禁状態にする理由が必要だ。

その理由とは一体――フェリアがおぼろげながらも答えに辿り着きかけた瞬間だった。

『――敵襲!! 敵襲!!』

「きゃああああああつ!？」

焦った声は、部屋に備え付けられたスピーカー越しに響いていた。驚いた拍子にリラはティーカップを取り落とし、鋭い悲鳴が同時に木霊する。

「敵襲……まさか」

男の声で、只管にその事実を告げている。

そして、部屋の入り口に立つ男も珍しく慌てていた。同時に、腰につけていた通信機器を取り出して耳元へと運ぶ。恐らく、上のものへと指示を仰ぐための行為だろう。

それは、拘束する者される者、両者共に予定外のイベント。だが、フェアリアにはまたとない状況。

敵となる存在に襲撃され、浮き足立った今のみが。

「リラ」

「きゃあああああああ——って、はい？」

「逃げるぞ」

女性二人が理由見えぬ拘束から逃れ得る、ただひとつの好機であった。

*

*

*

「あの野郎、また何も言わなかった……今度絶対潰す。絶対にだ」

砂地を走る装甲車両ががたと揺れる中、リヒトは呪詛の言葉を吐いた。

表情は剣呑であり、それら全ての怒りと怨みは遠くに居る一人の男に向けられている。

「仕方ないです。連絡が来たのは、貴方が到着した次の日でしたから」

「そういう問題じゃねえんだよ……」

運転席で軽快に車を飛ばすイナドが、苦笑しながら言葉を紡ぐ。
が、それはリヒトの心を静めるには至らない。

イナドが運転する車に乗せられ、最初にした事は全てのネタばらしであった。

彼の所属する人民解放部隊は、この地で圧政を続ける軍をどうにかするために立ち上げられたゲリラ組織だ。

そして、そこに対する援助を担当していたのが、第三次世界大戦時に知り合いであった“三英雄”が一人、“猛禽”――

即ち、ベルランドは最初から、彼らの存在を知った上でリヒトを寄越したのである。

そう、フェリアが既に彼らの手中に居る事は幸運なことであり。
だからこそ、リヒトは連絡不備という理由でベルランドをうらん

でいた。

「そもそも、一度や二度じゃねえ。全部だ、今までの仕事、全部で連絡を寄越しやがらねえ！」

ブライアンの件に関しても、リヒトはベルランドが一枚噛んでいたらと見ている。

バベルが去った後に素早く派遣された“ブライアンの執事”が、“軍用ヘリ”を操っていたのがいい証拠である。

「きつと、サプライズが好きなんでしょう」

「笑い事じゃねえぞ！」

くすくすと笑うイナドに、リヒトは面白く無さそうに鼻を鳴らした。

「あの野郎は昔っから俺だけには適当に当たりやがる。“英雄”ともあるっ者だぜ？もうちょっと、良い待遇を期待したいんだがなア……」

「きつと、信頼しているでしょう。リヒトさんのことを」

イナドが言うと、リヒトは胡散臭げに首を振った。

その様子をバックミラー越しに一瞥し、イナドがくぐもった笑いを漏らす。

リヒトはその様子を、同じくバックミラー越しに睨みつけるが、イナドが止めようともしない様子を見て嘆息した。

そこから暫く、車内には会話と呼べる物は無かった。
横たわる沈黙。

響く音は、タイヤが砂を噛む小気味の良い音のみ。
いつの間にか、リヒトの意識は眠りの際へと落ちかけていた。

「——っ!!」

だが、突如その目を見開く。

リヒトの耳朵には、確かに、砂噛み以外の音が届いていた。
車外へと身体を傾け、食い入るように砂塵の奥を覗き込む。
一連の行動に、イナドは緊張の意図を察した。

「まさか……」

「急げ！イナド!!」

口にするが早いか、イナドは言葉とほぼ同時にアクセルを踏み込んだ。
んだ。

全速力を出した車は大きく跳ね、中に居る二人が一瞬宙に浮かぶ。
そして、どこまでも広がる砂塵の奥で見たのだ。

イナドの目指す先で、戦闘行為が行われているのを——

『……イナド様。敵襲です』

車内に響いた声は重苦しく、イナドに緊急事態を告げるものであった。

片手で器用にスピーカーの音量を最大に上げると、いつの間にか付けたヘッドセットで返事を返す。

「敵戦力はどうです？それと、姫は？」

姫の言葉には心当たりがある。
恐らく暗号、しかも、リヒトの“相棒”に当たる存在を暗喻した言葉だ。

『敵戦力は歩兵を主力としていますが、装備からしていつもの正規軍です。姫は……』

音量最大のためか、通信機の向こうからは絹を裂くような女の悲鳴が響いていた。

それをリヒトが聞きとがめると同時に、突然通信が途絶える。が、数秒の後に何事も無く復活。
しかし通信機越しの状況は、劇的に変化を遂げていた。

『今、逃げられました』

「……ッあの、馬鹿女が！」

リヒトは思わず毒づいた。

そもそも、フェリアには何の事情の説明もしていなかったのか。疑問を籠めてイナドを見やると、イナドもまた、通信機の先を眺めているように見えた。

数秒、緊要な沈黙が続き、通信機の向こうの男は口を開く。

『申し訳ありません。急いでいたもので、事情の説明を忘れておりました』

「……もういいから、君は、姫を捜しなさい。付き人も一緒に、だ」

『了解しました』

言葉と共に、通信が断絶する。

そして、待っていたかのように、車内に二つの溜息が零れた。

「……急ぐぞ、イナド」

「はい。そうですね……」

砂塵を巻き上げ、暴走運転をしながら、全ての役者が揃いつつあった。

全てが目指しているのは、イナドたちの隠れアジトの一つ。
そしてそこに居る、ただ一人の女科学者。
フェリア・オルタナティブ、その人であった。

*

*

*

爆音が響き、甲高い声が上がる。

揺れる白色の廊下を走り、フェリアたちは出口を目指していた。

「ここはどうやら元研究所といった具合か……ならばこの廊下は

……」

「っきゃあああああっ！ー！」

非常事態にも冷静に対処し、先導するのはフェアだ。

いつも通りの鉄仮面に焦りを映すことは無く、迅速に行動する。

一方、金切り声を上げる女性はリラ。

恐怖を押し殺す事無く声を上げる様は、しかし、一般人の反応には相違ない。

その事に関して責める事も、宥めることも出来ないフェアは、ただ只管に脱出を目指していた。

背後からの追手は未だ無いことだけが幸いだ。

「イヤあああああつ!!」

また、爆音が響いた。

それと同時に上がる金切り声に耳をやられながらも、フェアは確実に出口へと歩みを進めていた。

既に研究区画を抜け、エントランスへと繋がる一本道の廊下へと辿り着いている。

「うう……もうヤダあつ!」

もう何度目かの、リラの泣き言。

ただし、今回ばかりは切迫した、本気の泣き言だった。

その証拠に、先ほどまで手を引かれていたリラはその場に座り込み、細面に涙を浮かべていた。

「どうした、あと少しで脱出出来るんだぞ?」

「さつきから爆発してるって事は、敵が居るってことじゃない!」

ヒステリック気味に叫んだリラ。

フェアは、意外に状況を把握しているな、と、どうでもいい感

想を抱いた。

が、それは今この状況の解決にはならず、溜息を吐きながらリラへと向き直る。

「なあ、リラ」

「囲まれているんじゃないじゃあないじゃない!!」

「むう……」

慰め程度としても掛けようとしていた言葉を先に言われ、フェリアは押し黙る。

いつの間にか涙は浮かべるだけでは飽き足らず、流れるほどの量となってリラの頬を濡らしていた。

「しかしだな、ここで止まっても」

「もう、どうしろって言うのよお……」

どうにも、フェリアには他人の心の機微といったものは理解できなかった。

だからこそ、彼女は他者よりも深く物を考える。

せめて他人よりは役に立つように、せめて他人の役に立つように。深慮癖とも言える。

だからこそ、彼女はその背中に迫る黒服の男に気付く事は無かったが――

「ええい!! もういいわ!!」

「……ぐうっ!？」

突然立ち上がったリラの拳を顔面に受け、無様に倒れる男。

その姿を見て呆然としたフェリアは、後ろに倒れた男を一瞥することすら出来なかった。

この男はフェアリア達を保護しようと駆けつけた人民解放部隊の一員であったが、それに気付けた者は誰一人としていない。

「だったら、最期まで無様に生き抜いてやるうじゃない！！死んだって、諦められるモンですか！！」

「リラ……」

リラは涙を拭いながら、声高に宣言した。
それは覚悟。

死に怯えて生きるのではなく、生きる為に死ぬ程の覚悟。
その意思を受け取ったフェアリアは、薄く微笑み。

「そうか。ならば——」

「女の底意地、見せてやるわっ！！」

リラの威勢のいい声と共に、フェアリアは頷いた。
そして、脳裏に“とある男”を思い浮かべる。

「一度死んだ気分で、行くわよっ！！頑張れ、逃げるな、私っ！！」

勇ましく、今にも戦場へと飛び出さんと逸るリラを見てその姿を重ねたのだ。

“英雄”であり、ジョーカー“切り札”であり、パートナー“相棒”と言える男。
リヒト・シュッテンバーグ、その人の姿を。

*

*

*

「クソつたれ！！俺が“英雄”だつっても攻撃が収まらねえどころか激しくなつてねえかコレ！？」

第三次世界大戦における“英雄”の名はあまり浸透していないようである。

が、その实力はあまりにも高く、彼に向かい来る軍人たちは片っ端から迎撃され、戦闘不能となつていった。

「なあ、イナド！お前の作戦、大失敗だつて！！」

『大丈夫です。貴方の役割は、果たせています』

「それって罔じゃねえかよ！！」

通信先のイナドは涼しげな声で答えた。

舌打ちしながらも瓦礫と化した住居の基礎へと身を潜め、手にしたアサルトライフルの弾倉を変える。

現在、リヒトとは別行動を取るイナドはこの場に存在せず、リヒト一人で襲撃者を相手取っていた。

元研究所を改造した人民開放部隊のアジト周りには、未だ軍人が多く居座っている。

それらをほぼ一人で相手取るリヒトの負担は、かなりのものだ。

「まったく！モテるならハイスクール時代にモテて欲しかったぜ」

それでも、リヒトは軽口を飛ばしながら笑っていた。知名度は無いが、忘れてはならない称号、“英雄”。

仮にもそう呼ばれる彼の實力は、並みの軍人では相手にならないレベルだ。

障害物に隠れながら三点バーストのアサルトライフルを確実に、対象の戦闘拳動を奪っていく。

「尤も——」

切ると、腰につけた手榴弾のピンを外した。

爆発時間を調整するために、高めの放物線を描いて放り投げられる。

その先には、慢心か、暢気に光学照準器を覗く狙撃主が居た。

「男になんて、一生モテたくは無いがな……！」

一人呟くと同時に、爆発が巻き起こる。

高らかに吹き飛んだ狙撃主とライフルを一瞥することも無く、リヒトは再びアサルトライフルの銃把に指を掛けた。

素早く横合いから銃口を覗かせ、研究所入り口付近の敵に斉射を浴びせる。

弾倉を全て使いきると同時に、その場で動く者はリヒトのみとなった。

「流石に、全部相手取るのは無理だな……」

げんなりと呟きながら、弾の切れたアサルトライフルを放り捨てた。

こめかみに指を当てて唸りながら、リヒトは振り向く。

「なあ、アンタもそう思うだろ？」

「つぐう……っ！！“死神”っ……！！」

それと同時に叩き込んだ裏拳が立ち上がろうとする男の顔に直撃し、意識を刈り取る。

死んだフリをしていた者を含めて、正面入り口の敵勢力は一人の男の手によって全滅した。

「死神なんてダッセエ名前で呼ぶなよ……恥ずかしいな、オイ」

軍人の最期の一言をばやきながら、何の気なしに研究所の角を見た。

そこには、新たに現れた敵勢力の姿があり、リヒトは急いで研究所入り口エントランスの柱へと身を寄せる。

数瞬の後に、柱からは小気味のいい音が響き始めた。

「武器は無し、逃げ場も無し、どうすっかな……」

リヒトが打開策を考えようとしたとき、耳につけたインカムにノイズが走った。

『リヒトさん、援軍の準備が整いました』

「言つとくが、今から出発しますなんて言われたら、お前が到着するころには俺が蜂の巣だからな」

流石のリヒトといえど、銃器を持った相手に生身で勝つことなど出来ようも無い。

だが、イナドはそんな事知らないのか、暢気に答えてみせる。

『安心してください、今——』

轟音と共に、イナドの声が掻き消える。

直後、リヒトが背を預けていた柱の奥からは砂の柱が空高く舞い上がった。

その余波を受けたりヒトが受身を取り、振り向いたときには、軍人の姿は無かった。

が、現れた存在もある。

『到着しました』

「やけに時間が掛かってると思ったが、そういう事だよ」

砂塵に立つ、一人の巨人。

その手には巨大なウォーハンマーを持ち、他の種類に比べて小型化された身体にも係わらず、雄雄しい物に見える。

本来は鉄色の装甲は砂色に塗り替えられ、砂漠の兵器であることを主張していた。

突起の多さは威圧感を与え、同時に、仲間への頼もしさも演出する。

ジョーカーマシン・ペンタクルが、立ち上がった。

『大丈夫ですか？お怪我は？』

「もう少し早く来てれば、俺が頑張る必要は無かったんじゃないかね」

ばやくリヒトだったが、それも当然のことであった。

自らの体の十倍ほどの鉄の巨人に人間が勝つ術など皆無であろう。ましてや、それが歴戦の実力者が搭乗するジョーカーマシンならば尚更だ。

ジョーカーマシンに対抗できるのは、同じく、ジョーカーマシンのみ。

『まだ、御二人は捕まった訳では無いようです。貴方は搜索を――』

イナドの声を遮るように、リヒトの背中に直感が走った。

本能に訴えかけてくるこの空気。

人の心を押し潰さんとする圧倒的なプレッシャー。

電氣的なそれを感じたリヒトは、本能的にその言葉を口にする。

逃げる、と、一言。

だが、それが言葉になる前に、爆音はリヒトの耳朵を打った。

「逃げ……ろ……っ!？」

言いそびれた言葉は力なく、零れるように発音された。

リヒトが見たのは、颯爽と登場し、共闘するはずだった仲間の機体。

それが、煙を噴き上げて無様に倒れる様であった。

「イナドっ!」

砂煙と、時折ペンタクルの身体から散る破片の所為で近寄ることも出来ない。

ただ、その名を呼ぶしか出来ない。

それがもどかしく、リヒトは慌てたように首を回した。

ペンタクルはこちらに前面を向けながら、前のめりに倒れている。つまり、リヒトの振り向いた視線の先には――

「アイツか……!!」

ペンタクルを穿った、軍用ジョーカーマシンの姿。

だが、その外見は軍用と呼ぶにはあまりにも“普通”のジョーカ
ーマシンとはかけ離れたものであった。

その異形を表すに相応しい言葉は、龍。

荒々しい四肢は刺々しく隆起し、血の様に赤く、黒い色をしてい
る。

体躯は大きく、身体の中中線上には龍の体躯に相応しい立派な尻
尾が揺れていた。

流線型の頭部は動く事無く、その紅い瞳でリヒトを睨みつける。
両肩から生えた巨大な翼を広げ、龍は高らかに吼えた。

それは、勝ち鬨か、哄笑か――

だが、リヒトは気圧されない。

バベルとの戦いに味わった焦りや憤りが、再びリヒトの心身に沸
き立つ。

歯を食いしばり、握り拳をきつくし、リヒトは睨んだ。

それを見咎めたかのように、龍はもう一度吼えた。

今度は、確実に哄笑。

怒りに一步踏み出そうとしたリヒトを止めたのは、彼女の声だっ
た。

“アルカナマシン”か……どうやら、リラの情報は確かだった
らしい”

「フェリア!？」

驚いて声を上げたリヒトが横合いを見ると、研究施設から現れる
二人の女性の姿。

見慣れたコートを脇に抱え、白衣をはためかせるフェリア。

リヒトがフェリアと分かれてしまう状況を作り出した“迷惑女”、
リラ。

その姿に目を丸くしたが、同時に、リラが叫ぶ。

「ああーっ！アンタ、フェリアの腰巾着！」

「誰が腰巾着だデメエ！！」

リラの言葉に怒りを顕にしたリヒト。

だが、その憤怒もフェリアの冷静な視線を浴びせられて沈静化する。

何よりも、目の前で確かに威圧感を放つ“龍”。

それこそが、リヒトの心に冷たい何かを走らせた。

「リヒト。貴様に聞きたい事は山ほどあるが、どうやら悠長に聞く時間は無いらしい」

「奇遇だな。俺も、お前と同じ意見だ」

「既にグライNDERは呼んだ。思う存分、仇が取れるぞ」

フェリアは言うど、その目を龍へと向けた。

それに釣られるようにしてリヒトも目を向けるが、些かげんなりとした声音で言う。

「いや、まだ死んだ訳じゃあねえ気がするが……」

「そうですよ。まだ、死んではいませんとも」

「うわぁっ！」

リヒトが言うやいなや、その背中からは陽気な声が響いた。

それに驚いたリラが小さく悲鳴をあげ、リヒトは首だけで振り返ってその男を見た。

幾分かその服装に汚れが見えるが、元気なイナドの姿がある。

「逃げ足の速いやツだな」

「そうしなければ生きていけないのですよ。反乱軍というものは」

リヒトの毒のある発言に動じる事無く、イナドは笑った。

そして、指で“龍”を指し示して言う。

「さあ、仇討ちはお願いしますね？リヒトさん」

同時に、リヒトの目の前にそれは落下した。

暗緑色の装甲はなだらかに、砂塵の舞う風を切る。

半瞬送れて着地した鉄色のバイパスが砂を舞い上げ、肩膝立ちの格好で本体は制止した。

リヒトに背中を向け、同時に、龍を見据える形。

それは、アルカナエンジンを搭載したリヒトの剣。

「行つて来い、リヒト」

「仕方ねえな……ちよつくら、行つとくか」

リヒトがそれに乗り込むことで、アルカナエンジンは息を吹き返す。

身体の間々へと魔力を行き渡らせ、その双眸に赤い光を宿した。
睨み付けるは、王者のような余裕を見せ付ける“未知数の強敵”
アルカナマシン

「Arcana Machine 04 Grinder、行く
グラインダー
ぞ……っ!!」

“英雄”は駆ける。

己の空を、未知なる敵と共に。
砂塵に舞う陰謀が、大きく口を開けて彼を待ち構えていた。

第十一話 死神と龍（後書き）

ペンタクルのかませ犬っぷりに僕が一番驚きです。
プロットの段階では共闘イベントだった筈なのに……どうしてこ
うなった。

第十二話 信じ頼る者

『いいか？ テメエのするべきことは“グライNDER”の奪取だ。調子にノってぶっ壊すんじゃねえぞ？』

「だいじょぶだいじょぶ！ 心配ナッシング！」

赤く照らされたコックピット内で、甲高い声で女が喋る。

心底楽しげな調子はまるで子供のものであり、通信の相手は静かに嘆息。

『……ったく、分かってるのかね、この阿呆は』

「阿呆って言った方が阿呆なんだよ？ にやはは！」

だが、それでも通信相手の嫌味は全く届かなかったらしい。

艶のある唇を舐め、猫のように目を細めて女は笑う。

彼女にとつての戦場など有ってないような様である。

『まあいい。分かったらサッサと仕事しな。 “ハイサーカー凶戦士”』

男の声が投げやりに告げると、一瞬、空気が凍った。

その息の詰まるような空気は通信先にも届いたようで、男は一瞬身体を硬直させる。

しかし、次の瞬間には空気を凍らせた張本人—— “凶戦士” は朗らかに笑っていた。

「そのあだ名キライだなあ……そだ、^{ビューティー}“最凶”ってどう？カッチョイイー！」

『お前のセンスには付いて行けねえよ、脱帽だ』

どうでもいいが、と継いでから、男は言った。

『アイツは俺の獲物だ。勝手に殺すなよ、“凶戦士”』

その言葉を最期に通信は途切れる。

コックピットの静寂に残される女。

その静寂を切り裂いたのは、負の感情を絢交ぜにした舌打ち、そして呟き。

「保障は出来ないなあ。相手はあの“英雄”だよ？アタシが愉しまない訳ナイじゃん？」

一人言い、静かに笑う。

狂気の目が見据えるのは、今正に立ち上がらんとする暗緑色のジョーカーマシン。

その名を^{グラインダー}“裁断者”^{リヒト・シュッテンバーグ}。乗るのは“第三次世界大戦の英雄”。

「じゃあ、ちょっとサイン貰いに行って見ますかにゃあ？」

龍が、咆哮する――

*

*

*

先手を取られたリヒトは、舌打ちしながら大きく後退した。足元にはまだフェアリア達が居るため、戦場を変えざるを得ない。誰も居ない砂漠の地へ、一足飛びに逃げる。

そして、龍は翼を広げてグライダーを追っていった。

互いに距離を開けて、二機は戦いの邪魔が入らないところで制止した。

律儀に止まる龍に対し不信感を抱きながらも、リヒトは好都合だと口の端を上げる。

ふと響くノイズ音が、彼の脳内をクリアにした。

『アンタが第三次世界大戦の英雄かにや？』

頭に響く甲高い声。

龍のパイロットであろう存在に向けて、リヒトは言葉を返す。

「そうだって言ったら撤退して貰えるのかよ？」

『残念だけど、そんな訳にはイカにやいのよねえー。世の中アメちゃんみたいに甘くないって感じ？』

「だよなあ」

さも残念そうに呟くりヒトの声を聞き、龍のパイロットは楽しそうに笑った。

『にやははははっ！まあ、猫にかっちゃんかれたと思って諦めてよ！』

言い、龍は静かにその体躯を傾けた。

それだけでリヒトの脳には冷却水が流れ、警鐘を鳴らし始める。

言葉は軽快、だが、裏の気配は一級の殺意。

リヒトは警戒し、グライNDERを密かに宙へと浮かせた。

砂地では足を取られて高速移動が成立しないからである。

「どう見ても猫ってレベルじゃねえぞコレ」

『アタシにとっては可愛い子猫ちゃん。アンタにとっては最強ドラゴン。じゃあ、アタシは何者かって？』

言葉を紡ぐと同時に、龍が羽ばたいた。

交戦の意思は未だ無いが、制空権は龍が握る。

『アタシは“最凶”！ケットシイ・クインソープちゃんだよ！』

ケットシイと名乗った女が乗る龍は、嬉しそうに空を羽ばたいていた。

純真な歓びの言葉とは裏腹に、圧倒的な敵意、殺意。

無味無臭のそれが、常にリヒトの心にプレッシャーを与えていた。

『それじゃあそろそろイこうか？ Arcana Machine

07 — 『

同時に、龍は口を開ける。

鋭い牙が覗く底から現れるのは、圧倒的エネルギーを濃縮した“火球”。

『アナンタ
Ananta!』

声と同時に、火球はグライNDERに向けて吐き出された。
しかし、その速度は遅い。

威力は十二分なのだろうが、銃弾よりもミサイルよりも遅い攻撃である。

そしてその遅い攻撃に当たるとようなグライNDERではなく、リヒトは攻撃を鼻で笑った。

火球に反応し、一瞬の内にグライNDERの姿は残像と化して消える。

着弾、閃光。

しかしその場には、火球によって吹き飛ばされた砂塵だけが高らかに舞い、轟音はグライNDERの移動音を一切掻き消した。

次の瞬間現れるのは、宙を舞うアナンタの真後ろ。

「遅いんだよ、ノロマ!」

そのまま跳躍し、未だ旋回も迎撃もしようとしないアナンタへと攻撃の手を加える。

拳を握り締め、鉄色のバイパスから魔力のブーストエネルギーが噴出す。

——が、メインカメラに目一杯映ったのはアナンタの赤黒い装甲ではなく、もっと黒い別の何か。

そしてそれはリヒトへとぶつける軌道で迫り、引き絞られた拳はグライNDERの胸の辺りで交差した。

「これは……尻尾か!？」

『後ろを取ったからって油断しちゃダメダメにやのだよ?』

アナンタはその背部に付いた尻尾でグライNDERを殴り飛ばした。グライNDERに損傷こそ無かったものの、着地体勢が悪く、砂に足を取られる。

そしてその好機を逃す道理は、相手には無かった。

『対ジョーカーマシン用魔力砲“ドラゴンブレス龍の息吹”ドラゴンブレス。理屈はアンのグライNDERのバイパスと一緒にやんだけど……』

含みを持たせて、ケットシイは笑った。

『威力だけは、ダンチって感じ？』

片膝立ちで未だその場に残ったリヒトに放たれたのは、龍の口から放たれる火球。

魔力を濃縮したエネルギーの威力が分かっている以上、リヒトには避けるという選択肢しか残されていない。

辛うじて横合いに逃れたグライNDERのコックピットを、強烈な閃光と轟音が襲う。

それらに感覚を麻痺させながらも、素早く次の攻撃へと備えることが出来たのは流石と言えた。

が、容赦は無い。

アナンタは既に上空から次なる火球の狙いを付けていた。

「クソつたれ！！動けえッ！！」

『必死だねえ？そりゃそりゃそりゃ！踊れ踊れえっ！』

更なる火球が撃ち出され、グライNDERが再び横合いに転がる。しかしその隙にアナンタは再び火球を作り出し、グライNDERへと射出する準備を始める。

最早まともに立つ暇は与えられず、一方的な蹂躪だけが続いていた。

「砂地で無ければ……っ！」

グライNDERは砂漠に足を取られて、持ち前の高速移動が瞬時に発動しない。

それを計算してアナタは最初、油断させて尻尾で叩き落したのだろう。

そしてその隙を絶妙に突いた攻撃がアナタから放たれる。

恐らく、敵のパイロットとしての技量は一流。

幾重の要因が重なり、リヒトは今ほただ受けに回るしかなかった。

『“英雄”ともあろう者が、ちよつと情けなくなにかにや？それともまだ準備運動？』

「はっ、こんなモン、準備運動にもなりやしねエよ！」

強がるが、しかし、状況は全く宜しくない。

反撃の芽は未だ息吹かず、アナタの火球も未だ健在。

アルカナマシンである以上、制限の無い攻撃は覚悟していたが、その事実のリヒトの心に重く押し掛かる。

『むむむ！じゃあ、これでどうかにや？』

ケットシイが言うと、アナタは砲撃の手を緩める事無く動き始めた。

装甲の一部がせり上がり、また、一部は機体内に格納されていく。そして現れたのは、二つ目の“口腔”。

「げっ……！？」

『威力二倍の雨アラレ！乞うご期待！』

赤黒いアナタの腹に、もう一つの口が完成した。

グロテスクに真横に裂けた底には、上部の口と同じ紅いエネルギーが集中していく。

『Fire ファイア！』

陽気な言葉と共に、グライNDERに二つの“龍の息吹”が襲い掛かる。

しかし、リヒトもただでやられる訳には行かない。

全力でフットペダルを踏みながら、その言葉を口にした。

一瞬で良い、全てを越える――

「Arcana Overッ！！」

ほんの一瞬の出来事であり、それはケットシイの目でも捉えることは叶わなかった。

が、彼女の目の前に一つだけある事實は、“グライNDERに攻撃は当たっていない”ということ。

手ごたえでそれを確認したケットシイは、素早く魔力レーダーに目を通した。

上下左右前後に気を配り、グライNDERの姿を見咎める。

「ド真ん前だ！！」

『――ッ！！』

拳を振りかぶったグライNDERが目の前に浮かんでおり、アナタは緩慢な動きで腕を構えた。

右腕を捨てる覚悟の防御であったのが功を奏したのか、アナタ

の“龍の息吹”発射機構にダメージは無かった。

しかし、腕を突き抜けた右拳の衝撃がコックピットを襲う。

空中姿勢制御を崩したアナントはバランスを失い、地へと落ちていく。

そして、それを流星の如く追うのは、暗緑色のアルカナマシン。

「追撃、行くぞー!!」

『調子に!!』

叫ぶと同時に、アナントはその口腔を開いた。

千切れかけた右腕の代価として護られたのは、チャージ中だった“龍の息吹”。

そして、こタイミングで息を吹き返すのだ。

『乗るなあああああああああつ!!』

アナントの口から“龍の息吹”が放たれ、ケットシィの視界が光で埋め尽くされた。

しかし、此度も手ごたえは無い。

空中で姿勢制御し、着地寸前で弧を描くように旋回。

再び空中に舞い上がったとき、ケットシィはレーダーにグライNDERの反応を捉えた。

グライNDERは地上で、砂煙に紛れて立ち上がる。

「おーおー、痛い痛い」

『……にやるほど、右腕で弾いたのね』

そして立ち上がったグライNDERに、右腕は無い。

緊急回避のために“龍の息吹”を殴りつけたため、バイパスはどこかへと飛んでいってしまった。

しかし、ダメージを受けたのはグライNDER だけではない。

アナタもまた、深刻なダメージを受けていた。

現時点で気付いているのはただ一人——リヒト・シュッテンバ
ーグのみであるが。

『あれが“アルカナオーバー”。確かに“^{アルカナ}能力”を“^{オーバー}反則”する
技だにゃあ』

呟くような一言は、その性質を如実に表したものであった。

本来あるアルカナエンジン特有の能力を一回り強力に、絶対的な
強化をしたもの。

ケットシィのその考察は間違つては居ない。

そして、そこにある筈のリスクに彼女は目をつける。

『でも、今頃アナタはボロボロだにゃ。この短時間で二回も“反
則”したんだかね』

「……………っち」

リヒトは力無く舌打ちを返した。

今正に、現在進行形でリヒトの体力は削られている。

まるで、アルカナエンジンに生命力を吸い取られるかのように、
だ。

激しい代償と戦いながらも、再び空へと舞い上がったアナタを
見た。

『まあ詰る所ですな……今が好機つてヤツかにゃ！』

その口腔に、二つの赤い光が燈る。

それを見つめながら、リヒトの脳内には過去の自分が蘇っていた。

——フェリアと出会う切欠となった、ファウストとの戦いであ

る。

しかし、今では構図が全くの逆。

挑むのは地上に居る“グラインダー裁断者”、迎え撃つのは空の“アナンタ龍”。

大火力砲撃に対抗しなければならぬところは変わらず、リヒトは思わず苦笑した。

「……はあ、ったく。あんなクソ野郎に教えられるとはな」

声しか知らないファウストの顔を勝手に思い描きながら、リヒトは忌々しげに呟く。

それは一種の賭けであり、しかし同時に、これを逃せば勝ち目の無い賭け。

そんな賭けを、リヒトは始めようとしていた。

「まずは、準備が要るな。確かペンタクルは、まだミサイルポッドは生きていた筈だよな……」

リヒトは通信機のチャンネルを入れる。

逆転の秘策を練りながら、静かな気持ちでアナンタを見ていた。

通信先は、ファウストと同様に“謎の多い女”——フェリアである。

*

*

*

「……了解した。伝えておこう」

フェリアは通信を切ると、小さく溜息を吐いて首を振った。

「やれやれ、アイツはどれだけ無茶をする気だ？ 後始末をすること
ちらの事も考えて欲しいものだな」

愚痴るが、その口の端は小さく上がっていた。

それに気付いた様子のリラが茶化するように笑う。

「そう言う割には嬉しそうですけど？」

「む」

リラに顔を背けながらフェリアは唸ると、再び通信機のチャンネルを弄る。

次にチャンネルを合わせたのはグライNDER専用のチャンネルではなく、ある一定の人間しか使っていない特殊なチャンネル。

そのチャンネルは倒れ臥したペンタクルの通信設備と繋がっている。

「イナド。やはりリヒトはミサイルポッドを使う心算だったらしい」

『それはそれは。準備していた甲斐があります』

殊勝な発言と共に、うつ伏せに倒れたままのペンタクルのミサイルポッドの外装がせり上がった。

ペンタクル自身が動き回り戦う事は出来ないが、その武装だけは未だ健在である。

故に、リヒトと龍の戦いが始まって以来、彼らはペンタクルの調整に終始していた。

『準備は完了。いつでも撃てますよ』

「狙うべき場所と合図が送られてきた。いいか、よく聞けよ――

――」

フェリアの続けた言葉に、イナドは疑問符を、リラは驚きの声を上げた。

「ちょ、ちよつと待ってよ！こんな作戦、下手したら緑色のヤツがぶつ飛んじゃうじゃない！」

「慌てるな。この作戦に問題は無い……と言うか、この作戦しか残されていない」

フェリアの語った事は事実で、それ故に、彼女もまた葛藤を抱えていた。

果たして、この作戦を遂行して勝つことが出来るのか。

グラインダーは、リヒトは無事に生き残ることが出来るのか。

「それに、リヒトならばやってのけるさ……“英雄”と呼ばれたヤツならな」

しかしその葛藤を打ち破るのは“信頼”。

初めての邂逅のときに見せた、コックピットに座るリヒトの姿。何よりも、行動を共にして見えた彼自身の“本当の自信”。

驕れる“英雄”でも、冷徹な“軍人”でもない男の姿。

それは彼女なりの“信頼”に値する姿であり、故に彼女は今、信頼を見せる。

『では、私は照準を定めておきますね。今はこう着状態の様子』
「ああ、頼む」

通信が途絶え、ミサイルポッドの先端が細かく動きを調整していた。

やがて止まったその先端が指すのは、遙か先にあるグライNDERの影。

「……よく、信じられますね。これに失敗したら私達も絶望的ですよ？」

ジョーカーマシンに対抗し得るのはジョーカーマシンのみ。
しかも相手が“アルカナマシン”であるとすれば、対抗できるのもまた“アルカナマシン”のみ。

今の状況でリヒトが敗れ去るのは、即ち、この場の全員の全滅を意味する。

それ故に、リラは怯えていた。
だが、対照的にフェリアは涼しい顔をしている。

「リヒトとは、そういう男だ。どんなに無茶をやっても、それを貫き通してしまう男だからな」

フェリアは脳内でグライNDERの姿を反芻した。

グライNDERの設計、開発に携わった彼女にとって、グライNDERはまさに息子のような存在。

その息子に初めて、真の意味で“一光いのちが燈った”瞬間、彼女は震えた。

そして、それを構成している要素のひとつには“リヒト・シュッテンバーグ”という存在が不可欠。
だが、それ故に彼らは強い。

人機一体となったグラインダーに、敵は居ないのだ。
フェリアは精一杯の応援として、握り拳をグラインダーのいる方
角へと突き出した。

「私の信頼を預ける。頼んだぞ……リヒト・シュツテンバーグ」

*

*

*

『最期に言い残す言葉はにやい？お姉さん優しいからどんな言葉
でも聞き流してあげるにやあ』

「聞き流されるんじゃ意味ねえな……」

呟くと、リヒトは心底疲れたように長い溜息を吐き出した。

疲労困憊のようなその息に、ケットシイは半ば残念そうに薄く笑
う。

『もう終わりにやー……楽しい時間だったけども』

「楽しい時間ってのは終りが早いモンだ。諦めな」

『いいのかにや？アタシが諦めるってことは、アンタの命も諦め
るってことだよ？』

「諦めねえよ。俺の命は」

不思議そうに言うケットシィ。

だが、リヒトの放つ言葉には疲れも、諦めも無い。

それがたまらなく不思議で、ケットシィはアナタの“龍の息吹”を放つのを遅らせた。

『どういう事？今、アナタの命は私が握ってるんだよ？』

「いや、違うね」

リヒトが断言し、グライNDERの眼前で左拳を握り締めた。

「俺の命を握るのは……俺の生き様を握るのは、俺だけだ。テメエ如きに奪われるほど、安いモンじゃねえ」

それに、と続けるリヒト。

「今は、俺だけの命じゃねえ。背後に居る馬鹿どもの命も背負ってるんだよ、俺は」

その目には新たな一種の色が燈されていた。

“覚悟”の色ではないそれは、背後に“護るべき者”が居る故に現れた色。

“守護”を宿したそれは、鳶色の瞳にくつきりと浮かんだ。

「だから、負けねえ。俺は、お前に勝つ」

宣言し、その左拳を高く前に突き出した。

アナタは未だ天空に浮かび、その姿を見下ろす。

差し詰め立ちはだかる壁のような、威圧感。

一般人なら震え、泣き、命乞いを始めるようなそれである。

だが、決意を新たにしたりヒトの前では、それは無に等しかった。

[illegible]

束の間の静寂を打ち破るのは、ケットシイの高らかな笑いだった。

『面白い面白い！まさか“英雄”ともあるう者がそんな“偽善者”みたいな考えをしてるとはね！こりゃあお笑い種だ！』

「ひーっ！腹痛いよ！アンタよくそんなコトであの戦争を生き残れたねえ！！」

それに肯定も否定もせず、リヒトはただ黙ってその声を聞いていた。

不意に、ケットシの雰囲気が変わった。

笑い転げていた時から一転し、鋭く、硬質なその死氣へと。まるで、人が変わったかのように。

「ああー……やつてらんねえ」

その言葉は冷たく、刃を連想させるほどに無慈悲だった。

今までの人懐っこいようなキャラは崩れ去り、彼女の真の姿が明かされる。

冷酷、無慈悲な“凶戦士”の顔が歪む。

「もういい。アンタ、死ねばいいんじゃない？」

「だから、死なねえつつつてんだろ？」

『言っておくけど、
アンタが頼りにしてる味方のミサイル。アレ、
気付いてるから』

絶望を告げるかのように、ケットシイは言葉を紡いだ。

『それに、アルカナオーバーも既に二回使ってる。アンタはもう限界』

それは確かな事実である。
が、リヒトの返答はあまりにも冷静。

「だからどうした」
『ハア？』

ケットシイの言葉に動揺することなく、リヒトは淡々と言う。

「俺は仲間を“信頼”している。だから、テメエが気付いていようがいまいが、関係ない」

『信頼で勝てる勝負が何処にあるってんだ！？』

空中に居るアナタの口腔が一際大きく光る。

それはグライNDERを灰燼に帰す灯火。
だが、それでも。

「——此処にあるッ！！」

リヒトは恐れずに、フットペダルを踏みしめた。
加速するグライNDER。

向かう先は、あの死の灯火。
そしてそれを支援するのは、新たなる戦場の仲間。

——ペンタクルが放ったミサイルが、グライNDERの足元で爆音を上げた。

「おお……ッ！！」

瞬間的に、グライNDERの速度は通常のそれと変わらないまでに引き上げられる。

着地のことを考えずに爆発を受けた脚は、既にまともな行動は取れないだろう。

だが、今はアナタに届けば十分、役目を果たしたことになる。

グライNDERの中のアルカナエンジンは決意に応え、その力を遺憾なく発揮する。

過剰なまでに生産された魔力が行き着く先は、四肢のバイパスと背部のブースター。

光の粉となり放出されるそれらが、打ち上げられたグライNDERに更なる加速を促した。

現在、グライNDERのスピードは約五倍。

故にリヒトの身体には、多大な負荷が掛けられていた。

「ぐうッ……まだだ……!!」

締め付けられるような身体全体の痛みに、気持ち悪さが込み上げてくる。

頭は割れるように痛みを訴え、視界はモノクロに色を無くしかけていた。

だが、リヒトは口の端から血を流しても、堪える。

血管が千切れそうになるほど操縦桿を強く握り締め、歯を食いしばった。

メインカメラの先には、上の口腔から放たれんとする“龍の息吹”。

紅い閃光は目を焼き、甲高い音は警告を発する。

ジョーカーマシンを焼き尽くす“業火”は、今、まさに放たれた

瞬間だった。

——だが、リヒトにはそれが見えている。

「Arcana Overッ!!」

日に三度目となった力に、リヒトは頭の血管が何本か切れたのを感じた。

痛みではなく、気持ち悪さが喉まで込み上げてくる。

しかし代償として得た力は、“龍の息吹”を目視することを可能とした。

グライNDERは冷静に左手を構えた。

繋がったバイパスからは大量の光が溢れ、左手に推進力を与える。身体全体で推力を稼ぎ、同時に“安定翼”としての役割も果たしていた。

インパクトは一瞬。

全てを込めた拳は、火球にぶつかった瞬間に弾けた。

「——ッ!!」

息が詰まるほどの衝撃。

熱まで感じられそうな光。

最早耳の機能を超越した間近の爆音。

引き延ばされた時間の中で、ただ、左手が火球と共に本体から離れていくのを感じた。

同時に、アルカナオーバーを解除する。

『なあっ!?!』

ケットシイの驚きの声。

解除後の副作用に顔を顰めていたりヒトの耳には入らない。
だが、ケットシイもまだ終わったわけではなかった。
攻撃の手段はもう一つ。

『でも甘いんだよッ！』

腹に開いた口腔を紅く閃かせ、獲物が飛び込むのを待った。
既にグライダーには両手が無い。

が、念の為に、確実に葬れるであろう至近距離まで近づくのを待った。

勝ちと同然——そう、ケットシイは思っていた。

「……テメエ、俺の右腕の場所知ってるか？」

『ハア……！？』

だから、その表示が出るまで気付かなかった。

『発射シークエンス……エラーだつてえッ！？』

“龍の息吹”は口腔内で魔力を圧縮し放つエネルギー兵装である。
その攻撃力は強力無比であり、恐らく自分がデイブレイクで一番強いという自負をケットシイは持っていた。

そんな慢心の隙を突いたかのように、“龍の息吹”の弱点は露呈する。

口腔内でのチャージが必要なシステムである以上、その口腔内は整備されていなければ放てないのだ。

ただでさえ扱うのが難しい“魔力”を扱う以上、これは仕方の無いことだ。

だが、ケットシイはそれを忘れていた。

故に——腹の口腔内に入り込んでいた異物を取り忘れていたの

だ。

「右腕預かっててくれて有難うよ！」

『ふざけるなッ!!』

必死にアナタは回避拳動を取ろうとした。

だが、もう遅い。

グライNDERは既に最速のスピードを以って、アナタの腹の口腔を目指している。

——そして、口腔内には未だ発射されなかった“龍の息吹”の残存エネルギーが残っているのだ。

「コイツは礼だ——受け取れッ!!」

アナタの口腔に、グライNDERの頭が突き刺さる。

そのあまりの衝撃に、リヒトはコックピットの中で意識を手放しかけた。

それを繋いだのは、他ならぬその衝撃である。

『馬鹿な——馬鹿な——ッ!!』

途切れ途切れの通信から、ケットシイの声が聞えた。

しかし、それは爆発音で遮られる。

それとほぼ同時に、グライNDERは重力に逆らうこと無くアナタから離れた。

上半身は既にボロボロの風体であったが、コックピットだけは無事に残っていた。

空に取り残されたアナタは動く様子が無い。

一瞬、静寂が辺りを包み。

リヒトがもう一度アナンタに意識を向けたとき、爆発は発生した。

「やったか……!？」

爆音は否応なしにリヒトの耳へと届き、グライNDERの身体を爆風で押した。

重力に身をゆだね落ちていくグライNDERの中で、リヒトは呟く。

「……って、これ死亡フラグじゃねえか」

でも、とリヒトはメインカメラの先の映像を見た。

断続的な爆発はやがて、在り得ないほどの黒煙を噴出し始め、見るに耐えないものへと変貌していく。

「これで死んで無かったら、マジでバケモンだな……」

要らない心配であろうと分かりつつも、そう、呟かざるを得なかった。

「全く、しんどい話だぜ……」

その言葉を最期に、リヒトは気を失った。

砂漠には爆発音と、どこからか駆けつける装甲車両の走行音だけが轟いていた。

*

*

*

「――参ったにやあ、まさか、あんなやり方があったにやんて」

墜落し炎上するアナタから離れながら、ケットシイはぼやいた。その手には通信機を持ち、何者かと会話をしている様子であった。

「だって、誰も右腕が口の中に入ってるとは思わないでしょ？」

『それは災難だったな』

通信の向こうの声は、低い雷鳴のような重苦しい声。

威圧感を感じさせる声だが、ケットシイは変らずの調子で続けた。

「しかし、いいのかにや？まだまだ試作とはいえ、**“アルカナエンジン”**は使ってたんでしょ？」

『何ら問題無い』

断言した声は、通信機の向こうで薄く笑っていた。

『アルカナエンジンを手にしたとしても、奴らにはそれを活かす術は無い……**“真のアルカナマシン”**を建造できるのは我らのみ』

「にやるほどー」

一人頷くケットシイ。

歩みを止めぬままに、首だけで振り返る。

砂煙を上げて走る装甲車慮がグライNDERの足元に急停止した。

「次は、本気のマシンで相手したいにやー」

『その時は任せたぞ。 “凶戦士”』

その言葉に、ケットシィは舌なめずりをし。

「お任せアレ、 “総帥”——」

第十二話 信じ頼る者（後書き）

初めてアルカナマシンをまともに倒した気がします。

まあ、速度任せの頭突きがまともかどうかは読者の良識に任せるしかないのですが……。

第十三話 集いし三英雄

藍色の軍服を着た男が、夜道を歩いていた。

時刻は既に深夜の三時を回り、辺りは既に誰も居ない。

それも当たり前だ、ここは人の踏み入らない暗い森の獣道。

男がこの時間に歩くのは訳があった。

彼の“公の立場”では決して容易に会うことの出来ない存在に会う為。

そして、その先にある“真実”を知るために、彼は歩いていた。

やがて夜目が慣れ始めた頃、景色は開け、森の中に開けた場所が現れる。

そこに鎮座しているのは、古ぼけ、自然に侵食された教会であった。

決して大きくない尖塔に嵌められたステンドグラスの欠片だけが、不気味に月の光を反射していた。

「……ここか。森の教会」

男は呟くと、意を決したように教会へと近づいていった。

近づくほど分かったのは、誰も好んで近寄ろうとは思わない教会の外見だけである。

汚らしい壁は白を無くし、苔と煤の入り混じった緑と黒に彩られている。

それはこの教会が“焼失”したことを思わせ、実際、そうなのであろう。

ここは“第三次世界大戦”の激戦区。
戦火に尤も晒されていたこの地域には、戦火を耐えた建物のほうが稀だ。

入り口の扉は腐り、既に扉としての機能を果たしていなかった。
だが、大柄の男が入るには扉の残骸が邪魔で、半ば強引に扉を開けた。

壊れた扉の破片が落ちると同時に、月明かりに照らされた教会に埃が舞う。

男は顔を顰めるが、同時に、細めた目で教会の奥を見つめた。
大きくない教会の最奥、十字架の前に男が立っていた。

「——ようこそ。お待ちしております」

背を向けていた男は振り返ると、月明かりの下に一步步み出て、
恭しく礼をした。

黒いカソックに身を包んだ、片眼鏡の男である。
刈り揃えられた短い金髪が、彼の本質を表していたのかもしれない。

律儀、真面目、頑固——それらの感想が、訪問者の頭を過ぎった。

だが、そんなことはどうでもいい、と頭を振るう。
彼が男に聞きたい事は、ただひとつ。

「……本当に、何でも教えてもらえるんだろうな」
「ええ、何なりと……とは言いますが、質問の内容は察しが付いておりますがね」

嫌味の無い笑顔でカソツクの男が笑う。

正反対に歯を軋ませる男は、静かに拳を握り締めた。
怒りを噛み締めるようなその様を見て、カソツクの男が益々笑みを深めた。

「では、聞こうか……俺の姉さんを殺したのは、何処の誰なんだ？」

「これをお読みなさい。全ての真実が、その書類に」

カソツクの男は脇に抱えていた書類を投げ渡した。

ひらりと足元に舞い落ちた書類を見て、訪問者の男は訝しげな顔でそれを拾った。

その書面に題されていたのは、“部隊編成書第708陸隊”。

「これは、姉さんの……」

男は驚きと同時に、書類を斜め読みした。

そして、瞠目と共にその一番下に書かれたサインの名前を見つける。

「まさか、そんな……嘘だろう……!？」

「いえ、それは全て、真実です」

カソツクの男は断言し、柔らかに笑んだ。

それはまるで天使のような笑みであるが、同時に、あまりにも“寒気”を喚起させる笑み。

「私、嘘を吐くなら“人を幸福に出来る”嘘しか吐かない性分です」

「馬鹿な……!これが本当なら、アイツは……!!」

男の戸惑いはやがて怒りに変り、その様子を見たカソックの男は更に笑みを深めた。

そう、このまま、口が裂けてしまつのではないかと見紛うばかりに——口の端を、吊り上げたのだ。

月下、男は笑う。

誰よりも高らかに、誰よりも純粹に。

*

*

*

砂漠での龍との邂逅から直ぐ後に、リヒト達は砂漠との別れを告げた。

イナドにはまともな挨拶すら交わせなかったのだが、それでもいか、などと楽観的にリヒトは考えていた。

それよりも、重要な案件がある。

「——これが護送機……！私、護送機って乗ったこと無かつたんですよ！」

「……なんで、テメエが平然と俺達の軍用護送機に乗ってやがる？」

ベルランドが迎えにと寄越した護送機の中ではしゃぐ、リラ・ア

ーノートの存在である。

中に居るのはパイロットを除けば、リヒト、フェリア、リラの三人。

しかし、最初の邂逅の件もあり、リラはリヒトを、リヒトはリラを敵視している。

「だって私、重要参考人よ？それを無事に送り届けるのは軍人の義務じゃないの？馬鹿なの？死ぬの？」

「俺は軍人じゃねえし、テメエみてえなのから参考になることなんて何一つありやしねえんだよ！」

「五月蠅いわよ、馬鹿！」

「何だと、馬鹿女が！」

互いが互いを牽制し、空には皮肉交じりの怒声や罵声が響く。

そんな雰囲気は何処吹く風、といったふうでフェリアだけが平然とくつろいでいた。

「大体、街でいきなりぶつかって無理矢理助けさせようとかテメエは常識ってモンがねえのか？」

「……乙女のピンチに見向きもしない底辺男」

「あん？乙女エ？何処にそんなもん居やがる？」

「絶対、アンタ碌な死に方しないわよ。夜道に気をつけなさい」

物騒な問答を繰り返す二人に、フェリアは呆れたような眼差しをくれた。

こういう犬猿の仲というものは、得てして存在するものだ。

故に、巻き込まれないためにも干渉は避けるのがフェリアの流儀。

「痴話喧嘩もほどほどにしておけよ？」

「誰が痴話喧嘩！？」「」

「お前ら仲良いな」

だが、何故か喋りかけずにはいらなかった。

不思議に首を傾げるフェリアだったが、結局答えは出ない。

彼女自身の心に芽生えた——否、蘇りつつある“感情”という答えには、辿り着けなかった。

二人が再び喧嘩を始めた最中、不意にコックピットから声が掛かる。

『目的地に到着します。全員、しっかりと掴まっていてください』

パイロットの声に従い、三人はそれぞれ己の近くに在った手摺に掴まった。

リヒトは堂々と扉の前に立ち、“誰よりも早く出て行こう”という意思を如実に表していた。

それ即ち、リラと同じ空間から一刻も早く抜け出そうという魂胆なのだろう。

対してリラは、ややへっぴり腰で奥のほうに陣取っていた。

そして、フェリアはその中間。

「おいおい、ヘッピリ腰だが大丈夫か？着地の時に腰を折るなよ？」

「うつつつつ五月蠅いッ！！アンタこそ、落ちるんじゃないの！？」

二人を隔てる距離を泳ぐ罵声を両耳で浴びて、フェリアは何度目になるか分からないため息を吐いた。

既に癖と化してしまっただか——小さく頂垂れた直後に、衝撃は柔らかに全員を襲った。

「きゃあっ!?!」

約一名大げさな声を出す、それ以外は冷静に着地したことを知った。

それと同時に、鋼鉄の扉は勢い翼開け放たれて――

「あらあん?」

「げっ」

リヒトの時間が止まる。

その視線が示すのは、扉の近くに居た人影。
引きつった顔で、リヒトは一步後ずさるが――

「ああーん、お久しぶり、リヒトお!」

「宇和ああああああああああああああっ!?!」

人影はリヒトを強襲。

その力一杯の抱擁に、リヒトの絶叫が響いた。

*

*

*

「……不本意ながら」

そう前置きして、リヒトは言う。

「コイツが“三英雄”の最後の一人、“魔獣”の名を冠する……」
「やぁーん！魔獣なんて物騒な名前で呼ばないでよぉ！」

リヒトの隣の男——否、性別不詳の存在が、リヒトの肩を豪快に笑いながら叩いた。

あまりの衝撃に前につんのめるリヒトを見て、リラはいい気味だと笑っている。

一方、フェリアは“魔獣”と呼ばれた存在を改めて観察した。

——筋骨隆々の肉体は、この中の誰よりも強靱で、大きい。

しかし、その白い髪はところどころピンク色のメッシュが施されており、パンクロッカーを髭髯とさせる。

厳ついであろう顔にはメイクが施されており、どちらかというところのようなメイク。

ジーパンにシャツとラフな服装だが、所作は所々女らしくもある。

「……オカマ」

「誰がオカマよぉ！」

フェリアの心の内を代弁したりヒトが、再びどつかれる。

どついた張本人は笑ったままだが、どこか威圧感を増したような気がしていた。

「アイリ・フォードよ。気軽にアイリって呼んでね？」

「フォード？フォードって、あの、フォードPMCの？」

「そうよぉ」

すぐさまに反応したのは、意外にもリラであった。

流石は戦争ジャーナリストといったところか、とフェリアが頷く。

——フォードPMC（軍需産業）。

文字通りに軍備や戦争に関するあらゆる仕事を請ける会社だ。

第三次世界大戦が終わったものの、未だ各地で起こる紛争などに対する傭兵家業で稼いでいる。

人権団体が如何に抗議デモを挙げようと消えない仕事の一つでもあった。

「気をつける、ヤツの本名はアイクとか言う感じのゴツい名前だ」

「乙女の秘密をバラさないでよお！」

三度どつかれたリヒトは、今度こそ床へと転がされる。

学習能力が無いのか、とフェリアは呆れの溜息。

それを見てもにやにやと笑うだけのリラ。

「緊張感の無いメンツだな」

「まーいいじゃないですか！変に緊張するよりは！」

「……そうだな」

リラの言葉に、薄く微笑みながらフェリアが同意した。

今、彼らが存在する場所は、ベルランド属する軍基地の廊下であった。

砂漠での戦いの直後、ベルランド直々に呼び出しが掛かったのだ。それが果たして、吉報なのか凶報なのかは未だ分からない。

そして何よりも——

「あらぁん、そろそろ到着するみたいよお？」

目の前に行く、アイリ・フォード。

“魔獣”の名を冠する彼女は、一体どのような思想でここに足を運んだのか。

真意を掴みかねるフェリアは、ただ黙して歩いていた。

「これじゃありませんか？」

リラの言葉に、全員がその扉を見た。

“第五会議室”——この基地に幾つかある会議室の一つである。いつの間にか先頭を行っていたリヒトが扉を開ける。

そしてフェリアの前に行く人間は次々と会議室へとなだれ込んだ。数瞬遅れて、フェリアも会議室へ。

飛び込んできた光景は、整然と並べられた長机とパイプ椅子、そして、奥に居座る一人の男。

「——久しぶりだな。“英雄”、そして“魔獣”」

「テメエ散々こき使っておいて“久しぶり”だと？マジではっ倒すぞ」

「うふふふ、お久しぶり“猛禽”。そして……」

「戦争以来だな。“三英雄”が集結するのは」

ベルランドが締めくくり、三人は一同へと介した。

目で、耳で、鼻で、三人は互いの存在を確認し、一糸乱れずに頷いた。

それは戦争で培った“英雄の絆”とでも言うのか。その光景に、フェリアは珍しく、ただただ圧倒されていた。

「フェリアさん、席に着かないんですか？」

リラが声をかけ、思い出したかのようにフェアリアは席へと腰掛ける。

隣にはリラとリヒトが既に着席していた。

全員が着席したのを見て、最後にベルランドが最奥の場所に座る。

「まずは、フェアリアにも紹介しておこう。フォードPMCの社長にして、“魔獣”。アイク……アイリ・フォードだ。アルカナマシンの話以前から“魔力”の研究を手伝って貰っていた」

「そのまま引き続けてデイブレイク対策に情報収集などを担当していたけれど、余計だったかしらあ？」

フェアリアを流し目で見たアイリに、リヒトがぎょっと身体を跳ねさせた。

肝心のフェアリアはそんなことは無い、と感情無く言っただけであったが。

「——さて。過去を懐かしむ暇も、世間話に花咲かせる時間も我々には無い。本題を切り出そう」

そう言うと、全員が静かに息を呑んだ。

この場に漂う緊張感が、全員の喉から水分を奪う。

全ての視線がベルランドに注がれ、彼は、そつと口を開いた。

「恐らく、近いうちに“デイブレイク”は本格的に動き出す」

「やはりか……」

その言葉に相槌を打ったのは、フェアリアだ。

懸念通りの展開に、苛立ちを隠せない。

とはいえ、それを感知できたのはリヒトのみであったが。

「最近の大胆な行動。ジョーカーマシンの使用。それはデイブレイクを光に晒す危険性のある行為だ」

「無論、秘密組織である連中がそんな行動を取った前例は今まで殆ど無い」

ここ二週間ほど以外はな、とフェリアが付け足した。
満足気に頷いたアイリが、続きを言う。

「詰る所、もう“隠れる必要は無い”……デイブレイクがガンガン行動してくるわよお。それこそ、グライNDER狙いで強襲とか、ね？」

「ウインクやめろ！俺を見るな！」

リヒトが全力で嫌悪感を表すと、それでもアイリは熱烈な視線をリヒトに投げた。

散々な男だ——フェリアがそう思うと、隣のリラがおずおずと聞く。

「ということは、もしかしてその“デイブレイク”の目的に必要な準備は整ったってことですか……？」

「然り。当然、推論ではあるがな」

「ってこたあ、こりゃ本格的に追い詰められてんじゃねえか」

やってらんねえ、と吐き捨てて、リヒトはパイプ椅子の背もたれに体重を預けた。

ぎい、と軋む音の後、数秒の沈黙が辺りを包んだ。
が、その静寂を破る声もある。

「現状の戦力を確認しておこう。言わずもがなだが、皆、デイブレイクに抗う覚悟はあるな？」

フェリアが音頭を取り、リラ以外の全員が頷いた。

リラは訳が分からない顔をしているものの、その場の空気に自分の言葉をさしはさむ余地は無いと諦める。

「まずは、味方だが……アルカナエンジンは三つ」

「グライNDERの“皇帝”だろ……後は？」

「“教皇”、“戦車”だ」

リヒトの疑問に、間髪入れずにベルランドが口を挟んだ。

「対して、デイブレイクに確認されているのは“女教皇”、“正義”、“塔”。新たに“魔術師”も奪取されていたわねえ」

「そして“戦車”は元々敵の物……更に数を増やしているとみてもいいだろう」

フェリアの言葉は正しい。

この短期間で二つもアルカナエンジンを増やしているのだ。

デイブレイクは更に数多くのアルカナエンジンを所持しているだろう。

手段を選ばなくなれば、尚更である。

「戦力自体は大体互角か？こつちには軍とPMCが居るからな」

「悪いが、軍自体は動けんぞ。自衛という名目があれば別だが…

…」

「PMCも今の紛争に機体が出払ってるからねえ……」

リヒトの楽観的な考えに水を差すように、二人が難しい顔をした。あからさまに肩を落としたリヒトに変わり、フェリアが続ける。

「どうにか用意できる最大の戦力を集めよう。アルカナエンジンは今、三つも集っているのだから」

「基地の方にアルカナエンジンを置いておけば問題ない……か」

「PMCの傭兵達は、ベルランドに雇ってもらえば解決ねえ。私もガッポガッポ儲けられるしっ！」

その言葉に一瞬、ベルランドが眉尻を下げた気がした。

しかしそれも次の瞬間にはいつもの真顔に戻って、検討しよう、などと取り繕う。

「しかし、恐らく相手もそれを予見してるぜ……本当に勝てんのかよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

ベルランドはそう言い切ると、珍しく口の端を挙げて不敵に笑んで見せた。

「秘密兵器を用意している。次の戦闘には間に合う筈だ」

「秘密兵器ねえ……」

胡散臭げに見つめるリヒトを既に意識から外し、ベルランドは一つ咳払いをした。

辺りには再び沈黙が生まれ、同時に、ベルランドが第一声を飾る。

「これから襲い来るであろうデイベレイクに対して、対応の準備を始めようと思う」

言っと、ベルランドはまず、フェリアの方へと顔を向けた。

「フェリアはジョーカーマシンの元・研究員。彼女にはジョーカ

ーマシンの改修、強化を担当して貰おう。今、ウエマツがこの基地へと向かっている筈だ」

「ウエマツが？アイツ、ジョーカーマシンの研究なんてやらないって言うてなかったか？」

「曰く、“これはジョーカーマシンの研究ではなく、魔力兵器の研究”と言う話だ」

相変わらずの屁理屈をリヒトは鼻で笑った。

だが、悪くない。

その腕を以ってすれば、ジョーカーマシン関連を任せても問題ないだろう。

「そして、アイリ。貴様には兵の準備を進めると同様に、情報収集も続けてくれ」

「オツケーってか、やるのは私じゃないんだけどねえ」

アイリは勢いよく返答し、その厚い胸板に拳を当てた。

直後、“サービスシーンよ”などのたまったために、リヒトが精神的ダメージを受ける。

気を取り直して、といったふうにベルランドが続けた。

「俺はここでいつも通りの事をやる。同時に、全体の総括を取る。

そして、リラ・アーノート」

「ひゃっ、ひゃい！？」

呼ばれると思っていなかったのだろう、リラが肩をびくつかせながら返事をした。

「君には悪いが、暫くこちらの保護下に置かせて頂く。ディブレイクに一度関わってしまった以上、一般人の君でも命の危険がある

「のでな」

「え、ええ、そりゃあもう、勿論……護って貰えるなら、何でも……」

しどろもどろになりながらも、リラが了承の意を返した。

それに頷き返して、ベルランドは一度全体を見回す。

その中にはまだ、呼ばれていない人間が居た。

「待て待て、じゃあ俺は何をするんだよ？」

リヒトだけが、未だにやることが決まっていない。

既に自分でやれるような事も思い浮かばないが、それでも、リヒトは抗議をした。

ベルランドがそれを意地悪く笑ったのは、気のせいではあるまい。

「リヒト。お前にはリラ・アーノートの護衛を担当して貰う」

「え？」

「は？」

その言葉に、その場に居た二人が立ち上がった。

リラは一席離れたリヒトを、リヒトも同様にリラを見た。

目を丸くして、一度ベルランドに視線を戻す。

「……無論、反論は受け付けない」

満足気に微笑むベルランドの顔は、二人には最早悪意しか感じられなかった。

改めて、二人が互いを見た。

両者共に敵意を向けて、ベルランドに向けて等しく叫んだ。

「何でこんなヤツとっ!？」

二人の大声に挟まれたフェリアが、五月蠅そうに顔を顰めた。

第十三話 集いし三英雄（後書き）

起承転結で言えばまさに“起”といったところですね。

第十四話 疑念

「ふざけんなっつってんだろ！俺はここを離れる気はサラサラねえんだよ！」

「アンタの都合なんて知らないわよ！護衛を命じられたなら、それらしく振舞ってみたらどうなの！？」

狭苦しい格納庫の隅では、男女の怒声が響いていた。

痴話喧嘩とは無縁の筈のこの場所で、何故その声が響いているのか。

それはリヒトが格納庫に居座っているからに過ぎない。

やはり愛機であるグライダーのことが心配なのか、はたまた別の理由なのか。

フェリアに推察することはできないが、とにかく、リヒトは一日の大半を格納庫の隅で過ごしていた。

「ああ、もう！大体なんで私までここに居なくちゃいけないのよ！」

「護衛して欲しければ俺について来い……あ、やっぱ今のなしでついて来るな、邪魔臭えから」

「アンタ、本当に碌な人間じゃないわね！」

一応は護衛であるため、リラを引き連れて、だ。

数日はリラも、見たことのないジョーカーマシンの整備に目を輝

かせて眺めていたものだが。

今ではその光景もすっかり見飽き、リヒトとの口喧嘩に興じている。

勿論、それを聞きながら作業を続ける技術者達の顔色は芳しくない。

その様子を見て、フェリアはやれやれとため息を吐き、グラインダーの足元から離れて両名の元へと向かう。

「ああん？もう一度言ってみる」

「ジジイかアンタは！いい！？私が言ってるのは――」

「ストップだ」

フェリアはそれぞれの手を二人の頭に振り下ろす。

リラの頭には素手、リヒトの頭にはコーヒーの入ったマグカップ。

「痛っ！？」

「くうおおおおおおお……っ！？」

「お前ら、痴話喧嘩は外でやれ」

「痴話喧嘩じゃありません。断じて、有り得ません」

あらん限りに拒絶するリラ。

そして、その横に転がっているリヒトは未だ頭を抱えて悶絶していた。

声にならない叫びが、リラにほんの少しだけ同情の念を芽生えさせる。

「痴話喧嘩云々はどうでもいいが、お前らはそろそろ邪魔になっていることを自覚すべきだ」

「うう……とは言っても、そこに転がってる底辺男が……」

「少し待っている」

言っと、フェリアは未だ声を上げること叶わないリヒトの襟首を掴んだ。

呻くりヒトを無視して、そのまま耳元まで口を近づける。

「リヒト――」

そこから先の言葉はリラには聞くことはできなかった。

が、先ほどの様子からは一変してこくりと頷くりヒトを見て、いい気味だ、と思うのである。

「さて、これでリヒトは言う事を聞くだろう。護衛として存分にこき使ってやれ」

「ありがとうございますっ！」

げんなりと頂垂れたリヒトが身体を起こすと同時に、絶望に苛まれたような表情をする。

心なしか得意げに笑んだフェリア。

恨みを籠めた視線でそれを見上げたが、フェリアは何処吹く風といったふうである。

不貞腐れたように床に座り込むリヒトに向かって、リラはその片手を差し出した。

「底辺男、お手」

「誰がするかボケ!!」

一際大きな怒声が響くが、リラは満足そうに笑んだ。

「で、底辺男。護衛主に従ってくれるのよね？」

「誰が……」

「ね？」

リラが強い意味合いを込めて視線を投げた。

その視線の先にあるのは、既にグライNDERの足元へと戻ったフエリア。

リラの示す意味合いを理解したリヒトは、頭を掻き毟って一言。

「……死にてえ」

「死ぬなら私を守ってから死になさいよ」

リラが言い放つと、リヒトが立ち上がるのは同時だった。

——改めて見ると、リヒトの身体は大きい。

それは女性と男性という性の違いを考慮したうえでも、大きいのである。

線は細いが身長が高く、どこか近寄りがたい雰囲気を発しているのだ。

「……んで、一体何処へ行こうってんだよ」

その疑問で、リラの意識は戻ってくる。

リヒトを目の当たりにして、一瞬気圧されていた。

そんな事実を振り払うかのように頭を振り、リラは虚勢を張って宣言する。

「決まってるでしょ。私の家よ」

「はあ？」

リヒトの素っ頓狂な声を最後に、格納庫から二人の姿が消えた。

*

*

*

「ホラホラホラ退いて退いて！肉団子に踏みつぶされたく無かったら早急に退いてー！」

痴話喧嘩の次に響いてきた声は、甲高い少女の声。

フェリアの周りに居た技術者達も、何事かと格納庫入口を振り返り見た。

「肉団子で……」

「そんなモンじゃない？悔しかったら痩せなよ、御主人！」

ぼやく男の恰幅は、確かに肉団子と言えたかもしれない。

それを気にしてか、当人も付き従うメイド服の少女に文句を言わず、困ったように頭を掻くだけであった。

奇妙な二人組であり、格納庫の空気にはそぐわない二人でもあった。

その正体を知るフェリアは、ようやくか、と一人呟く。

「やれやれ、長い道のりだったよ」

フェリアを見つけて、開口一番に男は言った。

「御主人は贅肉の付き過ぎで動くのがダルいだけでしょ！もっと運動しなよっ！」

横でびよこびよこと嬉しそうに跳ねる少女が、頭につけたネコミミを揺らした。

変わらぬ二人を見て、フェリアは思わず微笑を浮かべる。

「遅かったなウエマツ。そして、フーもよく来た」

本来、召集されたのはウエマツだけだったのだが、フーも同行していた。

同居人——否、唯一の家族を置いて行くことは出来なかったのだろう。

知り合いに預けるとは言えど、ウエマツは人付き合いが出来なさそうなタイプの外見であり、近所に知り合いは居ないと見える。そもそも、ウエマツの居住する研究所はアパートの外装を持つてはいるが、実質、そのすべての部屋はウエマツが所有するものである。

「遅かったのは御主人が荷物を選ぶのに時間が掛かってたから…

…」

「言うな！」

フーの言葉を、ウエマツが途中で静止した。

不満げな顔を浮かべて頬を膨らませるフーに対し、ウエマツは必死の形相で訴えかけていた。

“頼むから言うな”、“フェリアにだけは知られてはならない”と。

それを本能的に感じ取ったフェリアが、密かにウエマツの荷物を点検しようと思うのと同時に、フーが大きな声を発した。

「うわー、凄いなコレ！何がどうなってるのさ？」

「わ、私に聞くな！」

フーが訪ねたのは白衣の一般研究員で、存分に狼狽えたさまを見せていた。

それを見てからからと笑い、フーは一先ず満足するのであった。

「……しかし、本当にこれは、何をどうしたんだい？」

ウエマツは自分の頭上に存在するグライNDERを見上げた。

通常のジョーカーマシンよりも幾分か小さいとはいえ、人間とは比べるべくもない。

「見たところ、追加装甲の類にも見えるけど……」

グライNDERの両手両足には、見慣れぬパーツが取り付けられていた。

未だカラーリングされていない鉄の塊であるが、見たところは確かに、装甲板のそれに近い。

だが、それよりも少しばかり厚く、また、先細りした特徴的なフォルムを持っている。

それらが四肢に取り付けられ、グライNDERを幾ばくか大きく見せていた。

「ふふん、まあ、秘密兵器という奴だ。機会があればお披露目しよう」

「うーむ、果たして装甲なのかそうでないのか……或いは、もっと別の……」

一人想像を膨らませるウエマツを見て、フェリアは満足げに鼻を鳴らした。

そして改めて、“息子”同然のグラインダーを見上げる。

——それは、彼女がデイブレイクに居た頃からの付き合い。

最早腐れ縁とも言える仲であり、同時に、彼女がここに存在するための切っても切れない理由の一つなのだ。

「違うよなあ……グラインダーのスピードを殺すような装備をする訳が無いし……」

未だグラインダーを見上げたまま考察を続けているウエマツを見て、フェリアは苦笑する。

やはり、彼も優秀な科学者なのだ。

好奇心と探究心は、如何に“戦争嫌い”と言えども切り離せるものではない。

“好奇心は猫を殺す”とも言うが、この男は一度殺されたぐらいじゃあ諦めないだろう。

「わからん……ああ、首が痛くなってきた」

「それよりもだ」

諦めて視線を落とし、首を抑えるウエマツ。

そこに機を見て、フェリアが切り出した。

「ベルランドとアイリの機体については考えているのか？正直、私はグラインダー以外はあまり手伝えそうにないのだが」

「それについてはもう、心配ナッシングだよ」

「御主人！」

得意げにウエマツが指を振ると、何処からともなくフーが歩み出

た。

その手には見慣れぬ紙束があるが、おそらく資料であろう。
それをフェリアに手渡して、フーはまたどこかへと走り去っていった。

悪戯好きのフーのことだから、また技術者が研究員をからかいに行つたのだろう。

「アルカナマシンを作るうえで必要な事、物は調達済みさ。あとは君のお墨付きを貰うだけって訳」

「成程」

一言呟くと、フェリアは手元の紙束へと目を落とした。

確かに、筋の通つた形で“アルカナマシン”を作ろうとしていることがうかがい知れる。

元々は軍属の科学者とは言え、ここまで独学で突き詰めたのは偉業であろう。

中でも、フェリアはある項目に目を奪われた。

「^{イジー}簡易アルカナオーバー”……?”

「それが目玉さ」

食いついたフェリアの顔を見て、嬉しそうにウエマツが続けた。

「グライNDERのアルカナオーバー、時止め。こいつに準ずる能力を付加してやろうってことさ」

「ジョーカーマシンのシステムとして搭載する、と」

「勿論本物のアルカナオーバーと比べれば弱くなるけど、その分負担も少ない筈。アルカナオーバーが“覚醒必殺技”だとしたら、こっちは“必殺技”って感じかな」

ウエマツの喩に頷くことは出来なかったが、理には適っているとフェリアは考える。

その実現方法も資料には載っていたが、それには問題もあった。

「……この、“発動にはコマンド入力を要する”っていうのは何なんだ？」

「ああ、それは僕のとって置きのコマンドで、レバーを半回転――」

「御主人、ふざけるのもいい加減にしまっ！」

言おうとした瞬間、何処から再びフーが現れ、その頭を強打した。そのままウエマツのことを見ようとしてもしないことから、いつもの事なのであると察する。

手にした紙束と地面に転がるウエマツを交互に見て、フェリアは呆れた口調で言った。

「……全部書き直して提出。今日中にだ」

「待つて！今日は見たいアニメの再放送が――」

「却下だ」

取りつくしまもないとは、このこと。

直後のウエマツは、ハイスクールで留年した男子学生のように絶望の表情をしていたという。

*

*

*

「まったく、本当にベルランドの許可貰ったんだろうな？」

「勿論。アンタとは違って用意周到で頭の回る女ですから」

厭味ったらしく言うリラにも慣れた様子で、リヒトは大型バイクの座席に深く腰を下ろした。

その隣には、取り付けられたサイドカーに座るリラの姿がある。完全防備のフルフェイスヘルメットを用意する周到なさまに、リヒトは怪訝な目を向けた。

「……なあ、本当にサイドカーで行くのかよ？ちよーっと時代が古すぎるんじゃないか？」

「五月蠅いわよ！アンタは黙って運転してればいいの！」

リヒトは最初からバイクで行く気だったのだが、リラがそれを拒否したのだ。

恐らく、リヒトと密着せざるを得ないからだろう。

が、彼女を連れて行くためには歩きか、バイクかの二択であり、リラの家までの距離はそれなりに長い。

苦悩の末に、リラはどこからかバイクのサイドカーを持ち出してきたのである。

「それにしても、こんなモンどっから……」

リヒトが感心よりも呆れのほうが比率の高い声を漏らす。

リラの表情はそのフルフェイスヘルメットのせいでうかがい知れないが、きつと不満げな仏頂面なのだろう。

「さあ、行くわよ！」

「へいへい、分かりましたよ……っ」と

小さな女王様の号令を受けて、リヒトはバイクを走らせ始めた。気筒から吐き出される煙とともに、バイクは風を切り始める。

それと同時にリヒトの全身を覆うのは、風の流れて出来た“膜”だ。この膜はバイクを包み込み、すべての物を置き去りにする快適な視界を提供してくれる。

同時に、速度という概念を思い知り、それを操る自分へと陶醉できる。

リヒトにとってのバイクとは、ジョーカーマシンと同様の“自分を活かすマシーン”だった。

「ところで、お前よお」

“そよ風”のように全身を覆うそれがやがて“突風”に変わる頃だった。

リヒトが口を開き、リラに話しかけた。

「家まで何をしに行くんだ？忘れ物でもしたのかよ」

「アンタには関係ないでしょ！」

しかめっ面——であると思われるリラが、怒声を飛ばした。

が、リヒトもこの高速で移り変わる景色に退屈しており、なお、話しかける意思を崩さない。

「オイオイ、俺はテメエの護衛だぜ？ミッション内容ぐらい知る権利はあるだろ？」

「知らないわよ！」

「お前だつて自分の知らない事情で振り回されるのは嫌だろ？」

リヒトのその言葉に、リラは低く唸った後、観念したかのようにため息を吐いた。

「……そうよ、忘れ物よ！これで満足！？」

「いーやまだだね。果たして一体何を忘れたのか」

「そこまで教える義務は無いわ！」

これで終わりだ、と言わんばかりにそつぽを向くリラに向かって、リヒトは底意地の悪い笑みを浮かべていた。

「お前、相当大切な物を家に置いてきたな」

「……！」

その一言に、リラの身体が一瞬跳ねる。

ビンゴ、と指を鳴らすリヒトに、リラは益々不機嫌になってしまった。

だが、その態度こそが証拠を提示しているようなものである。

「こんな非常事態になつていても、危険を承知で取りに戻る物…
…替えの利かない何かだな」

尚も続くリヒトの考察に、リラは完全に閉口している。

それは全て当たっているからなのか、単に不機嫌なだけなのかは分からないだろう。

だが、リヒトには確信に近いものだと思っていた。

だから、その言葉はこう締められる。

「恐らく、テメエが“戦場ジャーナリスト”なんて危ねえモンを

やっつて理由……その根幹に根差す何か」

「……アンター!!」

リヒトの言葉に、リラが怒声を放った。

今までの怒声とは違い、もっと強い感情的な怒りの言葉である。

リラのその様子に、リヒトはおどけて見せる。

「おお、怖い怖い。これぐらいはやり返させて貰っていいじゃないか。これ以上は何も言わないからよ」

それきり、リヒトは閉口した。

しかし、何故か上機嫌なリヒトは鼻歌を歌いながらバイクを走らせる。

調子はずれなBGMを聞きながら、リラはぎゅっと両の手を握りしめた。

——大丈夫、バレちゃいない。

これ以上無い絶好のチャンスを逃すわけにはいかないのだから。嫌に力の入った視線を投げると、脳裏には彼の姿が過る。

そしてその姿を幻視するたびに思うのだ。

「……絶対に、真相を掴みとる」

心の中で固く誓って、リラは今しばらくはリヒトの鼻歌を我慢することにした。

二人の旅程は、既に半分を切っていた。

*

*

*

「何とも強引な女性だ……これでは事後承諾ではないか」

地方守備隊機動兵器駐屯基地の隊長室。

その部屋の主であり、この基地の事実上の主であるベルランド・
グイスビューがため息を吐いた。

彼の机の上にあるのは一枚の紙切れ。

それは作戦会議室に残されていたものであり、宛名にあった“ベル
ランド”の文字を見た副官が届けたのだ。

「俺の所へ届かなかったらどうする積りだったんだろうな……いや、それは邪推か」

中身には、たった一言だけ書かれている。

外出してくる、夜までには帰る、と。

文字は女らしく丸まっていることから、書置きの内容はリラが書いたことがわかる。

何せ“宛名”はあれど、“差出人”の名はどこにも書かれていなかったのだ。

「ロウ、リラ・アーノートについての情報は揃ったか？」

「こちらに」

隣に控えていた副官——ロウが、資料である紙を数枚手渡した。

そこにはリラ・アーノートの大まかな経歴やパーソナルデータが載っている。

本来、ベルランドはこのようなことをするのを嫌ってはいたが、状況が状況のため、止むを得ずにそれを取り寄せた。

彼の内心を渦巻いているのは、疑心である。

果たして、リラ・アーノートがデイレイクの構成員でないという証拠があるのか――

「……カレッジを出るまでには何も変わったところはない、が」

含みを持たせて、ベルランドは次の項をめくった。

「ここだ。まず、彼女の弟が亡くなっている」

そこに表示されていた事実は、リラ・アーノートの弟が戦災で亡くなっているのだ。

それは彼女を戦場ジャーナリストという仕事に導くには易いことだったのかもしれない。

しかし、ベルランドは一点、奇妙な項を見つけて瞠目する。

「――当時指揮していた隊は、第708陸隊……？」

第708陸隊。

それは当時ベルランドが隊長として指揮を執っていた陸隊であり、機動兵器が満足に配備されていなかった頃の隊だ。

それ故にベルランドの記憶は薄かったが、確かに、戦っていたことは思い出せる。

が、それこそが新たな疑念の種。

「馬鹿な……戦闘を行ったあの場所は更地だった。一般人が居る

筈がない……」

疑念は更なる疑念を生み、ベルランドは頭を抱えた。リラの経歴に何もないければ、まだ楽だった。だがしかし、そこには無視できない“謎”が残されている。

「これは、俺達にも関係する話だな」

リラが帰って来た時に、少しばかり話を聞いてみよう。そう決意したベルランドは、再び資料の項をめくった。他には特に変わったところはなく、職業以外は至って普通の女性であるといえよう。

ベルランドは張りつめた息を吐き、首を一度鳴らした。

「大変ですね、隊長」

「全く、損な役回りだ」

ロウのねぎらいの言葉に、ベルランドは憂いを交えて答えた。

「“三英雄”も、楽ではないものだ……」

その呟きに、ロウが目を鋭く光らせたのは、誰も気づいていなかった。つた。

そう、本人でさえ——気づいてはいなかったのだ。

「デイブレイクの侵攻までに全て整える。資料を引き続き頼むぞ、ロウ」

ベルランドの言葉に、ロウは微笑で返す。

「勿論です……隊長」

第十四話 疑念（後書き）

ようやく一章も終わりが見えてきたような、そうでもないような…。
とりあえず、ここからは一気に加速したいと思います。

第十五話 ウィルス

「——ええ、リヒト・シュツテンバーグは基地を出ました。数時間は帰ってきません」

誰も居なくなつた広い場所で、一人の男が携帯端末に耳を当てていた。

その口調は重く、仄暗いものだ。

『ならば、こちらにも相応の働きを見せましょう。勿論……』

「はい。私も動こうと思います。下手は打ちません」

自信を持って、男は答えた。

それでも通話相手は心配なのか、一度唸ってから言葉を続ける。

『いざというときは、私の事は御内密に……』

その言葉に、男は立場を理解する。

決して信用されてはいない。

けれども、彼らにとって自分が有効な“駒”であることは揺るがない。

「勿論です。Mr・ルチアーノ」

いいように利用されている。

だが、それでも構わない。

彼の使命は、決意は、その程度のことでは揺るがない。

かつて、彼は一度死んだ。

しかし、大切な物全てを失いながらも地獄の底から蘇った。

彼は思う。

のうのうと生きながらえる、憎きかの男に裁きの鉄槌を。

復讐。

それこそが、彼を生かした唯一の灯。

その灯が、今、復讐の炎となって姿を為す。

たとえそれが、自身をも焼き尽くす地獄の業火だと知っていても。

電話を切ると同時に、彼は改めて目の前の存在を見上げた。

巨大な瘦躯は黒く、銀と赤の線が走行板を走る。

剣のような意匠を込めた頭部には、今は光らない橙の双眸がある

筈だ。

「第三世代ジョーカーマシン、キリング。それにアルカナマシンを搭載した、云わば“擬似アルカナマシン”」

彼はそれに搭乗するであろう男を思い浮かべた。

同時に、再びその心に憎悪が首を擡げる。

「……待っている。直ぐ、殺してやる」

呟く彼は、後ろでそつと扉を開ける小さな人影を知っていた。

だが、それを追う事も、敵対することもしない。

何故なら彼女はメッセンジャー。

この場に怨敵を誘き寄せるための重要な伝達手段だからだ。
そして、彼が待つ人間はたった一人。

「ベルランド・ヴィスビュー……！！」

*

*

*

バイクを降り、二人は何の変哲もない街中を歩いていた。

辺りに立つのは古いアパートメントばかりであり、日の差さない
通りは薄暗く、不気味だった。

先ほどからリヒトは、背筋が凍るような寒気を感じていた。

それは日が差さない所為ではなく、連れ立った一人の女性によっ
て生み出されているもの。

「なあ、リラ。まだ着かねえのかよ」

「……………」

「リラ？リラさん、いやむしろリラ様？せめて何か言ってくれよ」

険悪な空気は、最早両者の間に言葉すらも生み出さない。

その空気に耐えられていたのは、バイクの存在があったことをリ
ヒトは痛感していた。

彼自身、リラを探るような言葉をかけたことは後悔していない。

元とは言えば、リラが必要以上にリヒトを馬鹿にしていたことから始まったのだ。

少しばかりからかって、それは自業自得というものである。子供のような考えからの小さな復讐ではあるが、当初リヒトはその事を微塵も気にしてはいなかった。

「まったく、何も喋らなくなっちゃった。これじゃあ家までどれくらいか聞けねえ……」

忘れていたのは、その後の事後処理。

一度互いを悪く思えば、その溝を埋めるのはてとつもなく難しいものだ。

運の悪いことにリラ・アーノートという人間は、好意と敵意が顕著に表れる人間であるらしく、そのことがリヒトにため息を吐かせた。

「面倒臭いな……はア」

そういえば、トリヒトは思い出す。

ウエマツが基地に戻るらしいが、そこにフーの姿はあるのだろうか。

恐らく、あの外見からして知り合いが居る筈もなく、連れてくるのだらうと自己完結。

あまりにも険悪な空気は、リヒトに思考を放棄させた。

もともと楽観的な思考回路を持つリヒトである。

いつしか護衛としての考えを隅にまで追いやり、無心でリラの後ろを歩いた。

それが慢心だったといえ、そうなのであろう。

ディブレイクの動きは早い、まさか町の中で事を荒げることは

無い。

その考えは、前方の路地で待つ一人の男の気配を感じ取ることを不可能にさせていた。

「きゃっ!？」

路地に差し掛かった瞬間、眼前でリラが小さく悲鳴を上げた。何事か、と問いかける前に、リヒトは素早くリラの手を掴もうと手を伸ばす。

その手は届かず、リラは横合いの路地に消えた。

「何者だ!？」

「——来たか、リヒト・シュッテンバーグ」

路地を覗き込んだリヒトを待っていたのは、見知らぬ作業服の男と、口元を覆われ拘束されているリラの姿。

邂逅は一瞬。

しかし、リヒトはすぐさまに反応し、素早く腰の拳銃へと手を伸ばした。

が、それよりも早く男はその手のナイフをリラの首元へ運ぶ。どうすることも出来ずに、リヒトはその伸ばしかけた手を挙げた。

「デメエ……デイブレイクの者か？」

「分かってるじゃねエか。まア大人しくしてな」

言うと同時に、作業服の男がナイフとは別の手で拳銃を抜いた。それに反応することは出来たが、今のリヒトにはどうすることも出来ない。

銃口は素早くリヒトを向いた。

「——ッ!?」

が、その銃弾がリヒトを挟む事は無かった。
その耳元を掠めた銃弾が、後ろで何かに当たり、空気の抜けるような音が続く。

思わず振り返ったりリヒトの目に映ったのは、倒れ臥す男の姿であった。

「一体、どういう事だ……!？」

同士討ちか、仲間割れか。

混乱するリヒトに、男は静かに告げる。

「俺の名前は……知ってるよなア？」

男は深めに被った帽子を取り払い、その金髪を靡かせた。
端正な顔立ちに浮かぶのは、犬歯を覗かせる獰猛な笑み。

碧眼は愉しそくに輝き、その声はどこか他人を馬鹿にしたような響きが含まれる。

「まさか、お前が」

そして、その声に、リヒトは聞き覚えがあった。

二度の邂逅はいずれも突然。

そして、此度の邂逅もまた、突然の出来事であろう。

尤も、彼にとっては初めて、その姿を見ることとなる相手。

「ファウスト、なのか……!？」

「——正解だ。会えて嬉しいぜ、“英雄”」

一人は目の前の怨敵を睨みつけ、もう一人は面白そうに口の端を上げる。

遙か南の密林で出会って以来、二人は再会した。

*

*

*

「……“簡易^{イジー}アルカナオーバー”の理論については以上かな。何か、質問は？」

ウエマツがそう締めくくり、この場に居る二人は同時に手を挙げた。

不服そうに眉根を寄せるウエマツを気にも留めず、ベルランドは率直に告げる。

「本当に実戦レベルの運用は可能なのか？グライNDERのアルカナオーバーでさえ、使用後の反動が酷いと聞く」

「それに、戦闘中に乗り手が精神的ダメージを受けるのは致命的なのよあ？」

「そこは、まあ、安心してくれ」

曖昧に笑うと、ウエマツは床に置いてあったダンボールを会議室の机の上に上げた。

中身を取り出し、それを自慢げに掲げてみせる。

それは、近未来的デザインを伴ったパイロットスーツであった。

「これは“ウエマツスーツ”。パイロットに掛かる魔力的負担を多少緩和してくれる凄いスーツさ」

「しかし……これは……」

ベルランドがそれを見て冷や汗を浮かべるには、理由がある。

第一にそのスーツは、やたらと身体ラインが浮き出るウェットスーツのようなものであった。

そして、何よりもデザイン性を疑うのは胸元に大きく開いた穴である。

「あ、安心してよ。これは女性用で、男性用もきちつと作ってるからさ」

「やーん、素敵ねえー」

とは言えど、ベルランドの不安要素は取り除かれない。このようなもの、果たして誰が気に入るのであろうか。少なくとも隣でくねるアイクは気に入っているようだ――

「御主人っ!!」

突如として開いた会議室の扉から、大声が発された。

そこに立っているのは、息も絶え絶えな様子のフーである。

一同に緊張が走る。

「どうした、フー？何をそんなに慌てているんだ？」

「それが、ハア、大変なコトに……はあ」

「いいから落ち着いてよ。一体何が大変だって言うんだい？」

ウエマツが落ち着かせると、フーは一度俯いて呼吸を整えた。
もう一度問おうとウエマツが口を開きかけたとき、フーは言い放
つ。

「キリングが……ベルランド様のジョーカーマシンが奪われたん
だよっ!」

「——ッ!」

その言葉の意味を誰よりも理解できなかったのは、当の本人であ
るベルランドであった。

一体、誰が、何故、キリングを。
思考のループがその思考を取り留めないものへと霧散させていく。

「兎に角、対策を。一体誰が、とかはいい。どうするか、が問題
だ」

最中、一番早く行動に辿り着いたのは、意外にもウエマツ。
誰よりも冷静に、誰よりも早く言葉を紡ぐ。

「ま、要求を聞かないことにはどうしようもないけど……とりあ
えず私は自分の機体を動かせるようにしておくわあ」

その言葉に賛同するのは、アイリ。

借りるわよ、と断ってからウエマツが手にしたままであった女性
用ウエマツスーツを引っ手繰る。

そしてそのまま会議室を出て、早足に己の機体の下へと向かった。

最中、ベルランドはたった一つの可能性に行き当たっていた。
記憶の中に在る、沈殿した何気ない記憶。

まるで気にすることも無い何気ない記憶の中に、ヒントは隠されている。

そう、彼は違和感を感じていた。

——果たして、彼は何時から、自分の隊に存在していたのだ？

*

*

*

「——大まかな事情は察した。要するに、俺が外に出た隙を狙って暗殺しようとした訳だな？」

「説明が楽で助かるぜ」

「……どうでもいいけど、暢気ね、アンタら」

リヒト、リラ、ファウストの三人は、リラの家が集まっていた。フローリング張りのリビングルームにて、各員が好き勝手に座って居る。

「で？何でデメエはちゃっかり仲間気分なんだ？」

「んなモン理由はいいじゃねエか。折角この俺様が協力してやるうってんだからさア」

ファウストはそうはぐらかし、ヘラヘラと笑っていた。

が、リヒトからすればそれは冗談ではない。

身内に敵を抱え込むことの怖さを、かつての戦場で経験して来たからだ。

だからこそ、リヒトは呆れたように溜息を吐く。

「付き合つてられねえな……俺達に行くぜ。リラ」

「ちょ、ちよつと！」

リヒトは話を一方的に切り上げようと立ち上がる。

フローリングを大股で踏みつけながら玄関へ向かうリヒトに、慌ててリラが続こうとした。

「やめとけ。敵は外だけじゃねえ。内にも居るんだぜエ」

だが、その背後から立ち上がりぬまま声をかけるのは、ファウス
ト。

かちやり、という金属音と共に擡げられるのは、銃口。

その気配を感じて、リヒトは苛立たしげに振り向いた。

「……そいつが本性か？それとも、俺を馬鹿にしてるのか？」

「インヤア、別に馬鹿にするつもりはねえよ。だがな、コレだけは言える」

銃口と眼光を光らせ、ファウストが続けた。

「お前を倒すのは、この俺だ。だが、デイブレイクに与する者の一人としてお前を見逃す訳には行かねえ」

「何が言いたい？」

「ギブアンドテイクって事だよ。俺と協力して街を抜けるか、ここでくたばるか、のな」

その言葉に偽りは無い。

それは何よりも、ファウスト自身の瞳の色が物語っていた。

ジョーカーマシン、そしてアルカナマシンを扱う者同士における、奇妙な、絆とも呼べる何か。

戦場において見られるその現象は、今も尚、リヒトの心へと訴えかけていた。

リヒトは息を呑む。

デイブレイクの事情を然程知らないが故の逡巡。

裏切りに値する行為をやったのける、ファウストという好敵手への疑惑。

しかし、銃口だけは嘘偽り無くリヒトへと死のプレッシャーを与え続けていた。

ひりついた喉を無理矢理に抉じ開け、リヒトは声を絞り出す。

「……仕方ねえ。ここは、共同戦線ということにしておいてやるよ」

「助かるぜ」

満足気にしたり顔を浮かべるファウストに比べて、リヒトは心底疲れたような顔で俯いた。

銃口を下ろすのと同時に、リヒトは再びソファアへと戻り、腰掛ける。

「……いいの、リヒト？アイツ敵じゃないの？」

「銃持ち出されて脅されたら、あの選択肢しか出ねえだろ」

リラの耳打ちに、呆れたようなため息を吐きながらリヒトは頂垂れた。

不承不承といったふうであつたが、意味の無い憂いだと判断したのか、リラは手近な椅子に腰掛け傍観の態勢に入る。それを横目で眺めながらリヒトが続けた。

「で、街にデイブレイクの刺客が居るって話だが、一体何処へ逃げて、何が出来れば俺の勝ちなんだ？」

「随分と冷静だなア」

「腹あ括つたまでよ。共同戦線とした以上、心中する気概で行くんで、ヨロシク」

「男と心中はイヤだなア……」

言いながら、ファウストは笑っていた。
リヒトは思う。

この男の姿、どこかで見たことがあるような気がする——

「奴さんの作戦はシンプル。サーチアンドデストロイ見敵必殺つてやつだなア。勿論刺客も全員が戦争帰りの手練揃いだ」

「ということは、既にこの場所は？」

「ああ、割られてるんだなア、これが」

思わずこめかみを押さえるリヒトに対して、ファウストはあっけらかんと笑った。

「でもなア、だからこそ出来る作戦つてのもあるんだよ」

言ってみる、と視線で促すリヒト。

ファウストは意地の悪い笑みを浮かべた。

瞬間、リヒトの脳内に嫌な予感が走り、思わず身震いをする。

「罠作戦、って知ってるかア？」

*

*

*

軍基地の外の森は静寂に満ちている。

しかし、それはいつもの静寂ではない。

生き物の一つも居ない森の静寂は、まるで森が死んだようだった。

一歩踏み出す。

冷たい風が頬を撫ぜ、ベルランドの意識は急速に冷えていった。

目の前に立つのは、第三世代ジョーカーマシンと銘打った己の愛機、キリング。

月の光が鉄に反射し、敵意となってベルランドを見下ろしていた。

『……来たか、ベルランド・ヴィスビュー』

外部スピーカーから、若い声が響いた。

予想通りの展開に、ベルランドは思わず息を吐く。

「ロウ・ローレント。何故だ？」

『何故……と言われれば、何故だろうな』

重苦しい声はどこか辛そうに響いた。

が、ロウはそれを気にする様子も無く、淡々と紡ぐ。

『そう、ただ、人間の弱さというものを感じただけだ。だから、俺はこれにしか頼れなかった』

「……………」

『解るだろう、貴様にも。かつて戦場で恋人を失った貴様になら』

独白のような言葉が続く。

その意味を理解しているのかは定かでは無いが、ベルランドは黙って聞き続けていた。

『そう、死んだのはお前が悪いんじゃない。ただ、戦争が悪かったんだ』

「……………ならば、早々にキリングを降りろ。そうすれば今回の事は

」

『不問にする、か？』

ロウが言うのと同時に、キリングの巨大な身体が動いた。その手に持ったジョーカーライフルをベルランドの横へと撃ち込んでみせる。

衝撃は地面を軽く揺らし、土煙と土砂を高く舞い上げた。ベルランドの身体が跪く。

『これで分かっただろう。俺はもう、後戻りは出来ない』

「……………そのようだな」

だが、と続けて、ベルランドはすくりと立ち上がった。キリングのメインカメラを見据える目には、恐れは無い。

「聞かせる。貴官ほどの人間が、何故、こちらに刃を向ける？」

『復讐さ』

さも当たり前であるかのようにロウは告げた。
だが、ロウの経歴を知るベルランドは首を傾げる。

『そう、書類の記載上は俺は孤児。だがな、それは真実ではない』
「文書の偽造……馬鹿な」

静かに、ベルランドは瞠目した。

当時、戦時下において慌しい様相だったとはいえ、文書に関してはきつちりと定められて居た筈だ。

事実、ベルランドが指揮官に昇進したのも上官が文書偽造で更迭されたからに過ぎない。

『俺は孤児という戸籍を手に入れる前は、家族を持っていたのさ。それも、戦争で消えちまったがな……』

「ならば、何故俺を狙う？」

『決まっているだろう。お前が、仇だからだ』

キリングが一步踏み出した。

木々を叩き潰し、地響きのような音を鳴らせる。

それはまるで悪魔の呻き声のように聞え、ロウは思わず苦笑した。
修羅の道へ堕ちる者には相応しい一步である、と。

『これ以上の問答は無用。ただ、お前を踏み潰し、俺は次へ進む』
「次だと？」

『答える必要は無い』

何も語らず、何も感じず、何も考えない。

ただ只管に無心としたロウは、目の前の怨敵を踏み潰そうとキリ

ングを動かす。

それは戦場で引き金を引くよりも容易く、圧倒的に、人の命を奪う行為。

『リレイア姉さんの仇、討たせて貰おう』

ベルランドにキリングの巨大な影が掛かる。

月明かりを背後にしたその姿はまるで悪魔のようで、ベルランドは自嘲気味に笑った。

最早自分に出来る事は何一つ無い。

静寂の中、目を閉じ、静かに次の瞬間を待った。

「……已むを得ん、か」

ベルランドに、恨みの鉄脚が振り下ろされる――

第十五話 ウィルス（後書き）

予想以上に長くなりそうで焦っております。
ちよっとテンポアップして行きたい今日この頃。

第十六話 赦されざる者

リヒト・シュッテンバーグはその両手を拘束されていた。

しっかりとかけられた手錠を鎖で繋ぎ、それを握るのは作業服の男ファウスト。

リヒトは憎憎しげな、ファウストは嬉々とした表情を浮かべている。

「しかし英雄がいいザマだなア。このまま引き渡しちまおうか」
「洒落にならねえことを言うんじゃねえよ……」

すっかり日も落ち、月明かりと壊れかけの街灯だけが唯一の光源である。

足元は罅割れたコンクリートで、リヒトは両手を使えない故にバランスを崩しながら歩いていた。

既にリラのアパートメントからは大幅に離れている。

ここまでデイブレイクの暗殺者に出会わなかったのは幸運と言う他無いだろう。

リヒトの試算では、時計の針が天辺を指すまでには帰ることが出来る。

尤も、それにはリヒトの後ろに存在するファウストが裏切らないという条件が必要なのだが。

「しかし、どういう心変わりだっただ？ テメエが俺に協力するってのは」

リヒトにとっては仇敵であり、今もそれは変わらない。

だが、ファウストにとってどうなのかは彼には分からない。

「だから、言っただろーが！ お前を殺すのは俺で、デイブレイクにも協力しねエとなんねェんだよ…… あーッ！ 何だよ、もう！」

ファウスト一人で結論に達し、頭を掻き毟った。

その姿を横目で見やり、リヒトは一つの言葉を思い出す。

リヒトとファウストは、フェリア曰く、似たもの同士であるという話を――

「いや、無いな」

「あ？」

「こんな猿みたいな野郎が俺に似てる訳ねえじゃねえか」

「喧嘩売ってるのか！ この野郎！」

両手が使えないのをいい事に、ファウストが軽くリヒトをどつく。前のめりに転びかけたリヒトが、お返しとばかりに踵をぶつけた。互いが互いを睨みつけ、牽制しながらも脚は前へと進んでいる。リヒトが手錠で繋がれている状況であろうとも、フェリアがこの状況を見たらこう言うだろう。

お前ら、仲良いな、と。

「ファウスト戦闘員」

「……ッ！」

その声は突然、裏路地に響いた。

声と同時に角から現れるのは、サラリーマン風の男。
一見何処にでも居る風貌だが、その眼光は間違いなくサラリーマンではない。

恐らく、これが“暗殺者”。

「戦闘員じゃねエ。俺はもう戦闘隊長だ」

「それは失礼」

ファウストが敵意を向けながらも、暗殺者は飄々と言つてのけた。
そしてファウスト以上の威圧で返す。

「しかし……リヒト・シュッテンバーグには暗殺指令が出ていた筈。何故、捕らえているのですかな？」

「あア、そのコトか……実はさっき、隊長宛に指令変更の令が出たんでなア。お前が知らないのも無理は無い」

「左様で」

納得したかのように道を開ける。

が、リヒトにはその顔は信じたようには見えていなかった。

だから、ファウストに手錠を意図的に揺らすことで合図する。

男の隣を通ろうとした瞬間、声が發された。

「……嘘はいけないな、ファウスト戦闘隊長」

「——ッ！」

男の手に光るナイフが、ファウストの喉笛を狙い放たれる。

リヒトは既に手錠に繋がれている為に反撃の手段は無い、と考えたのである。

故の、ファウスト狙い。

だが、それは男にとって唯一にして最大の誤算。

「くたばれ」

「――なアッ!？」

男は、リヒトの攻撃に反応できない。

袖口に隠されていたナイフを抜き放ち、男の急所を的確に突く。そう、暗殺者は一つの可能性を無いものにしてしまった。

リヒトとファウストが内通している、という可能性だ。

結局その結論に行き着かないまま、男は自らの血溜まりに倒れる。

「危ねエ危ねエ……首の皮一枚つてのはこのコトかア？」

「何か意味違う気がするぞオイ」

ファウストは体を逸らし、男のナイフを紙一重で回避していた。

ゆっくりと上体を戻しながら、額に浮き出た冷や汗を拭う。

リヒトは血を暗殺者の男の着ていたスーツで拭い、再び袖口に戻して言う。

「まあ、まさか俺じゃなくテメエが“囧”だとは思わないだろうな」

「つか、まず俺がお前と内通って時点で誰も気付かないだろう」

あっさりと外れるように浅く浅く手錠をかけ、ファウストは再びリヒトの後ろについた。

こうして再び両者が歩き出す頃には、先ほどの暗殺者が死んでいることが知れ渡るだろう。

だが、それこそが作戦の目的の一つ。

混乱で二つの進路を覆い隠すこの作戦に、死角は無い。

唯一綻びの可能性があれば、別行動を取ることと為ったり

ラが存在だが――

「ま、いいか。多分大丈夫だろ、あの馬鹿女なら」

*

*

*

響いたのは轟音。

上がる土煙が辺り一帯を覆い隠し、その姿を視認させることは無い。
い。

薙ぎ倒された木々がみしりと音を立てて折れた。
その上に倒れている彼は眩く。

『……何が、起きた』

ジョーカーマシンの熱源反応探知で確認すれば、人間が一人その場に立っていたのだろう。

だが、そんなことをするまでも無く、ロウは己が倒されているという事を認識していた。

倒れた巨体――キリングは、緩慢に立ち上がる。

霧散し始めた土煙の先にあるのは、未だ見たことも無いジョーカーマシンの姿だった。

紫色と桃色で彩られた装甲は厚く、それに伴って巨軀を手にして
いる。

まるで西洋の騎士のような風貌であるが、その手に持つのはジョ
ーカーマシン専用の短機関銃。

頭部にある白光の一閃は、まるで品定めするようにキリングを見
つめていた。

カラーリングも相まり、その異質な風貌を際立たせる。

しかし、その肩に刻印された銃と剣のエンブレムがロウにその正
体を推察させるに至った。

『貴様は、フォードPMCの……』

「はぁーい、代表取締役のアイリ・フォードよお。よろしくねえ
？」

言葉と同時に、アイリの乗ったジョーカーマシンが投げキッスをす
る。

厳つい風貌で行われたその行為に、アイリへと地上からの通信が
入る。

『ふざけてるなら報酬は出さないぞ』

「あぁーんいけずう！ちよっとお茶目なアイリちゃんだっただけ
じゃないのよう……」

その声の主はベルランド・ヴィスビュー。

ロウの頭に導き出される事実は二つ。

即ち、ロウの攻撃は失敗に終り、ベルランドはまだ生きていると
いう事。

そしてそれを救って見せたのは、目の前のふざけたジョーカーマ
シンであるという事だ。

確かにロウはその展開を予見していたが、それでも、目の前にベ

ルランドが居る状況に耐えられなかったのだらう。

『……だが、コレを片付ければ済む話だ』

フォードのジョーカーマシンを駆逐し、ベルランドを亡き者に。ロウは決意を持って立ち上がり、戦闘の構えを取った。

今度は、ジョーカーマシンを相手取るための装備——キリングの代名詞である猛禽の爪を持って。

『そろそろ遊んでいる場合ではないという事を自覚しろ』

「もう、分かったわよお！」

その言葉を最期に通信が途絶える。

最早言葉は不要であり、ここからは戦いの意識を保つ事となる。

アイリはコックピットで一度深呼吸をし、己の愛機を呼んだ。

「行くわよー、“ダイヤモンド”ちゃん！」

言葉と共に、メインモニタに表示された将星を目の前のキリングへと向ける。

それと同時に動こうとするキリングに向けて、あっさりと弾を放つ愚行は犯さない。

キリングの特徴といえば、第三世代故の機体制動能力と、機動力だ。

故に、アイリは“一撃必中”の策を取った。

『見切れるか？』

キリングが横っ飛びに跳ねながら、大型ナイフを投擲する。たかがナイフと侮ること無かれ。

その柄に炸薬が詰め込まれていることにより、投擲の威力を跳ね上げたことを知っているのはアイリも同様のものだ。

「ああーん！危ないわよお！」

飛び跳ねるようにして、間一髪で回避した。

ダイヤモンドは重厚な装甲を持つ機体であり、本来は回避という行動に向いたものではない。

だが、アイリはあえて避けるようにしている。

それは果たしてどのような意味を持つのか——ロウは思考するが、直ぐにそれを放棄した。

キリングの軌道を予測し放たれた弾丸を、ナイフで弾く。

『如何な事を企もうとも、当たらなければ無意味だ』

「なら試してみるう？貴方の動きと、私の動き」

言葉と共に、ダイヤモンドが手に持った短機関銃を腰へと戻した。訝しげに思いながらも、好機を逃す訳にも行かず、キリングは接近する。

それが間違いであるという事を感じさせたのは、ダイヤモンドが背からその装備を手にした時であった。

『剣と……盾ッ！？』

「あ・た・り」

飛び掛ったキリングのナイフと、ダイヤモンドが左手に持つ白銀の盾が拮抗する。

二、三の火花が散る頃には、すぐさまにキリングは飛び退く。

その眼前を掠めるように難いだのは、同じく白銀の西洋剣であった。

『時代錯誤な武器を使う』

「いいのよ、私が気に入ってるんだからあ」

胸を張るように、威風堂々と言ったのけた。

ダイヤモンドの手にその武装が収まった結果、それが完成したような印象を受ける。

その姿はまさに西洋の騎士。

護るべき主を命懸けで護る、忠義の士である。

「今度はこつちから行くわよ！」

ダイヤモンドの巨軀が動く。

その脚に備えられたローラーが移動を助け、似つかわしくないほどのスピードを出していた。

盾を前に構えたまま、右手の剣を煌かせた。

『——ッ！！』

判断は一瞬。

迷わず、キリングは真上に跳躍した。

ダイヤモンドは、キリングの胸元に飛び込むと同時に一閃。

「良い判断だったわねえ」

キリングを抜き去る瞬間、アイリがそう笑った。

ロウが見たのは、剣の下で構えられた盾に隠された兵装。

まるで巨大な筒のようなそれは、間違いなく後退したキリングを貫いていただろう。

『隠しパイルバンカー……その盾は、防ぐためのものではないということか』

ロウはそう判断し、キリングを跳躍させた。
未だ止まらず、そのままUターンを敢行しようとしているダイヤモンド。

その右側面へ、弾丸のような速度を以って。

『消えろ!』

言葉と共に、右手四本の大型ナイフを突き出した。

左手に持つ盾は届かない。

右手の剣では防御できない。

ロウが微かに勝利を感じた瞬間だった。

『——っ!?!』

キリングに残るのは、装甲を貫通したような手ごたえでは無い。
もっと別の、複雑な機構を切り裂いた、あっさりとした感触である。

「ざ・ん・ね・ん」

『……何だと!?!』

それがダイヤモンドの“右腰”に戻された“短機関銃”であると
気付いた頃には——既に遅かった。

伸ばした右手に走る、強烈な衝撃。

コックピットにまで伝わる衝撃が、思わずロウの顔を顰めさせた。

「油断って、怖いのお。特に命懸けの戦いの中じゃ、一番にね

え？」

右腕を貫いているのは、ダイヤモンドが持っていた剣。それは杭のように地面まで貫き、キリングは動こうにも動けない。懸命にその剣を抜こうとするキリングに向けて、ダイヤモンドはその盾を構えた。

狙いは、行動の一切を不能にする腰。

「ちよつとばかり壊させて貰うわよお」

言葉と共に、盾のピルバンカー機構が起動する。機動から発動までの数秒。ロウは、脳内の言葉を反芻していた。

三英雄。

ルチアーノ。

猛禽。

第708陸隊。

仇。

フォードPMC。

——リレイア姉さんの仇。

『おおおおおおおおおッ！！』

「……！？」

キリングが手にしたのは、本来投擲専用の武器。

黒く怪しげに光る、最大火力の炸薬を詰め込んだ大型ナイフ“鷹爪”。

それを、己の右腕に突き立てる——

「くううつ!?!」
『があっ!?!』

両者を襲うのは、最大火力の爆発。

明らかに許容量を超えた火力は、その場にもうもうとした黒煙を上げた。

その爆発力の高さは、半ばから折れた剣と、宙を舞うキリングの右腕が照明している。

『う、ぐう……ッ!』

パイルバンカーのために盾を構えていたダイヤモンドに比べ、直接爆発したキリングの負担は想像以上であった。

右半身が既に黒く焼け焦げ、右肩付近に至っては融解した赤熱色が覗く。

コックピットを襲った衝撃も半端である筈も無く、ロウの身体に直接ダメージを与えていた。

最早まともな戦闘行動など期待できないだろう。

——だが。

『ぐうおおおおおおおおおおおッ!?!』

雄たけび。

そして、キリングがふらりと立ち上がる。

その光景を目にして、アイリは追撃も忘れて立ち尽くす。

「凄い執念ね。これは、もう……」

アイリには、ロウと対峙したベルランドの気持ちがわかっていた。

彼は実直で融通の利かない男だ。

故に仲間を大切にし、全てを背負い込むほどの気概を持っている。そんな彼が仲間に裏切られたのだ。

その衝撃は、計り知れない。

だが、同時に、彼は最後の瞬間までロウと対峙し、その身を案じた。

已むを得まい——その言葉は、彼の最後の決別の言葉だったのだろう。

「……上等だわ!!」

故に、アイリは奮い立つ。

それはデイブレイクもロウの意思も関係の無い感情。

友人を裏切った男に、ただただ個人的な制裁を加えるための怒り。

「裏切ったことを後悔しなさい!そして、潰れるッ!!」

『ああああああああああああああッ!!』

ダイヤモンド
“騎士”と“猛禽”。

二機のジョーカーマシンが、交錯する——

*

*

*

二人の男が仮初の手を取り、二機の巨軀が始めて交錯する瞬間。それと同時に、彼女は森の中へと足を運んでいた。

「……未だ決着は着かず、か」

轟音が聞え、遠くで土煙が上がる。

フェリアは呟き、その足を速めた。

やがて辿り着いた場所は、森の開けた場所に存在する古い教会。壊れかけの扉を開け、中央奥に存在する教壇を凝視する。

丁度、壊れたステンドグラスからの月明かりが差さない場所に、男は居た。

「お久しぶりです、フェリア・オルタナティブ」

恭しい一礼と共に、その細面を上げた。

片眼鏡、カソック、金色の短髪、張り付いたような笑み。

それはフェリアの知っている男と何一つ変わらずに存在し、それが、彼女の気を苛立たせた。

「……出来ることなら二度と会いたくは無かった」

「そう寂しいことを言わないで下さい。我々は、一度はその志を同じくした同志でしょう？」

「同志、か」

吐き捨てるように言ったフェリアは、その腰に手を伸ばした。

遊ばせていた将星を揺らぐ事無く、目の前の男の眉間へと合わせる。

「貴様のようなイカれた狂信者と同じなど、吐き気がする」

「これはこれは、手厳しい」

「なあ、ルチアーノ」

フェリアはその名を呼んだ。

カソックの男——ルチアーノが、優しく微笑む。

「私は、お前がやってきた事を赦す事は出来ない」

「はて、何の事やら」

「惚けるな」

銃声と共に、ルチアーノの頭髮が数本宙を舞う。

「演習での件、ブライアンコーポレーションの件、そして今回の騒動。全て貴様が仕組んだのだろう」

「私は彼らの背中を押したまでですよ」

その言葉は暗に肯定を示しており、フェリアは興味を無くしたように俯いた。

しかし、手に握る銃は未だにルチアーノを捕らえ続けている。

「……もういい。貴様は、消えるべきだ」

再び顔を上げたフェリアの目には、覚悟があつた。

だが、その瞳を真っ直ぐに見つめて、尚口の端を歪めるのはルチアーノ。

白い歯を見せて、彼は笑う。

「一つ、いい事を教えてあげましょう」

「……………」

現在進行形で銃把に掛かる力は強まっている。
引き金に掛けられた指はあと少しで銃弾を吐き出し、ルチアーノの命を奪う。

「ハインリッヒ・アウロラと“アウトオーダー外なる子”の居場所」

が、フェリアは引き金を引くのを躊躇った。
ルチアーノのその言葉は、まるで毒のようにフェリアを襲う。
筋肉が硬直したように動かず、意志とは関係なく一筋の冷や汗が流れた。

「彼らはデイブレイクのとある支部に囚われている。ええ、貴方が考えている通りの場所です」

その言葉は、福音のように。
だが同時に、悪魔の囁きに。

二様の側面を持つその言葉に、フェリアは――

「……ッ！」

手にした銃を、取り落とす。

自分が信じられないとでも言うように瞠目し、深く、深く呼吸を繰り返した。

その様子を見て、ルチアーノは笑みを深くする。

「それでいいのです。貴方にとって“ジョーカー切り札”、“ハインリッヒ天才”、“ア外なる子”は必要不可欠な存在なのですから」

「……………」

「では、失礼します」

恭しく一礼すると、ルチアーノは教会の奥、非常用の扉を開けた。肩越しに一瞥し、瞳でフェリアへと言葉を投げかける。

—— 忘れないで下さい。貴方は、そういう人なのですよ……。

開いた扉の外から差す光の筋が細く長くなり、消えるまでの間、フェリアは呆然と立ち尽くしていた。

不意に足の力が抜け、その場に座り込み、手には鉄の感覚。掌に収まった銃身の冷たさが、フェリアに一言だけ与えた。

「……リヒト。やはり私は、お前の傍には居られないようだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2516y/>

22ジョーカー

2012年1月14日18時53分発行